

吟遊詩人GMと決別するまで

中村一男

はじめに

はじめに

これから書く事はすべて私自身に起こった事である。だが、私を含めて登場人物は仮名にした。実名で書いては暴露本扱いされるだろうし、生々しくて書くことに躊躇が生まれる。しかしながら、仮名であっても私の関係者にはモデルが誰であるかは想像しやすいようにはしておいた。なので、ここに登場する人物は仮名であっても実在の人物で実際の出来事である。

テーブルトークRPG

テーブルトークRPG（以下TRPG）とは会話とサイコロによってゲームを進めて行くモノである。プレイヤーはPCと呼ばれるプレイヤーキャラクターを分身で登場させる。GM（ゲームマスター）と呼ばれるセッションを統括する者がいる。ゲームする事をセッションと呼び、同じPCでセッションを続ける事をキャンペーンという。TRPGを遊ぶための集団をサークルという。

この説明をしてから本編に入る。

キャンペーンのはじまり

はじまり

社会人になってTRPGを遊ぶ場所が欲しくなったのでサークルを立ち上げた。大学の先輩や後輩に声をかけて10人程度のサークルができた。そこで後輩の竹地がキャンペーンをするというので参加した。竹地のサイトにはこんな事が書かれていた。

『私はシダの会という仲間と一緒にTRPGをやっているが、昨今思うのは閉塞感があるということだ。いわば「新しい血が巡っていない」ということ。いつも同じメンバーということである。』

それならば、コンベンションという外部の人が集まる所に行けばいいのだが、竹地がコンベンションに行ったという話は聞いた事がなかった。竹地自身が新しいメンバーを引き入れた実績もない。他人を批判しても自らは改めるところはなかった。

『もっとたくさんの仲間とゲームをすれば、それはそれで経験になるし、演技の幅、さらにはGMとしてのアイデアや引き出しを増やすことにもつながると私自身は思っている。』

実際に思っているだけで竹地は実行しなかった、という事だった。

『愚痴ばっか言ってもあれなのだが。さて本題である。本TRPG黙示録（以下黙示録）は、長編を予定している。というか私は長編のマスターが専門である。』

「長編のマスター」つまり、自分がキャンペーンのマスターが専門だという。言い換えればまとめる事ができないということである。

『以前友人と酒を酌み交わしながら話したことがあるのだが、私は長編を作るのには向いているが、短編には向いていないと指摘されたことがある。それは自分でも分かっているが、その原因は完璧主義者の性格だ。ひとつ話を作るなら、その話を納得がいく形で終わらせるまで話を膨らまし、かつ終わらせる、という手法をとっているからだ。』

竹地が『納得がいく形で終わらせるまで話を膨らまし、かつ終わらせる、という手法』は言い換えれば「GMが納得しない限り話が終わらない」ということになる。ここで私が気づいていたらと悔やまれる。最後に竹地はこう書いている。

『とまあ、長々と書いたが、要は参加してくれているPLには参加する以上楽しんでもらえればそれでいいのである。入場料に見合う映画を見せられるか？ 私はいわば映画監督&脚本家とい

うところだ。ただ違うのはPLは役者でもあり、観客でもあるということ。しかも役者といっても、こちらの意図する脚本にはまったく目を通さず、思うままに演じる役者である。さてそれを上手く引っ張っていくのが仕事なのですが、果たしてどうなることやら。』

TRPGを遊んだ事のない方にお断りしておかなくてはならないが、TRPGのプレイヤーは役者ではない。映画や舞台を演じるモノではないという事である。ここまで読んだ私が竹地には吟遊詩人GMな要素があった事を見抜けなかったのは迂闊だった。誰しも自分の身近にいる人間が自分にとっての地雷であるとは認めたくないものである。

吟遊詩人GMとは自らの作り上げたストーリーにPCを押しこめるGMの事を指す。一方的に物語を語るころから吟遊詩人GMという名称が付いた。竹地はさらに別章を設けて約束事を書いていた。

『私が掲げるTRPGの原則に、「参加PLみんな平等」というのがある。』

その原則が守られたかというところではなかった。私がストーリーの中心にいたと感じる事ができたのは36回のセッション中2回だった。「参加PLみんな平等」とは言いつつも竹地がゲームマスターとしてPLを皆平等に遇しなかった。

2回目

私はキャンペーンに2回目から参加した。1回目に参加しなかったのはちょっと様子を見てから参加しようと思ったからである。作成したPCは竹地の指定した条件をクリアした16歳の女子高生だった。飛鳥ユウという女の子がこのキャンペーンでの私のPCに当たる。そして拳銃を武器に戦うキャラだった。（このキャンペーンのルールである女神転生・覚醒編のゲームでは女子高生でも拳銃が持てる。当然違法だが）

オープニングは夢のシーンから始まった。PCの夢として提供されたシーンはそれ自体に違和感があっても拒絶する手段がないという代物だった。セッションの様子を竹地のサイトから引用する。

『悪魔と戦っている最中、連れてきた透子の様子が一変。彼女は禍々しい悪魔の姿へと変貌し、その力でもって、PCたちが苦戦していた悪魔たちをいとも簡単に倒してしまう。』

透子というのは竹地がGMとして担当していたNPC（ノンプレイキャラクター）の事である。当時は気が付かなかったが、『PCたちが苦戦していた悪魔たちをいとも簡単に倒してしま』ったのはPC達のそれまでの努力を無にしてしまう行為ではなかったか。NPCがいればPCが必要なのではないかという疑問だった。似たような疑問を持った人物がいた。『ウルトラマン』に登場した科学特捜隊のイデ隊員だった。彼も「ウルトラマンがいたら科学特捜隊は必要ない」と考えていた。色々あった結果、イデ隊員は「人類が努力した末にウルトラマンが力を貸してくれる」という考えに変わっていった。しかし、このキャンペーンではPC達の努力の末にNPCがオイシイ所を持って行くという場面が見られた。それらは後述する。

結局、このセッションの舞台である場所にいた一般市民はビルの倒壊に巻き込まれて数千の人々が亡くなった。ひとりのPCがそれを救おうとしたが、竹地は「それはできません」と却下した。テレビや小説の主人公ならこの時点で竹地を吟遊詩人GMと看破してその後の動きも違っていただろう。しかし、ここでの登場人物は私でありこの時点ではまったくそれに気が付いていなかった。私のPCである飛鳥ユウの感想を竹地はこう漏らしている。

『普通の女子高生とエージェントとしての営業を使い分けていそうではあるが、以前にも似通った技能を持っていたせいもあってか、何故か黙示録以外の人格まで入り込んでいるという印象があった。』

「似通った技能」というのは別のキャンペーンでのPCを指している。それが判明した時点で別の技能を提示する事もできたのに竹地はそのままにしている。さらには「何故か黙示録以外の人格まで入り込んでいる」と言っている。演劇で生計を立てている俳優ならともかく、趣味でやっている事に対してなぜここまで言われなければならないのだろうか。いや、ここはこのように返すべきだったか。

「私はスターシステムを採用している」

どのPCをやってもそれを演じているのは私だ。まったく別人格を演じるのはプロの俳優に任せておけばよい。TRPGは演劇を強制されるものではない。竹地はいつからそういう考えになってしまったのか。

『どちらかという「飛鳥ユウというキャラ」ではなくて、「飛鳥ユウを作り出したPLが演じているキャラ」の印象があった。』

竹地はキャンペーン第一話でPCを完全に作れとでも言いたいのだろうか。それこそプロの俳優の仕事だろう。楽しむための趣味でプロを目指したり、高い演技力を必要とされるのか？この時点で私と竹地の間ではTRPGを遊ぶ事に対して認識のズレがあった。

『殊にGMのように幅広い年齢層・性格を演じるとPLがいつも似たような傾向のPCを演じているとさすがに目立つのでそう思って書いた次第。あとはきちんとメリハリをつけるのはお勧めしたいところ。違うキャンペーンでこのPCの性格が移ってしまうということも多々見うけられる。各言う自分もまだまだではあるが、〇〇のキャンペーンで使う〇〇はこういう性格で、こういう喋り方をし、こういう行動をするので、あの〇〇のキャンペーンの〇〇というPCとはきちんと分けよう…くらいは目指したいところだと私も思う。』

竹地本人は良い事を言っているつもりなのだろう。楽しむことよりも演技の技術向上をすることがGMより課題として課せられる。竹地は「きちんと」という単語を頻繁に使う。しかし、竹地自身が私に対して「きちんと」対応したかということそうではなかった。

3回目

3回目のセッションでは竹地はこう言っている。

『ここでDMとしては、「現PCグループ以上に戦闘に長けた連中を送った」と釘を刺していたけど、効果なかったようである。「力だけではどうにもならんようだ」とも言った。』

『暗に言いたかったのがやはり「力押しではダメ」ということだった。そして彼女が言った「時の綻びを探して」という言葉にみんな反応はしていたが、誰もその真意は理解できなかったようである』

「GMは最善を尽くした」と言いたいようであるが、効果がなかった以上はしなかったのも同じである。そしてヒントのない謎かけは吟遊詩人GMの行為として常套手段である。

『DM的には「わざ」と他の時代のものを「中世のフランス」に混ぜたのである。先述のギロチンなどのほかに、中世のフランスにはない「新大陸よりもたらされた食べ物」や、「後の時代の発明品や習慣」を混ぜておいた。そして、それらが本来の時代にあるはずのない崎山碧が呟いていた「時の綻び」だったのである。これを暴くことで、この世界を崩壊させるというシナリオもあったが、誰も気がつかなかったようだ。』

わざと混ぜたと言っているがそもそも混ぜてあるという事に気が付かせなかった以上、GMとしてヒントを与えなかったと言われてもそれは当然の結果である。こういったわざとらしさを発見させるのにヒントも出さず、判定もさせず、「誰も気がつかない」と嘆いてもGMの独りよがりである。

『酒場でマスターに手品を見せた征軌。これが教会に通報され、征軌は「魔女」の疑いをかけられ、兵士が一斉におしかけ、事態を收拾できぬまま、戦闘開始。力押しではダメ、とあれほど釘を刺したのに（苦笑）』

GMが「あれほど」と苦笑してもプレイヤーに気付かれなかった時点でGMの失敗である。竹地は手品を見せようとした段階で警告を発するという発想にはならず、PCが考えた末に行った行為に対してその努力を無にした。GMのシナリオに沿う以外に選択肢がないという状況は2回目のセッションと同じく今回も発生した。そして戦闘が終了してセッションが終了する直前にそれは起こった。

『結局今回は「聖処女の心臓」は手に入らなかった。すでに心臓は雪代の心臓と同化してしまったからだ。』

NPCがミッションとして頼まれていた物品を掠め取っていった。先に指摘した「PC達の努力の末にNPCがオイシイ所を持って行くという場面」が発生した。これではPCもPL（プレイヤー）もセッション後には徒労感しか残らないだろう。

4 回目

4 回目のセッションでは竹地はこう言っている。

『今回の活躍は良麻の取り分が多かった。NPC軍団は軒並み活躍できず。命運の減らし方具合としては上々だが、戦いにまるで緊迫感が感じられないのは気のせいかな？そこはDMとPLの認識の違いなのだろうか？』

DMというのはこの女神転生というシステムがDMと呼んでいるだけでGMと役割は変わらない。良麻というのはPCである。竹地は自らが登場させたNPCが活躍できなかった事に不満を漏らしている。NPCはあくまでPCに対しての脇役であり、PCを押しつけて活躍するものではないのだが、この時点で竹地の勘違いが始まっていた。

『そこで恵美流が環を起こす手段に用いたものは、ネズミ花火 たちまち布団の中からアフロになった環が出てくることにw』

恵美流というのは竹地自身が操るNPCであり、竹地は悦に入っているようだが、環のPLは不快そうな顔をしていた。これは後日聞いて確認したので私もセッション中はさほど気にしていなかったのは痛恨事だった。

『という感じの第IV話。反省材料多数。まずは導入部の弱さ。今回は征軌の出番がPL本人も言っていたけど確かになかった申し訳ない。由菜に対しても同様ですが、それはそれ自分たちから動く、という意識も見せてはもらいたいと思います。』

竹地は「自分たちから動け」と言っているが、その提案をする時間を与えず他のPCの演出をしていたし、動こうとしてもその動きを封じられてしまう事が多く、その結果、PLが何も言わず見ているだけという状況が発生していた。

『元々DMが作ったシナリオがある程度きっちりできてるので、それに乗せられている感もあるのでしょうけど、言い換えればそれは、DMの予想範囲内で全てが収まり、PLたちがそれに満足し、飛び出すことを怖がっているようにも見方によっては見えます。』

この段階で竹地が吟遊詩人GMである明白な一文である。竹地自身がPLをシナリオに乗せていると言っており、この発言だけでも吟遊詩人GMだと証明できる。「予定範囲内で全てが収まり」とあるが、それ以外の行動を阻害され、GMから「それはできません」と言われてしまえば、ほとんどのPLがそこから飛び出すような意思はなくなってしまうだろう。

『これからもより、その辺りは柔軟に対応できるようにこちらとしても心がけて、励みたいですが、PL諸兄としてもまずは、自らも動くということを心がけて下さい。

何もできないからといって、何もしないままで甘んじては、たとえそれで後悔されても、そこまでこちらも責任は取れません。取り敢えず何かしてから後悔して下さい。まずは行動。自分で道を切り開くことです。何もできないからといって、何もしないままでいては、本当に何もできなくなりますよ。』

自ら動けと言いながらその動くための行動や発言は却下していく。このようなダブルスタンダードを見抜けなかったのは私が鈍感であり洞察力が不足していたということなのだろう。自分で道を切り開こうとしても竹地が「それはできません」と却下していく。キャンペーン参加の最中には気がつかなかったが、相手の行動を制限して行動する度に押さえつけ、相手の抵抗の意思を削ぐ行為はモラル・ハラスメント（モラハラ）の一種ということだった。

『ただ確かに今回のメインは良麻・環・紗綾に据えて話を進めていったのも事実です。それでも参加してもらえそうな平等な話作りは進めたいと思うところです。』

思うだけで何もしなかった、ということだ。その証明は今の4回のセッション内容でもこれから書くその後のセッションでも証明できる。ちなみに、この4回目のセッションの覚書で私のPCである飛鳥ユウにGMが言及しているのは4か所だけ。この扱いだけでも竹地が言っている平等が破綻しているのは証明可能である。

4回目のセッションで私のPCは専用武器をGMから貰う事になった。ここで拒否するという選択肢はない。その武器を使わないと敵に有効なダメージを与えられない状況に追い込まれていたからである。そして今回も竹地が吟遊詩人GMである証明をできる箇所がある。

『さて、敵である義経はどこに言ったのか？PL諸兄は喧々諤々。こうしてPLが必死になって問題を解いている最中のDMは優越感に浸りっ放しですw』

『大倉御所目指すも残念不正解。『教えて！須磨寺先生！』の時間です。学年一の頭脳の雪代がヒントを出します。』

竹地はヒントを与えたつもりであるが、PLに提示されていた情報はあまりにも少なかった。それはまさに「GMの脳内にある正解を当てるクイズ」に等しかった。優越感に浸る前にGMとしてやるべきことを果たすのが先である。また、今回のセッションでもNPCがPCより活躍する場面が登場している。まともなGMであれば『教えて！須磨寺先生！』と言ってNPCが得意顔でヒントを出すなどという行為は恥ずかしくてできない。PL達の考えを整理し、正解に導く方法も取れたのに竹地はNPCを通して自ら優越感に浸りたかったということだ。

『武蔵坊弁慶たちも天狗の姿になって登場し、義経も不完全だったのか藤沢の首と奥州の胴体が別々に攻撃してくるといふ凶悪ぶりを発揮し、PCたちを苦しめます。最後はじわりじわりとPCたちが競り勝ち、NPCであり今回初参戦となった朝霧小夜子が止めを刺します。』

今回も「PC達の努力の末にNPCがオイシイ所を持って行くという場面」が発生している。止めを刺すという行為はTRPGにおいての見せ場のひとつでありクライマックスのひとつだ。それを楽しませる立場であるはずの竹地のNPCが奪ってしまう。竹地の中ではPCよりNPCの方が重要だということだ。ちなみに、「攻撃はダイスを振った結果なのだからランダムだ」という意見があるかもしれない。しかし、NPCが攻撃を遅らせたり、攻撃自体をしないことで止めをPCにさせる事は可能である。この事例をもってしても竹地が「NPC>PC」という考えだったと言えよう。

『エピローグ。また八幡宮へ戻ってくる一行に正宗が一言。あの虎の巻は偽物だと。』

またもやPCの努力は徒労である。まるで列車のように竹地のシナリオを線路にして進むしかないといった感じである。

『第V話は四人のPLによる物語。多少物語上欠けてしまったところがあるわけですが、それはそれ仕方ないでしょう。元々そうなってもよいように心がけると触れているわけですし。』

PLが4人ならば4人のセッションをすればいいものを竹地は物語が欠けたと言っている。これも吟遊詩人GMとしての自身の物語を優先しているということである。

『各人に明確とまでは行かなくても、モチベーションなり見せ場なりを持たせて成功した回と言えらると思います。戦闘も多かったわりにはバランスも絶妙でした。回復の特技のありがたさが分かった回でもありました。』

さて次回は第一部の最後の前編になります。初めての前後編を見越したものを作ろうと思っています。次の主役は今回参加できなかった二人に務めてもらう事にしたいと思います。』

竹地は自画自賛しているが、PLが4人だったので偶然成功したという感じが強い。そしてすでに決まっている主役。テーブルトークRPGは必ずしもGMの思い通りにシナリオは進まない。それこそが醍醐味なのに竹地はPCを自分の小説の登場人物のように操る事に腐心していた。

5 回目

そして5回目である。

今回も竹地は自らが吟遊詩人GMであると告白する記述がある。

『漠然とラストシーンのみは作りたいな、と思っていた画だったので、それを作るためにシナリオを降ろした。しかし、環主体のはずが、いつの間にか自他認める紗綾が主人公になってしまった。』

竹地がGMとして意図していない結果に不満を持っている記述であるが、テーブルトークRPGは必ずしもGMのシナリオ通りに進むものではなく、むしろそれを楽しむものであり、シナリオ通りに進ませたいのならセッションなどせずに、小説でも書いていたほうがよい。この回のように主人公気質を持ったPCが他のPCの見せ場を奪う事は数回あったが、GMである竹地はその事態を放置したままセッションを続けていく。

『思うにTRPGは仲間同士の兼ね合いもそうだが、NPCと絡んだ方が断然話の核心に触れられ、しかも主役的な位置に動いてくる。理由は簡単で、NPCの方がより物語全体の真実に近い位置にいるためである。これはずっとGMをやっていたら分かってくることであるので、この事について文句を言われても謝る事はできないと思う。だってそういうものだから。』

この竹地の主張に対して、私は「だってそういうものではない」と主張する。竹地のマスタリングが特殊であり、例えば地下迷宮を探索するダンジョンシナリオではNPCは敵モンスターがほとんどなので、NPCに絡みようがない。モンスターの多くは人語を話さない。竹地はそういった状況は想定していないということだ。さらに、『NPCの方がより物語全体の真実に近い位置にいる』という発想はTRPGにおいてPCよりもNPCのほうが上であるという竹地自身の主張の現れである。真実は調べれば分かる。しかし、竹地は調べる手段を奪い、強制的にNPCに絡む事を求めていたのである。『だってそういうものだから。』と言い放って。この事実だけでも竹地が吟遊詩人GMであると裏付けられる。さらにこのような竹地の発言もある。

『良麻を嘲笑う雪代。完全に何かに憑依されたように良麻を扱き下ろします。良麻はかなり精神的にダメージを受けた模様です（えー

そりゃ今までPCに殺されて覚醒したNPCなんて例はなかったですからね…。』

PCに精神的ダメージを与えてでも自らのNPCを表現したがる竹地。ここでも吟遊詩人GMっぷりを発揮している。竹地のNPCがPCよりも優先される例はここだけではない。さらに竹地は続けて、

『彼女の第Ⅳ覚醒の正体はまだ秘密です。きっとみんな見当違いの想像をしていますね。』

見当違いを正すこともなくそれを楽しんでいる。竹地がGMとして悪辣であることの一例である。自分の頭にあるものをノーヒントで当てろとでも言いたいのだろうか。ひどいものだ。竹地はこう結んでいる。

『GM的にはほとんどPLが思った通りに動かなかったので、そこはPLたちがいい動きをしてくれたということだろう。そうであってくれればよいのだが。』

どうしたらこれほどまでに上から目線になれるのか。それはGMとPLが共にストーリーを作っていくのではなく、GMがストーリーを提供しているというスタンスから来ている。それは先の『NPCの方がより物語全体の真実に近い位置にいる』というNPCがPCよりも上の立場であるという主張からも確認できる。

6回目

6回目のセッションでは竹地はこう言っている。

『今回は全体通して、使いたくはないが主役は三風紗綾だった。使いたくないというのは私の中では、TRPGの主人公は全員であるべき、という考え方があるため。だから長いキャンペーンの中で今回は主人公的役割が回ってきたというべきだろう。とはいえ今回はその重責を担うだけの十分な演技と役割をこなしてくれていたと思った。』

『主人公は全員であるべき』その中に私のPCが入っていなかったのではないか。キャンペーンの後半になるに連れて私の疑問が確信に変わり、失望が絶望に変わるのだが、この時は気が付かなかった。さらに言えば『重責を担うだけの十分な演技と役割』がなければ竹地のセッションでは主人公的役割を果たす事ができないということであり、これだけでも竹地の主張する『TRPGの主人公は全員であるべき』という言葉がいかに空虚かという証明である。

『そりゃ今までPCに殺されて覚醒したNPCなんて例はなかったですからね…。』

NPCの覚醒イベントを演出した理由はNPCをPLに見せつけるためであり、そこにセッションを共に作るという視点が欠落していた。

『ほとんどのPCは三人と聞いて、最後は藤野恵美流を連想した模様。しかしいい意味で引っ掛けたw』

竹地は得意になっているが、フェイクを見破る材料が提示されなかった以上、GMの自慰である。さらに竹地は別にコラムを作り発言している。

『NPCにもドラマがあるのは黙示録の特徴である。本来TRPGはPCが主導であり、PCが動かしていく。しかし、それを具体的に言葉にしろと言われれば言葉に窮するのではないだろうか。』

では、具体的に言葉してみよう。「NPCがPCよりも目立たない。活躍しない事。NPCがPCの見せ場である敵への止めを刺したり、PCよりも大ダメージを出したり、ヒントと称してPCが知りえない事実を上から目線で得意顔で講釈しない事」である。竹地がGMとしてきた事がほとんどPC主導権を奪っていたのである。さらに言えばNPCにドラマがあってもそれを受け入れるかどうかはPLの自由である。実際にはその自由はなかったが。

『以前私はNPCはより物語の核心に近付いていると言っている。それはピンからキリまである

。無論ラスボスやら世界の仕掛けを作っているのが悪魔などのNPCだからという意味である。』

『NPCはより物語の核心に近付いている』この時点で竹地は「NPC>PC」という図式を思い描いている。NPCに頼らない限り、物語の確信に近づけないとしたらPCの努力はどうあっても報われないということである。そのようなセッション、いや、キャンペーンに果たして誰が参加したいと思うだろうか。

『例えていうならば、PCはレストランの客である。NPCはレストランの料理人なのである。当然PCは主役であるが、彼らがレストランで料理を作るのではなく、提供される料理を味わうのが彼らの存在である。それはいくら彼らが料理の作り方を知っていたとしても、そこはNPCに任せるしかないのである。』

この主張が竹地を吟遊詩人GMであると裏付ける何よりの証拠である。ここにはほとんどのTRPGにはある「GMとPLが共にストーリーを作っていく」という根幹の部分がない。それは竹地が『提供される料理を味わうのが彼らの存在』とPCを定義している事からも分かる。

『NPCに任せるしかないのである。』と言っている事からもPCは自らの小説や同人誌の登場人物や駒としてしか見ていない事が分かる。竹地はいつからこうなってしまったのか。結論としては当初から吟遊詩人GMで私に見る目がなかったということだ。

『いわばPCだけではレストランにならない。NPCが料理を提供してこそ、レストランが成り立つ。PCたちが集まって話しているだけを、TRPGとは言わない。料理をシナリオや情報ソースと置き換えればいだろうか。無論味わうPCがいなければレストランも成り立たないわけである。そこは上手く折り合いをつけてやっていかなければならないと思うのだ。』

念のために言うがTRPGはGMがシナリオや情報を提供し、NPCが料理した成果を味わうというものではない。GMは素材は提供するが、その料理方法や食べ方は個々のPLに委ねられている。だからこそGMの想定以外の結末や解決法でストーリーが変わる。その面白さを竹地は否定していた。『そこは上手く折り合いをつけてやっていかなければならないと思うのだ。』と竹地が思うのならNPCが一步下がってPCの引き立て役になったり、NPCに絡むことを強制しないといた事が必要だった。それにレストランなら、客は料理を選ぶ自由や店を選ぶ自由があり、客は料理が気に入らなければ店を出て行く事もできる。それも竹地は気がつかなかった。

『要はPCもNPCもバランスよく絡んで物語が進行していく事。そしてPCはNPCが持ってくる素材を見逃さず、味わうようにしてもらいたいと思う。』

バランスよく絡んでいない事はすでに証明されている。NPCが出しゃばりすぎている、活躍しすぎている事例はすでに紹介した。そしてPCはNPCの持ってくる素材を味わうのを強制さ

れる理由はどこにもない。さらに言えば素材の選択の自由はP Lにある。竹地はその点をまったく意に介していなかったのである。

7回目

7回目である。

『そして今回をPC豊石由菜と藤野環は引退する事に決

さらりと流しているが、この二人のPLは竹地が吟遊詩人GMであると早々に見抜いていた。かなり後になって二人とも「セッションに自由がない」と漏らしていたのを私は記憶している。私はそれを気が付く事ができなかった。

『そして麗華は意識不明の重態に。そして第IV覚醒を果たすも、それはまだ別の機会の話で。』

わざわざNPCの覚醒をここでする必要があったのか。しかも別の機会とまで断って。竹地が自らの作成したNPCに肩入れするのは自由だとしても（かなり問題があるが）それを強制される理由はPL側になんと言っておきたい。

『病院エピソードは、PC紗綾と良麻がキスしたりとかいろいろあったな。その辺はPLの独壇場なのでノータッチです。個人的に理由がよく分からないんだけどね。どうも恋とか愛とかそういう類よりよりは刹那的な依存・共生・キズの舐め合いに私には映りました。何しろそこに至るまでの描写がPL間でのみ完結しているためです。』

ここまでPLのPC演出を貶めて何を竹地は言いたいのだろうか。答えは単純で「勝手に動くな」と竹地は言いたいのである。『描写がPL間でのみ完結しているため』という主張が竹地がこの事を快く思っていない態度だったと言えよう。

『揃いも揃って7人で自転車移動。電気をを用いる物の類は全く動かないので、人力で。何ともシュールな画ですなw』

竹地はこの状況を自ら強制しているにも係らず、『シュール』と言い放つ。PCたちが与えられた状況で最善を尽くすのを高みの見物をしていると告白しているのは竹地だった。

『PLたちは深く突っ込まなかったけど、誰も既存のNPCだけが確認されているとは話していない。今回以降の話にも登場するであろうNPC能力者はまだ都内に大勢いるということです。それは追々分かる事でしょう。』

この竹地の記述は竹地自身が説明不足であった事を吐露している。そして、『NPC能力者はまだ都内に大勢いるということ』はPCよりもNPCを活躍させたいとの竹地の願望の表れである。

『今回は命運7点だったが総合的に見て、5点で充分だったなど後で判断した。夏休み編は全部5点で充分だろうと思った。そして敵を複数出す事で接戦らしさ、緊迫感ある戦闘を演出できる』

ここでの成功体験が竹地をさらに吟遊詩人GMへの道を進める結果になる。敵は複数出すという事にこだわるようになり、戦闘が長たらしく、ルーチンワークに変化していく。

『戦闘は悪魔：1 VSPL数：nが基本ではあるが、それだといずれは1の方が負けるのがやる前から分かっているし、対処もしやすい。それはどんなに高いレベルであっても。そこでレベルが比較的近く、かつ敵が複数いるパターンはどうだろう。第V話で義経が首と胴体に分かれて戦ったり、魔家四将のようにボスが複数いるパターンは往々にして戦闘のバランスとしてはよい。緊張感に満ちた、勝つか負けるか分からない戦いが繰り広げる事が出来るのではないだろうか。』

『戦闘は悪魔：1 VSPL数：nが基本』と主張するのは竹地の勝手だが、ゲームシステムが違えばその主張が無意味になる。竹地は『ボスが複数いるパターンは往々にして戦闘のバランスとしてはよい。』と言っているがボスが増えれば戦闘の時間と処理の手間は増える。それは緊張感よりもルーチンワークの意味合いや様式美の踏襲であり、『緊張感に満ちた、勝つか負けるか分からない戦いが繰り広げる事』ができるかどうかは大いに疑問である。

『2番目の敵は、ハーヴェスト＝レイン。相手の言った事を鸚鵡返しにする話し方は、狂人っぽさが表れてて良かったと思う。さいたまーは言わないよ。ユウw』

竹地の自画自賛にアンチテーゼを示すべく、私はPC発言で「さいたまー」とNPCであるハーヴェスト＝レインの狂人っぽさから最も離れた単語を口にした。しかし、竹地はその言葉を見殺しにした。私がセッションで蔑ろにされる下地はここからすでにあっただのかもしれない。

『そしてワケも分からぬまま倒されてしまった大人レインw 正体は全く謎のまま。今回はツツコミが全く入らなかったのもスルーということで。』

ここに竹地がGMとしての説明が不足していると気が付いていなかった。つまり、竹地はヒントも与えていないのにヒントを出した気になって『ツツコミがなかった』と言っている。PLに気が付いてほしいのなら相応の努力が必要にも係らず、ここでも竹地はそれを怠った。

『つまり、藤野環は、藤野恵美流の実の娘なのでした。』

その設定を竹地は藤野環P Lに押し付けていなかったか。藤野環P Lは納得していたか。私は藤野環P Lの意思に反したものだのではないかと思う。なぜなら、藤野環P Lは今回で離脱していたからである。

『今回のガリアはガープスでかつて行ったトナティウ編のラスボスであるガリアを踏襲しました。腹から波動砲を持ち出していたしw』

そんな竹地個人の自己満足のネタの踏襲が一体誰に必要だったのか。それは竹地だけに必要だったのである。彼自身の満足のために。

『征軌との絡みを何とか試みても今回は空回りしていた。というカルシフェルを倒した後の小夜子と暁へのフォローが全くなかったのは正直、意外というか残念だった。征軌というPCの立場から見ても、おかしい行動だったと思う。』

GMが思うようにはPCは動かない。だからこそ、そこがTRPGの面白さだと私は思う。しかし、竹地は自らのNPCへのフォローがなかったと不満を漏らしている。百歩、いや千歩譲ってNPCにドラマがあるとしてもその取捨選択はPCに、さらに言えばPLにある。それができないのなら吟遊詩人GMと言っても差し支えない。この時点ですでに竹地は吟遊詩人GMだった。

『そして、戦闘が正直苦痛になっていた。というのも戦闘のパターンがすでに確立していたため。戦闘は一日4回もするためには、もっと効率よいものを作らなければならないと思った。しかけるDMがうんざりしていたのでは本末転倒です。』

TRPGでは自ら用意したシナリオやギミックをセッションにおいて放棄する場合がある。シナリオやギミックをすべて使うという事に固執してしまつてはGMの用意したものに無理矢理PLを従わせているのと変わりはない。それは吟遊詩人GM行為と言えよう。『改善したい、うんざりしている』のなら変えればいいのにそれを竹地はしなかった。

『この時小夜子を閉じ込めていた氷柱が崩れ落ち、ルシフェルの身体より、暁が分裂します。先ほども言った通り征軌のフォローナシ。』

竹地はかなり征軌P Lに対して不満を表している。繰り返すが、NPCに絡むかどうかはPLに選択権があり、GMは強制できない。絡んでほしいのなら相応の魅力を持ったNPCを出せばよい。裏を返せば征軌P Lに絡んでもらえる程のNPCではなかったという証明でもある。

『征軌の存在意義が微妙だった今回。征軌は人間でなくなってしまった紗綾や良麻に対し、それでも紗綾は紗綾、良麻は良麻だといっていました。DMから見てそういう風に扱っていないのは明らかです。』

『というのもPL自らが二人と距離を取ってしまっていると言っていました。口ではそうはいっても、心・身体が彼らと自分がもはや別の存在になってしまっている、というのを本能的に悟っているということなのか。溝を生み出していったのは、征軌自身か、それとも紗綾や良麻の方なのか。彼らの溝が埋まるのはその辺を何とかしないとならないと思います。』

『DMから見てそういう風に扱っていないのは明らかです。』と竹地は言っているが、これこそがGMの主観の押しつけであり、溝があるとは（そもそも溝自体があるのかどうか）私から見れば疑問であった。何とかするのはPLに委ねられており、GMがいくら気を揉んでもそれは強制できない部分である。残念ながら竹地は気が付いていないようだったが。

『また周囲のPLが主役みたいといいつつも、当の本人はそう思っていない現状があるようなので、それも何とかしたいところ。』

征軌PLが主人公であるのがイヤなら徹底して話の主軸にいるNPCに絡ませなければいいものを竹地はそうはしなかった。

『また征軌が他のPL・PCにとって必要だから戦うというのであれば、それをNPCにも発揮してほしいものである。』

これが竹地の本音という事だ。「PCと同じようにNPCも扱ってほしい」その本音がいかに独善に満ちたものか。NPCの存在はPCと同等ではない。NPCがPCより活躍してしまっただけではセッションを続ける気にはならない。

『第I話の暁登場以降、主人公的位置にあったと思いきや、その後は何の音沙汰もなく、しかも何の前触れもなく暁が帰ってきました。正直出番が少なかつたと思う第一部。それは反省点として生かして行きたいところです。また適度にNPCと絡むのもオススメしたいところです。』

『また適度にNPCと絡むのもオススメしたいところです』と竹地は言っているが、実際には適度などではなく、ほぼ強制に近いものであった事はここまでの例で理解できるかと思う。

『まあ、彼の言う周りの人々に、残念ながら「幼馴染みとの関係」が含まれていなかったようですから。』

竹地は征軌PLに対して自分が出した幼なじみNPCとの関係がなかったと恨み節を言っていますが、それはPCの関係よりの優先されるものではない。PCとの関係よりNPCの関係を優先させる。それはとてもセッションと言えるものではない。

『何故そこにいるのか？ これって、私が別のキャンペーンでもたびたびPCたちに訊ねている言葉です。』

大切なものを守るため？ 自分の本能に従っているだけ？ 他人に必要とされているため？ 悪い奴が許せないから？ 単純に戦うのが好きだから？

でも出来る事なら、他人に影響される事なく自分の意志でそこに居る事を選択してほしい。人に求められないのなら、そこに居られない。そんな二次的副産物のような存在意義は正直私はあってほしくない。なぜならその人の存在は他人あってのもの。他人半分、自分半分なわけです。それに他人のためにという動機付けもイマイチ彼の場合は不明瞭だから。自分が自分の意志でそこにいる事を選べない。確かに人は人と関わっていかねば生きてはいけない。けれど例えば自分ひとりで戦う時、自分ひとりで話を進める事になった時、自分を突き動かすものは何だろう？ そこに他人のためにという思いしかなければ、彼はそこで立ち止まってしまおうだろう。そうあってはほしくない。自分で道を見つけ、自分自身は何のために存在するのか。それを考えてほしい。

とまあいろいろ書きました。元より押し付けに過ぎないのでスルーしてくれて問題ないです。ただ私は仲のいい人には逆に厳しいですから。求めるものが重荷に感じるようなら言ってほしいですが。』

この主張の悪辣な点は『押し付け』『スルーしてくれて問題ない』と言いつつも竹地の意に沿わない行動には厳しく対応されてしまう。つまり、そこにはPLの意思よりもGMである竹地の意思の方が優先されるということである。ここでも竹地が吟遊詩人GMであるとの裏付けが取れた。セッションを一日楽しむよりも自分自身の存在を考える方が優先されるという実在の人物でも答えの出ない問題への強制だった。さらに、『ただ私は仲のいい人には逆に厳しいですから。』という発言はこの場合は他人であるPLに求めるモノが多いという事だ。そして『厳しい』と言う人ほど自分には甘い。それが竹地の「GMしかやりたくない」という発言に繋がったのだと思う。さらに竹地の発言を追ってみる。

『続いて飛鳥ユウ。ノスリを訪ねて行くと蹲っているマスターを発見。「お願いだから寝させて」という薫に急いで応急処置を施すも、発砲される。本当に眠いだけだったというワナw』

『「寝させろっていつてんだろー！」発砲。相変わらずムチャクチャです。さすがはギャグ

担当（えー 「一人ロシアルーレットでもやってみる？」とか「あんたは、日給200円ね」とかなりムチャクチャな事を言ってます』

ここでもPCの描写よりもNPCの描写が優先されている。ギャグ担当と揶揄される側の気持ちを竹地は考えてはいない。そこまでの想像力は竹地にはなかった。

『ユウの存在は一服の清涼剤という感じでしょうか。ギャグ担当といわれて久しい彼女ですが（えー 彼女にもまた明かされる事のない秘密や、彼女自身の存在意義に関わってくる戦いが待っている事でしょう。』

実際には『彼女自身の存在意義に関わってくる戦い』は来なかった。その前に私はキャンペーンを離脱せざる得ない状況に追い込まれたからである。

『そして紗綾がややロキよりになってしまったのでwユウにはニュートラルな立場としてがんばってほしいですw

後にPL同士の話し合いで一線を越えてしまった良麻と紗綾のカップル。勝手にストロベリって下さい（えー 』

竹地が希望を漏らすのは自由だとしても私にもそれを受け入れない自由がある。PCの行動はPLである私に意思決定の権利がある。それが阻害されていた事例はすでに出ている。そして、『勝手にストロベリって下さい』と竹地は言っているが、こういったPLへの放言はGMとして節度を欠いた発言というべきだろう。

『呉石由菜。長らくお疲れ様でした。くじ運も去ることながら確かにPCの傾向が似てしまいましたね。もし由菜が違う家に生まれていたら……。そう考えると想像が膨らみ、楽しめると同時に悔やまれます。由菜は由菜として生きた。これで納得してもらえとは思っていませんが、DMとしてももっと生かしてやりたいキャラだったなと思いました。

呉石由菜関連でお蔵入りになってしまった設定は、また他の機会に使いたいと思います。』

竹地は『悔やまれる』と言いながらも何もしていなかった。実際にくじ運で決められた設定も変える事もPCの傾向が似ていてもセッションを楽しくすることはできたのに改善の努力をしなかった。

『藤野環。長らくお疲れ様でした。いろいろありましたが気遣いが裏目に出たりと反省点は数多いですが、それはそれでよい勉強になりました。

環というキャラクターはNPCとは自然距離を取っていた観が見られました。それがNPCの捉え方で考え方の違う私を食い違ったと思っています。コラム6. 1話にもありますけどね。でも最終的にその料理を食べる食べない、味わう捨てるを選択するのはPCです。より見た目にも、そして実際に味わった時の美味しさもある料理と、NPCをこれからも作っていかなければと思いました。』

『コラム6. 1話』とは「セッションはレストランである」との竹地の主張のコラムの事である。竹地の主張はすでに「吟遊詩人GM」そのものであると結論づけられるが、ここでは『味わう捨てるを選択するのはPCです。』と竹地は言いつつも実際には環PLと『NPCの捉え方で考え方の違う私を食い違った』のであり、その結果として、選択の自由がなくて環PLが離脱した。しかし、竹地は環PLがキャンペーンから離脱したのは『より見た目にも、そして実際に味わった時の美味しさもある料理と、NPC』を作ってなかったと言っており、つまるところ、「NPCに絡むのはPCの義務」という吟遊詩人GM的発想に何の変化もなかったのである。この経験が全く身についていなかったと判明するのは私がキャンペーンを離脱する時になってからである。

8回目

8話目の検証に入る。ここでは新しく参加したPLがいる。

『前回で引退となったPC藤野環、呉石由菜とバトンタッチしてやってきた新規PC御幸泰一（ミユキタイチ）。ちょっと弾けて、捻じれた所のあるPCの多い中、異色の存在に映りました（えー 新たなパーティーの良心の登場ですw』

良心と竹地が呼ぶのは勝手だが、ここでも自分の嗜好を押し付けてその役をやらせようとする。次の例もそれに当たる。

『続いて暁の病室へ。先客が二人。幡場魁と瑠璃垣麗華でした。二人が席を外しベッドの上で白髪になって眠り続ける暁に油性ペンで落書きする征軌。
お前の尻拭いは俺がするんだぞ…
そして入れ違いで暁の病室にやってきた小夜子の第一声は、
あんたの尻拭いは私がやるんだぞ！
でした（えー 』

PCの行動に対して、まるでNPC上位と思わせる描写である。一体、どちらがメインか分からないシーンである。NPCにもドラマがあったとしてもそれはNPCをPCより上位に立たせる事ではないと私は思う。

『賢者の石を所蔵しているのは「久遠寺時雨」という女。彼女はその後ネットで調べたところ、良麻たちと同じ悪魔退治の戦士でした。11年前まで確実に存在していた「100円玉の時雨」という異名を持っていた当時17歳の少女。写真とかは残っていないようですが。

てな事を前フリをした上で、君島先生が「100円玉」を武器に使っていたわけですが、PLは果たして疑問を抱いてくれていたのでしょうか（・∀・）ニヤニヤ』

ここでも竹地はヒントを出したつもりになっている。武器が共通するからといってすぐに何らかの関係がある
と判断するのはそれこそ間違いの始まりではないのだろうか。

『思うにTRPGは単なる戦闘やってればいいゲームでなく、PCになり切ってその世界を冒険をする事にあると思います。だから良麻のPLには「レインの過去を暴く」という事を頭に入れてゲームを楽しんでもらいたいと思います。そのためにはそろそろ他の情報屋が欲しい、などPL側で

いろいろネタを振ってくればこちらも考えたいと思っています。』

TRPGの楽しみ方は個々人のよって違う。竹地はそれを許さなかった。この時も自らは積極的に情報開示をするような事はなく、ネタを振れと言いつつも結局は自らが敷いたルール以外の所を進ませないという事だった。ある種のGMはPLの手足を縛っておいてセッションを強いるクセがある。竹地もそんなGMの一人だった。

『ちなみに皆名前に数字が入っているが、もっと重要なのはそれぞれの名前に今回の話の大本となったエピソード「黄泉津平坂よりの生還」に出てくるワードが隠れている。それぞれ十拳剣、櫛、蔓、竹、桃を名前に組み込んである。気付いたかな?』

気が付いてほしいのなら、相応の努力を払うべきなのに、ここでも竹地はそれを怠っている。さらに以下の例がある。

『ポイントは“背広を着ている”というところ。よく考えてもみて下さい。季節は真夏。とくに衣替えもなされている時期です。地下鉄等にも半袖の社員はいます。

これはすでにその運転手が白骨化していたため、それを直接触るまで分からなくさせる言葉上の演出。手袋、帽子もしているといいました。後ろからチラリと見ただけでは判断が付きにくいようにしたのです。』

実際にセッションが行われたのは3月上旬。上着を着用していても不自然のない時期である。セッション中は真夏であってもそれは竹地の都合でありPLに注意を払わせたいのなら「夏にも係らず上着を着ている」という描写が必要であった。『言葉上の演出』と言っているが単純に言葉が足りないだけでありさらにそれが意図的である以上、GMとして不適切だった。

『ユウ、5回判定中、いきなり失敗 → 即接敵（滅）
さて、無駄な戦いの始まりです（爆） その都度集中して飛び越えていけば問題なかっただろうにw ネコも呆れてますw 』

この竹地の発言はまさに言葉や態度などによって心を傷つける精神的暴力「モラル・ハラスメント」そのものである。私のPCを貶めて解決法を提示している。しかも後出しジャンケンのように。実際にセッション中に解決法の提示はなかった。

『そんな最中にユウは全ての命運を使い切り、ガン○チ第IV覚醒を果たす。危うく自分の暴発した銃で覚醒するという、かつての某キャラクターの犬に丸飲みされて覚醒というレジェンドを超えるところでした（爆） うちのキャンペーン、長くやってるだけあって、そういうレジェンドが多いですw』

ここでも竹地はモラルハラスメントな「ガン〇チ」という言葉を使って私のPCを貶めている。

『あの扉こそ死（4）と現世を別つための千引の岩だったのです。ちゃんと描写できなくて残念。というかそこまで気付いてくれていた人、いたかなあ…。』

ここでも竹地のあるかどうかさえも分からないギミックにほとんどヒントなしで気が付くようにとされているPLは本当に何かの特殊能力を持つように求められていたのではないだろうか。

『ただ一つ気になったのが、PLの前半の学校シーンは必要ないんじゃないか、という発言。私個人は無駄だとは思っていません。むしろ日常の生活をPCになり切って演じるというのも大事だと思います。ただ任務に直面し、敵を倒すばかりが黙示録ではありません。その話の伏線なり、ネタを前半パートに散りばめているのはそのためです。こういった推理・推察も楽しんでほしいと私はDMとして思っているのですが。』

『PLの前半の学校シーン』は「PC」と置き換えて話を進める。ここでも竹地は『PCになり切って演じるというのも大事』と主張しているが、それをGMが強制するのは全くの筋違いであり、要するに「GMの押しつけになっているシーンが多すぎる」ということである。

『第Ⅱ話以降もPLの持ち回りでシナリオが決定します。』

そのようは持ち回りであったのかどうか。それを聞かれたという記憶はない。

9回目

そして、9話目が始まった。

『始める前、小ネタで遅刻してくるPLが何時に来るかという賭けをしていました。』

竹地は賭けをする前に遅刻に対するペナルティを定めるべきではなかったか。私は毎回遅刻せずに参加したが、いつも遅刻者を待つ立場にあった。時間を守った方が時間を守らない者に蹂躪されても竹地は何も対応しない。ここでも竹地に対する不信は積もっていった。

『さらにはもう一人は銃を撃つことが三度の飯より好きな「戦略的撤退」という言葉が辞書にないガンオタ飛鳥ユウ。間違いなく話し合いにならない面子です。』

ガンキチの次はガンオタ扱いである。ここで見過ごせないのは『「戦略的撤退」という言葉が辞書にない』という竹地の発言である。私のPCの上辺だけ見て判断したのだろう。今まで戦略的撤退という状況になかっただけに戦略的撤退をしないPCとされてしまった。

『風呂場に残されたのはユウと戦闘能力を全く持たない麗良。庇いながら逃げるか、と思いきやしっかり銃で応戦。やはり「速攻解決！何でも銃で！」というのは間違いではない（マテ）

そのつもりがあれば、GMはPCに対して圧倒的な数の暴力を振うことができる。この時の敵数は2体。十分戦えると判断して私は戦う事にした。

『さて戦いを終えたPCたちがペンションに戻ると、征軌による問い詰め開始。至極尤もな事なので黙って聞き入れるPCたち。しかし一番言いたかったユウはまさに「左の耳から右の耳へ」状態（えー』

敵を撃退したが、PCの征軌に怒られた。しかし、他に最善手があったのかどうかは疑問である。それに気が付かない以上は話しても時間の浪費になると判断して聞いたフリをしておいた。

『そして乱れた布団を直そうとしたら、ユウに銃を突きつけられた紗綾。ユウは人として大事な何かを失っている気がします（お』

断りもなしに他人に触れたらどうなるか。PCレベルでの対応が『人として大事な何かを失っている気がします（お』というまでもや「モラル・ハラズメント」な発言を竹地はしていた。

『途中悪魔と遭遇しながらも、撃破。今日はやたらユウが止めを刺していたような。まあ麗良がさらわれた原因でもあるわけですし…。』

どうもGMは誘拐された原因を私のPCであるユウにしたいようだが、それを防ぐ手段を竹地がPLに提示していたかというところではなかった。止めを刺すもの偶然の結果であり、意図してそれを行ってできるわけではない。それはダイス目次第なのだから。

『今回はやはりユウが主人公的役割を果たしてくれました。ラスボス以外を葬ったのは全部ユウだったし（えー銃器は威力はないはずですが、たまたま敵が弱く設計したり、物相性が弱点に設定してあったから、などまさに大活躍でした。

加えて戦闘面以外でもNPC神威麗良との関わりが大きかった。基本DMの尖兵たるNPCと関わりと物語の核心にも触れられるのはしょうがない事ですので。とはいえ最後ここまでドラマチックなメになるとは……DMも予想外でしたw』

『やはり』、と竹地が言う以上、このセッションは主人公的役割を果たすように求められていたということだ。『基本DMの尖兵たるNPCと関わりと物語の核心にも触れられるのはしょうがない事』と竹地が言っているが逆説的に言えば、NPCに関わる事ができなければ、物語の外周しか進めないということであり、NPCが話を中心であるということを竹地が認めたということである。そして、予想外のドラマチックな展開という経験があったにも係らず、竹地はPCをルールの上にはしか載せることしかしないセッションを量産していく。

10回目

10話目に入る。

『さてそのガン○チ女こと飛鳥ユウは今日も早朝から「ノスリ」で、メイド服羞恥プレイという人間としての尊厳をドブに捨てるようなバイトを続けています。』

メイド喫茶で働く労働者への差別を竹地は口にしている。本人には差別しているという意識はないのであろう。いじめやモラル・ハラスメントをしている者にも自覚はない。同じ事だった。

『透子が描いている漫画のタイトルは、実は月刊「ポム」に連載されている「アクマなアイツ」。ESV第I話で透子が食堂で昼御飯を食べながら、読んでいたものです。

主人公は抜刀術の遣い手でツンデレ属性でドジっ子の水室征義。なかなか攻撃が当たらないのがタマにキズ。ウケ担当 副主人公&ヒロイン!?!の川下良牙。何故か朝起きたら女の子になっていたという設定で話が進んでいきます。ウェポンマスターの遣い手。あの手この手で征義を我が物にしようと企む腹黒。セメ担当 そして第III話から登場の南泰次。良牙と水面下で激しく征義争奪戦を繰り広げる。陰陽道の遣い手。

登場人物はいずれも♂』

竹地はPC達をネタに男色漫画を描いているNPCを登場させた。PL側の反応は呆れており、私もこれはひどいと思った。

『飛鳥ユウ、同人作家デビューを果たしました（えー 実際PLがBL路線の小説を書いて下っている模様。HPに掲載したいですなー（・∀・）ニヤニヤ』

『実際PLがBL路線の小説を書いて』と竹地は言っているがそんなものは存在しない。これも竹地の思い込み、もしくは勘違いという事である。

11 回目

11 話目に入る。

『レインに「あいつが心配だから」と言付けられて付いてきたユウと麗華。

止せばいいのに本当の理由を語らないユウは、話の辻褄が合わなくなり、支離滅裂となり、すっかり征軌の機嫌を損ねてしまいました。他人の嘘に対して厳格なまでに嫌悪感を示す征軌。紗綾も泰一もどうしていいのかわからない状態に陥って、結局レインに付いていくように頼まれたと白状する羽目に…。』

NPCであるレインの命令で強制されたと言えばGMの竹地は満足したのだろうか。それがPCである征軌の怒りを買ったとしても。正直に話しても隠してもどちらにしろ征軌の怒りを買うのは変わらない。この時点でユウのPLである私に選択権がなかったということだ。

『冒頭に時間かかり過ぎですね。もっとシンプルに行きましょう。仲間なのに腹を探りあっている辺りが、彼らがどういう繋がりと一緒にいるのか、が全く以って不可解に映ります。』

GMである竹地がその状況を作ったにも係らずその責任をPLに押し付けている一例である。不可解と言いながら仲間なら腹を探り合わないという固定観念でPLやPCを糾弾する。腹を探るのでなく、同行の理由が不純なものであった以上、この結果は当然のものだった。

『少なくとも時と場合を見極めて本心を話せない間柄では、ただの戦闘の際の相棒というだけであり、それ以上の仲間関係は望めないと思いますよ。』

竹地がこの状況を作り出しておいて上から目線での説教。精神的に選択肢をなくしておいて失敗したらそれを責める。モラル・ハラスメントそのものである。

『男はただその展望台から深い眠りの底に沈んだ村を眺めていた。頬に一筋の光るものを流しながら……。

ここでのユウのあまりの空気読めないっぷりがみんなの笑いを誘っていたような
…wwwwwwwwwwwwwwwwww』

ギャグをやってもこの始末である。空気が読めないギャクをやっても竹地はこういう扱いをする。

『閉鎖的寒村が舞台の事件というのはどれも似通ってしまうとは思いますが、でも一番影響

を受けたのは、ひぐらしのなく頃にですね。』

この竹地の発言もあって、私は、あまりよい印象をもってなかった『ひぐらしのなく頃に』を見るのもイヤになった。

『征軌の父征道が同門の健の名を偽って一緒に剣士として戦う。これも最初からいつかはやろうとしていたネタです。』

ちなみにみんなあっさり「氷川健と名乗った者＝氷川健本人」と信じこんでしまったのが、今回の痛いオチの遠因。小説とかの技法とかでもこういう事があります。TRPGも挿絵のない小説同様に発言者のビジュアルが分からないので、使えた方法であります。』

『信じこんでしまった』と竹地は言っているがこれはGMとPLの信頼関係を揺るがす行為であり、PL側が自制してその後の出現するNPCを片っ端から疑わなかっただけである。PL側がその気になれば出現するNPCを「こいつは信用できない。この前もGMはPLを欺いた」と言い放ってセッションを崩壊させる事も可能だった。結局、PLの良心が竹地のキャンペーンを支えていたということになる。

『そして久遠寺時雨の生まれ故郷もまた征軌と同じであるという事実。久遠寺時雨という人物自体を追っている人は、ほとんどいませんが（・∀・）ニヤニヤ』

竹地自身のNPCに愛着を持つのは自由だが、それに付き合うのはPLの義務ではない。久遠寺時雨というNPCを追ってもらいたいのなら相応のアプローチと努力が必要にも係らず、竹地は煽るだけでそれ以外の事はしなかった。

『今回は一日で全部が終わり切らずに、次の週にマキながらやるという異例のセッションになりました。』

竹地はサラリと言っているが時間管理の失敗を自ら認めている。あれもこれもと欲張った結果が次週に繰り越しという結果になった。これだけでも竹地が吟遊詩人GMであるとの証明に値する。

12回目

12話目に入る。

『2012年8月6日。佐那子からの情報かすでにみんなノスリでユウが人間の尊厳を放棄したバイトをやっている事は知っている模様。』

こうやって私のPCを貶めるが、竹地には貶めているという自覚はない。モラル・ハラスメントの好例である。さらに私のPCであるユウの行動に言及しているのはここを含めても2か所。私はこういった扱いを受けてきた。

『というところで第V話終了。今回は消化不良というか、練っていないなというのが丸分かりのシナリオでした。モチベーションの維持とかいろいろと大変ではありますが、それはそれ、最初から「長くやる」と言っていた通り、長い目でどうかお付き合い下さい。

次回は第VI話はきちんと話を練ってインターハイ変をやりたいと思います。その次は一度はやってみたかった百物語変です。本当の意味でのPL参加型TRPGを実現できると思います。目安11月に行うのが百物語変という感じです。』

『練っていない』という時点でGMとして真摯さに欠ける態度だったという事と、無意識のうちに竹地が私のPCをこういった扱いにしているというのが証明された。『長い目で』という言葉信じた結果が最悪の結果をもたらした。私に人を見る目がなかったという事だろう。そして『本当の意味でのPL参加型TRPG』という竹地の言葉は現状ではPL参加のTRPGではないという事を竹地自身が証明することになった。

13回目

そして、13話目に入る。

『もともと彼らが特殊な事情で集まった高校生とはいえ、部活に入るというある意味学生らしい事をしていないのが、ちょっぴり寂しく思えました。』

部活に参加するのは強制ではない。なので部活に参加しないのが必ずしも学生らしいとは言えない。GMの思い通りになるセッションのどこに楽しさがあるのだろうか。

『さて話がずれましたが、今回は9時半に始め、9時前に終わりました。食事等入れても約12時間。とはいえ今まで大体これくらいで、時には借りている施設が閉まっても終わらない事の方が多かったですし。』

竹地がGMとして時間管理をしていない、もしくは時間管理をする能力自体がないという事を示す言葉である。他のPLのロールプレイ時間にそのほとんどが費やされ、私にはほとんどロールプレイの時間がなかった。

『ノスリでいつものように人間の尊厳をドブに捨てるバイトをしている飛鳥ユウ。』

このように私のPCを描写する竹地は自分がモラル・ハラスメントをしているという意識は皆無だった。

『マスターの皮算用で参加を強制させられるユウ。』

このようにPC側に選択権はなかった。これはその一例である。

『ここで面白いのは、ユウのエージェントとしての自覚。元々泰一が専任で、という形で事件に関わる事になりましたが、終始ユウは天空に薦められるまで、エージェントとして動く事はありませんでした。ユウにとって天空との約束が大事と取るか、泰一に振られた話なら、自分は関わらなくていいと考えていたのか微妙なところですよ。』

少なくとも事件の内容、犠牲者が出ているという事を知っていても、動かない辺りユウに不可解さがあります。天空先生一筋かと思いきや泰一用にフラグを立てている節も見られますしね。彼女の行動基準が一体何なのか？ 友達が一人で任せられたなら、それはそうするのがスジと考えている一方、泰一をキープ君としておきたいという複雑な乙女心なんですかね（えー）

PCにエージェントとして動いてほしいと思うなら相応のアプローチが必要である。その努力

を怠ったにも係らず、エージェントとして動かなかつたと竹地は言う。さらにその動きが不可解だと竹地は言っているがこれでNPCである天空に対して何もしなければGMから批判を浴びる。セッション内におけるPCの人間関係をGMに強制される理由はない。竹地はそれを許さなかつたが。

『別に首尾一貫にしろとは言いませんが、約束に固執する辺り、それでいて八方美人なところのあるユウはある意味生々しく見えました。が、彼女の場合「友達のために動く」のではなく「悪魔と戦えるのだから手を貸す」という方が近いのかもしれませんが(マテ)』

人は状況によって立場や考え方が変化する。自分の事で精いっぱいな高校生なら尚更である。そして、首尾一貫という考え方が周囲に迷惑をかける例は数多い。『八方美人』『生々しく見えました』と私のPCを蔑む前にそういう状況を作りだしたのはGMである竹地であることを竹地本人も忘れてる。竹地のシナリオに沿えば行動が縛られ、シナリオに乗らなければユウのエージェントとしての自覚を責める。こうして私はセッション中にモラル・ハラスメントを受ける状況に追い込まれていった。

『ユウ、泰一の活躍もあって、ヨモツイクサを退けるも、王貴人が倒せない。そんなときに泰一が困っていれば、駆けつけるとばかりに卿嵩と恒月が参戦します。』

こうして、竹地は呼ばれもしないのにNPCを登場させてPCの活躍の機会を減らしている。

『最後は卿嵩が止めを差しました。』

今回もNPCがとどめを刺すというオイシイところを持っていく。

『DMの意図するところ、必ず何らかのヒントがあるという思い込みに固執するのも危険ですねぇ(・▽・)ニヤニヤ』

竹地自らがその状況にPCを押し付けておいて自分の頭の中にある正解を答えろという「両腕を縛っておいて戦いを強いる癖」がまた出た。こうして着実にGMへの不信が積み重なっていった。

『ユウは先んじて日光へ。彼女を止められない小夜子は、征軌に電話。「おこるぞ」だけでユウを止められる征軌に乾杯(・▽・)ニヤニヤ』

ここでも竹地は私と私のPCであるユウを貶める。これもモラル・ハラスメントの一環であると

考えると説明がつく。

『そして同じように泰一にツンデレFLGを立てたユウ。しかし翌日にはしっかり紗綾に踏み碎かれてますが（マテ）』

竹地はどうしても私のPCを貶めなければ気が済まなかったようである。FRG（フラグ）を立てた後、それが壊された事を喜んでいる。竹地はGMとしてフォローを行うという発想には至らなかった。

『途中まで剣道の試合を見ていた征軌、泰一、ユウはテレポートで会場にやってきました。しかしこの行為は、大きな後悔へと繋がる事になったのでした。あれだけ弓道の決勝戦と、剣道の決勝戦は同じタイミングだと言ったのにねえ…。』

竹地はPCよりもNPCを優先させたがっていた証拠がこの発言にある。弓道の試合にはPCが出場していた以上、どちらが優先されるかは（念のため言うておくが）PCが優先である。そして、竹地はNPCの試合である剣道の試合を優先させなかった事に対して報復手段を取っている。

『さてすぐにテレポートで戻ると、剣道の決勝戦はすでに終了していた模様。しかも小夜子は病院に搬送されたらしい。』

気に入らない展開になるとNPCを傷つけてそれをPC達の責任にする。こうしてPCに罪悪感を植え付ける手法はモラル・ハラスメントの手法と同じやり方である。

『ずっとやりたかったインターハイ変をようやく行う事ができました。ただ序盤・エンディングはともかく中盤から終盤にかけて適当さ加減がでてしまい、参加PLには申し訳なかったなど。』

逆に考えると中盤から終盤はPCが独自に動けたということである。実際のセッションも序盤とエンディングは竹地にGMとして強制されたイベントが発生していた。

14回目

このような背景があった上で14話目に入ることになった。

『さて今回はメインは二人の透子、そして紗綾の話でもあります。』

メインはNPCと断言できる竹地は吟遊詩人GMとしてPCをストーリーの添え物程度にしか考えていなかったというのがこの記述からでも分かる。

『単純に遊びに来てほしいという透子。そしてその際の条件として、「紗綾は絶対に連れて来ないこと」。これを忘れていた征軌はその後ネチネチとイジられる事になります（
・▽・）ニヤニヤ』

NPCを優先してPCを蔑ろにしろと、このようなダブルバインドにPCを立たせる事は竹地のセッションでの恒例の強制行事となっていた。私は征軌PLには心から同情した。

『ここでアイスコーヒーを頼んだ透子。これは大いなる伏線でした（
・▽・）ニヤニヤ これに気付いてくれる人がいると信じていましたが、その後のシナリオの難易度は下がりました。』

これもセッションでの強制行事である竹地の頭の中にある伏線を当てるという途方もない作業だった。竹地がGMとしてミスリードをするという行為をしていたので今回の行為もミスリードではないかと私が疑わなかったのはまだこの時は「後輩だから大目に見る」という気持ちが残っていたからに他ならない。

『一方、ユウはノスリに来店した天空から一緒に青森県に民俗学のフィールドワークに行かないかと誘われます。当然のように凰麟も一緒ですが。

前回のこともあるので、今回はパスしたユウ。これはある一つの重要なシナリオ分岐点でしたが、まあそういう事もあるって事で（
・▽・）ニヤニヤ』

竹地は顔文字を使って私や他のPCを蔑む。GMしか分からない展開を持ちだしてPLやPCを見下す。竹地の増長がセッションを重ねるにつれてひどくなっていった。

『時間を見て透子に電話をかける征軌。しかし出た透子の様子は少々変わっておりました。その前に紗綾から電話があったためなのですが…。

紗綾ちゃん、連れて来ちゃったんだね…

私との約束、破ったのね…
私との約束、破ったのね…
私との約束、破ったのね…
破ったなあ!!』

これも竹地の「PCよりもNPCを優先せよ」というドクトリン（教義）に基づいた行為であるとすれば理解は容易である。しかし、それがPCを操るPLに対してどれだけストレスや不満を生むかまでは竹地は想像することはできなかったのである。

『取り敢えず丸越玲子之家に招待される一行。そして昼間から熱い鍋焼きうどんを振舞われる。玲子は熱いものが大好きなのです。これもあっさりスルーされちゃったなあ……。残念だ（・▽・）ニヤニヤ』

『スルーされちゃった』と嘆く前に竹地はそのヒントをPLが見える形で示す必要があった。その努力を怠り、その結果をPLの判断ミスと騒ぐのは竹地のマスタリングの特徴である。これもその一例である。

『さて柏尾神社に向かおうとした矢先、恐山から傷だらけになって下りてくる人影が。それは悪魔の攻撃を受けて、ボロボロに傷ついた黄天空と黄凰麟でした。
あんですとー!?Σ(°Д°;)」
凰麟は何やら呪いのようなものを受けていた模様。ユウと一緒にいればこんな事にならなかったかも（・▽・）ニヤニヤ』

竹地はここでも顔文字を使ってPLの決断の不備を蔑む。「自分だけは正解を知っている」というGMの立場からのPCをあざける行為はモラル・ハラスメントそのものであり、そのようなあざけりにPLが付き合う理由は本来、存在しなかった。

『そして、骨壺のような壺が。中を開けると白い粉が。これを舐めようとしたユウは人として（ry）』

竹地のなかでは『骨壺のような壺』は骨壺そのものであり、『白い粉』は人骨としたいのだろう。しかし注目すべきは以前からのGMによるミスリードが多発しており、目の前に提示されたものが『骨壺のような壺』である限りは骨壺でない可能性を検討しないというわけにはいかない。『白い粉』であって人骨ではない可能性がゼロではない以上、それらを検証するのはむしろ当然の行為である。しかし竹地は『ユウは人として（ry）』と蔑むばかりでその行為を嘲笑対象としてしか見ていなかったのである。吟遊詩人でないGMならば「ぶっちゃけ、それは人骨です」と宣言して検証を回避することもできたが、竹地にはそういった発想はなかった。

『通された奥座敷で、透子のお話を聞く紗綾。ここで「お茶を淹れる」という説明があったのですが、残念ながらそこまで意識が廻っていなかった模様ですね（・▽・）ニヤニヤ 透子は猫舌だったのでね（・▽・）ニヤニヤ』

こういった「後出しジャンケン」的な発言が続く。竹地は自分しか知らない正解にたどり着かなかったとしてPCを見下す事に悦を見出していた。

『連れて行かれた地下牢にやはり、凰麟と同じく呪いをかけられ、身動きがとれなくなっていた玲子がいました。しかし、その腕に巻かれたミサンガ。それは透子に紗綾から送られたプレゼント。』

難易度最高なら、この描写はカットする予定でしたけどね（・▽・）ニヤニヤ』

またも竹地は「後出しジャンケン」的な行為を自画自賛している。PCを袋小路に追い込んでおきながら、手加減をしているとでも言いたいようであるが、この考え方こそが吟遊詩人GMを生み出す土壌とは竹地は思わなかったようである。

『紗綾を殺すために墮天使が召喚される。その墮天使たちも、ついカツとなったユウの活躍によって退けられる。』

竹地には私のPCであるユウの行為は『ついカツとなった』としか映らなかった。竹地には表面的な事が見えてもそれを面白可笑しく蔑む事でしかできないということだった。

『というところで第Ⅶ話終了。透子と玲子の見分け方には誰も気付いてくれなかったワナ。みんな洞察力をもっと磨いて下さいね（・▽・）ニヤニヤ 透子と玲子の入れ替わりが分からなかったら、どんな悲惨なシナリオ展開になっていたでしょうかね。おそらくPCたちは玲子を透子と思い込んで止めを刺す、という展開になっていたかと。きっと誰も救われないシナリオ展開になっていたと思います。』

竹地の「後出しジャンケン」の自画自賛はここでも発揮されている。「ギミックに気がつかないのはPLたちに洞察力がないからだ」ということである。まともなGMなら「PLの皆さんに気が付くようにヒントを出せなかったGM自身の技量が稚拙でした」となるが、竹地はここでも他罰的で自省することはなかったのである。

『およそ11時間の長丁場、よくぞ乗り切って下さいましたm（_ _）m』

11時間のセッションの間、食事で一度中断した以外はずっとセッションは続いた。この頃は待ち時間があってもまだ耐える事ができた。しかし、それもずっとではなかった。

15回目

15話目の検証に入る。

『「国会図書館はここから近所だが～」という発言は、重大なヒントですね（・▽・）ニヤニヤ』

ここでも竹地は顔文字を使ってPCを見下している。『重大なヒント』であるならその旨の周知をするのがGMの責任であるが、今回も竹地は「後出しジャンケン」の自画自賛をし、責任を放棄して悦に入っていた。

『さてPCたちが風潰しで当たっていると、本棚の間にはさまった謎の紙切れが。それには「ご苦労さん」という意味のギリシャ語が書かれているのであった。

今回は深読みをしてはまってしまったパターンです（・▽・）ニヤニヤ』

竹地はPC達深読みさせてハマらせて悦に入っていたのである。ここでも「後出しジャンケン」の自画自賛をし、責任を放棄して悦に入っていた。

『これで分かってもらったと思いますが、武器は三段階で支給されます。という事でまだそれぞれのPC専用の最強の武具はまだって事で（・▽・）ニヤニヤ それはほんの終わりの頃に支給されるでしょう。』

つまり、PC側には武器選択の自由すらない、ということである。そして武器の支給も竹地の気分次第であるということである。これも吟遊詩人GMの行為としては分かりやすい一例である

。

16話に入る。

この回のセッションは変わっていた。それは、竹地の記述で説明したい。

『システム的な話を。今回は普段PLが使っているPCを他のPLが使い、またNPCもPLが使い、PLが他のPLが使っている自分PC+NPCの二人で事件を解決した、というシナリオを作ってもらいました。

これによって、自分のPCが普段他人からどのように見られているか知る事ができるのです（・▽・）ニヤニヤ』

当然のようにPLには拒否権はなく、GMである竹地による強制である。ならば与えられた状況を最大限に活用することにした。つまり、吟遊詩人GMのマスタリングをすることで、竹地に反面教師として学んでもらうことにした。しかし、結論から言えばこの方法は失敗に終わった。

『よって予め言っておきますが、辛口批評なので読みたくない人は読まないで下さい』

他人のGMのやり方には辛口で望むという竹地の態度がすでに人を見下していたということだろう。

『どーでもいいですが、この黙示録メンバーはみんなNPCと絡み少なすぎ+仲悪過ぎ。こっちも以前話した事の手前、話を持ってくる側に対しての態度があれば、持って行き辛くなるってものです。』

それは果たしてPL側にその責任がある事なのだろうか疑問である。竹地のGMとしてのマスタリングを省みて思い当たる事はなかったのだろうか。ここでも竹地は他罰的だった。

『ユウといえば悪魔を見たら即発砲という概念がGM+PL間のコモンセンスとなりつつある今日この頃。ろくに情報収集もやらず、演じたPLの即行解決！ 何でも銃で！の徹底振りは見事でした（お』

竹地が『コモンセンス』と呼ぶのは自由だがその行為自体がPCを虐げているとは思わなかったのだろう。PCに自由行動をさせずに線路に乗せて一本道のシナリオを走らせるという竹地が毎回やっている手法を再現してみせた。しかし、竹地には全く届かなかった。

『ユウというキャラクターは人として、終わっているとつくづく思いました（お　しかもそれが共通認識として浸透しているところがもう救いがありませんね(ノ° Ⅱ°)八(° Ⅱ°)ノㄱ-イ』

典型的ないじめの発言でありモラル・ハラスメントの一例である。しかもGMとして『救いようがありません』とその救済を放棄していた。竹地はPCを貶めないとGMができなかったということである。

『さて、イイこと尽くめのようにですが、ここで大きなマイナス点があります。

まずこのシナリオを楽しんでいたのは誰だった？という事。TRPGを楽しむのは参加している全員であり、ことにPCを動かすPLが中心だと思えます。いわばGMはホスト・ホステスとして客をもてなす側です。』

ここまで認識しておいて竹地は何故自分のセッションに反映することができなかつたのか疑問である。しかし、私の本来の意図である「竹地のマスタリングをデフォルメして反面教師として見せる」という面においては成功していた記述が以下にある。

『ですが残念な事に、このシナリオはどう見ても「GMが楽しんでいる」ようにしか見えませんでした。GMがチェックリストまで作ってそれをユウを演じるPLに強いるのはやり過ぎでしょう。』

竹地が通常行っている「自分の頭の中にある正解を当てさせる」という行為に対してチェックリストを使って可視化してみせた。しかしこれをもって竹地に反省を促すのは失敗した。竹地には自省という気付きがなかったからである。

『考えてみて下さい。もし自分が同じPLの立場であるなら、そのシナリオを楽しいと思えますか？ 非常に窮屈そうですね。PLが演じたユウを評価するのではなく、いかに「GMが演じている飛鳥ユウ」に似ているかという「そっくりさんコンテスト」なわけです。それでは面白くないに決まっています。』

自分のPCを他のPLに預ける時点でそのPCに不似合いなら制限をつけるのはむしろ当然の行為である。「そっくりさんコンテスト」と「GMの頭の中にある正解を当てさせる行為」は竹地のやっている事を再現できた。そして『面白くないに決まっています。』と気付かせる事には成功したが、それをもって竹地に自省させるまでには至らなかったということである。

『自キャラに愛情を注ぐのは結構です。しかし、それを他者に強制するような事は止めましょう。』

ここまで言っておきながら、竹地自身はそれをNPCで自らも行っていると気が付く事はなか

ったのである。

『今回のシナリオの主旨がきちんと伝わっていなかったゆえかもしれません。それはこちらの落ち度でもあります。ですが、TRPGの基本、ゲームを楽しむのはGM以上にPLである、という事だと私は思いました。』

だからといって竹地の「NPC>PC」という考えは変わらなかったのはその後のセッションを見れば分かる事である。吟遊詩人GMのマスタリングをすると同時に竹地のマスタリングの再現には成功したが、その結果を竹地が自省できなかつた以上、私の意図は失敗に終わったのである。そして竹地によるGMのマスタリングの評価とPC演技の評価。聡明な人物なら「TRPGは演技を評価するものではない」と見抜いて直ちに竹地と距離を置くだろう。さらにマスタリングの評価をされた時点で竹地に対する警戒レベルを上げただろう。残念ながら当時の私は自分の意図が失敗したという事がショックであり、そこまでの発想にはならなかつたのである。

『たまには銃使い以外のキャラもやりましょうという天からの啓示でしょうw 違うキャラをやるという経験ができたのも良かったのではないかと。』

この竹地の発言は私がサークル以外では銃使い以外をやってないという結論ありきの発言であった。この時期の私の日記を読み返すとコンベンションに参加していた。つまり、竹地の見えなところで私は『銃使い以外のキャラ』をやり、『違うキャラをやるという経験』も体験済みだった。しかし竹地はいつも通り私を侮蔑することで自分の正しさを保つことしかできなかつたということであった。

17回目

17話に入る。

『とおよそ800字近く使ったおちよくりは置いといて（お』

さすがに『女にも男に興味がないから獣姦』という内容を引用する気にはなれなかった。PCはPLのセッション内での代理である。それをこういった書き方で貶める竹地の気持ちを想像する事は私には無理であった。

『ここで、出向いていったのは紗綾と泰一。きっとユウが行っていたら情報聞き出す前に殺してますね(ノ°Д°)八(°Д°)ノヱー』

竹地が顔文字まで使って私のPCを貶めている理由は以下にある。

『基本稼業ではなく、乱射魔になった』らオシマイっ

私のPCであるユウを乱射魔と見ていたのはGMである竹地自身であった。そして、その主張は作られたイメージだけで根拠と呼べるモノはまったくなかったのである。

『あくまで征軌にとっての主観的な最善を取ろうとする征軌。それは仲間によって阻止されました。』

仲間によってと竹地は言っているが、それ以外の選択肢を竹地は提示することなく、その責任をPL達に押し付けた。竹地の提示した以外の方法はすべて却下されていたからである。

18話目に入る。

『やり直したいという場面は、アキハバラ変の黄凰麟との会話。もう一度戻れば違う答えが返ってくるのではないかという思いから。

結果は変わらず答えは同じでした。

GMとしては、そろそろ次のシーズンに向けて設定外のことをしてもよかったのではないかと思います。』

今回も竹地は思うだけで具体的に選択肢を示すなどの行動は行っていない。過去の決断の上に現在の姿が成り立っているのにそれを否定するかのよう竹地の『やり直したいという場面』である。それがないと答えたPCには竹地は容赦しなかった。

『やり直したい瞬間、振り返りたい思い出はないという答えでした。

GMとして、それはおかしいだろう？ というのがこちらの思いでした。結果としてクロノスに「征軌は何も見えていないし、何も決められず、答えを先延ばしにしているだけ」という風に評されてしまったわけですが。』

クロノスというNPCがおかしいと感じたのではなく、竹地がGMとしておかしいという主観に基づいた考えを押し付けていたのであり、吟遊詩人GMとして『自分の想定した以外の答えは不正解』という典型的な態度である。

『スマソ。あやふや（えー 原稿にも全てアドリブで返すと書いてあります（おGMとして脊髄反射が板についてきたのであれば、それは個人的には合格点なのですが。果たしてPCたちの思いはどうなったのでしょうか。』

事前にPLに教えてもらうなどの方法が取れたにも係らず、竹地は当日アドリブで返している。つまり、まともに取り合う気がなかったということである。この行為一つでも竹地が吟遊詩人GMそのものであり、態度としては「真摯な」姿勢を著しく欠くものだったと言える。

『一方デートを終えて、帰るユウと天空。天空はそこで、ユウに何かプレゼントをしようか？ と提案。貴金属のものはダメというユウは代わりに御守りをもらいました。

銃はバリバリ金属だと思うのですが気のせいですかね（・▽・）ニヤニヤ』

GMから提案されたのは指輪だった。これを私は断った。火薬を扱うのなら火花の出る可能性のあるものは身体から極力外す。そういった気遣いに竹地は気がつかなかった。竹地は『銃はバ

『バリ金属』と言っているがGMから強制された武器が金属であるとの描写はない。

『普段「またね」と挨拶する天空が「さよなら」を告げた。そのことに何の疑問も抱かないおめでたいユウ（えー』

ここでも竹地は『おめでたいユウ』と言って私のPCを貶めていた。自分だけが正解を知っているかのような高みから眺める景色がよほど気に入ったということだ。

『ユウは泰一とデートの約束をする…らしいです（えー GMはこの辺名前しかメモってなかったのであまり憶えてません（あ』

このような記述からも竹地が「NPC>PC」というスタンスでGMをしていたのは明白である。すべてにおいてNPCのほうがPCより優先されていたのである。

『みんな思い思いのやり方で、出発する紗綾を激励する。ただしユウは最後まで相容れないままでしたが…。これは果たして自力で解決できるのかは私は知りませんし、タッチしたいと思いませんし、すべきではないと思います。

そもそもお互いなんでこんなに拗れているのか、表面的な理由、根本の真実の理由が分からなくなっているように思えます（お 客観的に見ていると本当にワケ分からない状況ですので。

まあこのままうまくやっていて下さい。間違っても途中でキャラクターを放棄するような事はしないように。』

PC間の問題は放置という竹地の態度が良く分かる一文である。ユウという私のPCが他人に土足で内面に入られるのはイヤだという立場からのスタートを竹地は理解しようとしなかった。

『2005年3月から始まったESVシーズンも1年3ヶ月でようやく完結です。ちょwwwwwwナガスwwwwww』

竹地が自ら短縮することなく、やりたい事をやった結果である。PL達が物語の中心ではなく、端を歩かされていたのではないだろうか。

19回目

19話へ移る。

『では本編に入ります。まずは例によって夢を見る。』

これはすでにオープニングが形骸化しており、竹地のGMとしての限界がここにあった。パターンから脱出することができなくなっていたのである。

『真人間になりつつあった良麻は完全にキャラを食われてしまいました（えー』

竹地はこのような発想しかできなかった。今まで同様「他のPCを貶める」事でしか表現ができなくなっていたのである。

『しかし、自分の存在意義や今の世界を気に入ってしまった良麻は、それが決断できないようです。自他共に認めるヘタレですね（えー』

ここでも竹地は「他者を貶めて笑いを誘う」というモラル・ハラスメントやいじめ行為によく見られる行為を行っていた。

『さて校内をする委員長こと飛鳥ユウ。あまり遠藤凜を快く思っていない一面が覗いてましたね（・▽・）ニヤニヤ その辺は紗綾と原因が同じと思われませんがね（・▽・）ニヤニヤ』

竹地は顔文字でモラル・ハラスメントをするだけで目の前に展開されていた状況に対して何も対応しなかったのである。この態度が後の悲劇に繋がっていく。

『これでこの後学校の卒業文集を調べようという発想を持つ人はいますかね（・▽・）ニヤニヤ まあ何を調べようと思うにもよりますがね（・▽・）ニヤニヤ』

これは竹地が「自分の頭の中にある正解を回答せよ」と言っているのと同義であり、調べようとしても「それはできません」と却下された以上、「両腕を縛っておいて戦いを強いる癖」がまた出ていた。

『真ん中に映っているのは、当時の所長代理である八丁堀トシ（特別友情出演）。彼は迷惑そうな顔をしている。その傍らにいて、腕を組んでというか、まさにあててんのよな聖藍学院高等部の制服姿の少女が今目の前で、泣いている少女久遠寺時雨なのだ。』

『主に古株PLから爆笑w これは当サークルで行った最初のキャンペーンのキャラクターであり、当時の二人は恋人FLGなんか立ってなかったしね。でもこれは重要な伏線なのです。』

これは竹地の悪質な「原作レイプ」という行為である。元のセッションを自らの都合のよい方向へ改変する。竹地の自己満足が分かりやすい方向で表現されたのである。

『レインがああ場所に事務所を構えた理由。それは彼から事務所の権利を騙し取ったわけではなく、ただいなくなった彼の帰りをずっと待ち続けているからなのでした。

帰ってこなくなった後も、時雨はトシが帰ってくることを信じ続けているのです。』

こうして元のセッションを竹地の都合のよい世界に改変していく。竹地の行為は「原作レイプ」そのものである。

『良麻が探していたアイテム「賢者の石」。それは他ならぬ自分たちの雇い主の心臓として機能していたのである。

第1話当初の良麻ならば、躊躇いなくレインを殺し、その心臓を引き抜いただろう。だが、今の良麻は……………ヘタレだから（マテ』

ここでも竹地はPCを貶めて笑いをとるというモラル・ハラスメントといじめ行為を繰り返していた。

『かつてこれほどまでに恐ろしい敵がいただろうか！（マテ あらゆる敵よりも速く動き、確実に敵を仕留めんとする乱射魔が今自分たちの背後に！！（カレ』

私のPCである飛鳥ユウを乱射魔という失言をした竹地の心理がここで分かる。竹地の認識はこの程度であり、竹地にとってのPCは自分自身にとっての添え物でしかなかったのである。

『それにしてもユウ、空気嫁（お』

この竹地の一言からも竹地が思い通りにならないと他者を貶めるという行為をしていた事が分かる。

『勝負は時間に直しても1分も経たない。お互いボロボロでしたが最後に立っていたのは鳳麒麟でした。』

NPCがPCに一方的に戦いを挑んでおいてNPCが勝利する。これも吟遊詩人GMのマスタリングにはよくある光景である。

『大勢の死者を生み出しかねない暴走。ならば征軌の父親の命と、母親の悲しみで済むのであれば、どちらが良いかは明白である。基地外に正論を言われてしまいましたね（・▽・）ニヤニヤちなみに彼女たちが基地外を装っているのは、その方が万が一「殺人」をした時に罪に問われなためなのだそうです。刑法第39条1項です。かつてこれを悪用した事件を扱った特撮もありました。』

念のため刑法第39条の1項を引用する。

『刑法39条 1 心神薄弱者の行為はこれを罰せず』

現在では減刑の対象であっても無罪とはならないという判例が多い。ちなみに精神障害者を偽装しても精神科医が行う精神鑑定では見抜かれるという事だった。竹地はここで「精神障害者を装えば殺人も無罪になる」という嘘を前提として精神障害者への差別をしていたのである。

『ユウも天空の知られざる過去が明らかになり、転換期が訪れているという感じでしょうか。泰一と合わせ、今後黄家と関わっていくシナリオが続きますが、どう動くかは彼女次第です。』

竹地は『彼女次第』と言っているが実際は自分が気に入らないとセッションの結果そのものを修正することになる。その結果を私は一身に被ることになる。その始まりというのが次からである。

20回目

20話目に入る。

『白い少女は良麻がうっかり避妊をしないで紗綾との間に作ってしまった子供なのでした（えーそれは第一シリーズの最終回にその描写がPL・PC間でなされていましてのでね（・∀・）ニヤヤ DMとしてはどうこの投げかけられた難しい御題にいかにかに反撃するかというのに頭を悩ませました。何しろTRPG中での性行為ですからね。これを切り返すのは知り合いのNPCを斬殺以上に難しい。だから決めてました。なら子供を作っちゃえと（マァ だって話を振ってくる方が悪いでしょう（・∀・）ニヤヤ そういう突付きやすい題材に対して、このDMがスルーするわけがない（マァほんの一回の傷の舐めあいの行為が、物凄い責任問題に発展。避妊はきちnswでf r g t h yじゅきお；p@;y=-(°Д°)∴. ターン』

ここで竹地は悪意をもって性行為の結果を歪曲し、その責任だけをPCに押し付ける行為に出た。当然だが、「避妊をしない」という描写はどこにもなく、それ自体が竹地の捏造である。仮に避妊をしたと宣言したとしても竹地は「ストーリーの都合上」避妊失敗としてその結果を押し付けたということは『だから決めてました。なら子供を作っちゃえと』というこの一言に集約されており、この時点で竹地の悪意が介在していたのは『ほんの一回の傷の舐めあいの行為』とPC達の行為を見下すための口実として使われたのである。

『紆余曲折あったものの、硬化する一方だったユウと紗綾の関係も一応の進展があった模様。』

「紗綾のPLから苦情が来ているから当人同士できちんと解決して下さい」と竹地はメールを私に送ってきた。私のPCである飛鳥ユウのスタンスが「全世界が自分にYESとは限らない。他人に踏みこまれたくない場所もある。だったら、それを守るのは必然」というものであり、他人の踏みこまれたくない場所に土足で踏みこんでいる側の肩を持ち、土足で踏み込まれている側に解決を求める竹地のやり方に少しずつGMとして、一個人としての信頼がなくなりつつあった。結果として、ユウは「好きにすれば」としか言わなくなり、感情をぶつけるような事はしなくなった。つまり、ここで私のロールプレイへの制限への道が開かれたのだった。

『ユウにしては珍しく理性を働かせて、発砲しなかったものですね（えーそして気がつくと自分の家。テーブルには両親の書置きが。ちょっとルーマニアまで行ってくる』

『そしてユウはソラに言葉や概念を教えてほしいと頼まれます。どうやらソラはユウを地球人の模範サンプルとしたい模様。それは明らかに人選を誤っているが、各PLの共通認識でした（マ

テ 少なくともここにいるPCは全員まともじゃないので、特異点にある、キワモノ、例外のサンプルとして、採取するべきだと思います（加レ』

ここでも竹地は私のPCを貶めている。発砲しなかったのは彼女が竹地が言うところの「ガンキチ」ではないという証左でありさらに言えば相手に悪意がなかったからである。そして「ブタペスト」と言ったはずの地名がルーマニアになっていた。ここでも竹地の事実の改変が行われていた。竹地は私のPCをキワモノ扱いしていた。これも無意識化のモラル・ハラスメントやいじめ行為に匹敵するものである。

『何はともあれ、ユウの両親の記憶すら操作し、まんまと飛鳥家に居ついた宇宙人ソラ。これから奇妙な同居生活が始まるのでした。まさにそれなんてBLゲ？（マ

そしてこの時ソラはユウに銃とは？ 命とは何?と問うて来ます。そして自分もそれで撃つのか、と。

この辺の回答はユウらしかったですが、銃まで渡してくるとは思いませんでした。』

『銃まで渡してくるとは思いませんでした』と竹地は言っているが弾を抜いた銃を渡したところでユウの手元には弾入りの銃があったわけでそういう意味でのリスクマネジメントをしていたつもりだが、竹地にはまったく見えてなかったということだった。

『薫は腹部を撃たれ、夥しい血液を流していました。立ち向かおうにも普段使っている銃番天印は、ソラに渡してしまい絶体絶命。が、しかし唐突に壮一は引き上げていくのでした。勝手に戦うと天陸に叱られると言い残して。ともあれ危機を脱出したユウは急いで傷の手当てをするのだった。』

『絶体絶命』と竹地は言っているが、実際はサブウェポンを持っており、戦闘に対処できたが敵が撤退したので戦闘にはならなかった。ここで私のPCであるユウは師匠であるNPCの薫の手当てをしている。この場面だけ見ても竹地の言うところの「ガンキチ」とはかけ離れたものであると言える。

『そして、武器がなかったユウの元にソラは武器を改造して持ってきたのでした。命を殺める武器を君に渡す僕も罪深いのかもかもしれない。身なりは天空のソラは哀しく晒うのだった。』

では他に方法はなかったのか。『晒う』前に代案もなく感傷的になられても困る。では悪魔に殺されろとでも言うのだろうか。そのように主張する自由があってもこちらにそれを聞く義務はない。最大の問題はこのようなセリフはセッション中になかったということだ。

『ちまちまと全殺しにしない状態で戦っていたので、この戦いはなかなか好評でした。し

かし戦闘時間が1時間以上かかってしまったのは要反省点。ということで、10ターン以内で倒すなどの制限を設けました。なので、これからは出し惜しみせず全力で悪魔と戦っていくことをお勧めします。』

これでPCの戦術も竹地は制限していく。『お勧めします』と竹地は言っているが実質的なタイムリミットをつけての強制である。戦闘まで吟遊詩人GMとして介入し、管理していく。時間を浪費するのがイヤならば敵データを調整すれば解決する。竹地は「NPCにもドラマがある」という自らの言葉をPLに押し付けていった。

21 回目

21 話に入る。

『ソラは今朝見たテレビのことで、命を奪う事は悪い事なの？ とユウに聞いてきます。それは悪い事だろうと言われると、ユウにその道具を返してしまった自分も悪い宇宙人なんだなとションボリしてしまいます。』

『命を奪う事は悪い事なの？』という問題に「良い」と答えればガンキチ扱いで人道的にも非難を浴び、『ユウにその道具を返してしまった自分も悪い宇宙人なんだ』とNPCを通して非難される。『フルメタルジャケット』という映画のシーンに似たようなのがあった。『いいえ 軍曹殿！ どう答えても間違いで、答えを変えると鉄拳制裁が待っています』と言ったジョーカーの気持ちがよく分かる出来事だった。

『美波とよく似ている子がいる。

それは容姿が同じというわけではない。それはもしかすると天空を包み込む独特の雰囲気なのかもしれない。

周囲のPLからは失笑が漏れていたがw あんなのが二人もいたらアqsw f r g t h yじゆきお ; p @ : ; y = - (° π °) · ∴ . ターン

ついでにいうなら天空先生は趣味がわアqswでfrgtヒュjキロ ; p@p;y=-(°π°)∴. ターン

天空はユウを美波と重ねて見ているだけ。死者にその想いが勝てるはずがない。』

ここでも竹地は私のPCであるユウを貶めている。『天空はユウを美波と重ねて見ているだけ』とは「PCをNPCに重ねて見ているだけ」ということであり、『死者にその想いが勝てるはずがない』という部分は「PCがNPCに勝てるはずがない」と読みとれる。竹地が吟遊詩人GMであるという裏付けがここでも見られた。

『しかし、高さおよそ295mの頂上にある小さな的を撃ち抜くには、相当な精度とテクニックがいる。そしてそれを実行できるガン〇チがひとり（えー』

『さすがはガン〇チ師弟ですね（えー』

ここでも竹地は私のPCであるユウを貶めている。

『今回のユウの見せ場のひとつ。全員の協力があったからこそできたの芸当である。』

まずこの竹地の発言から疑わなければならない。『全員の協力』とあるがそれは『NPCの協力』と言いたいようである。その証拠に、

『本来なら捕らわれていなければ、狙撃手のユウに対し、観測手の征軌が着く予定。そこは代わりに千里眼の能力を持つ透子がおっかなびっくりサポートします。』

と、予定を変更してまでNPCを活躍させていた。

『ユウが亡くなった美波の歳に近づくころ、もう天空はユウを美波の代わりとは見れなくなっていた。

一人の女性として、大切にしたい存在。それゆえ危険な目には遭わせられない。

本国で突然現れ、叛旗を翻した実兄黄天陸。これを誰にも迷惑をかけないためにも、一人で止めに行く。

それを薫に伝え、けしてユウには言わないように口止めをしたうえで、彼は去っていったのでした。』

これは、どう取り繕っても「戦力外通告」をされたのであり、同時にユウの天空に対する信頼を大いに損ねる事になった。「お前は役に立たないから連れて行けない」という事ではPCとNPCのどちらが主でどちらが従か。竹地の中ではNPCが主でPCが従であった。これが如実に示している。

『ユウの覚悟を見届けたうえで、薫は頼みごとをします。

天空を中途半端な気持ちで追いかけるなら行かせない。が、あいつのことが本当に好きなら追いかける、と。』

ここで問題提起のために「追いかけない」を選択するという事ができたのか。答えは否である。ユウはすでに敵を追う状況に追い込まれており、他のPCも同様であった。

『散々挑発をする凰麟。だがそれはひとえに天空を思う気持ちとユウへの反発心から。

あの日。天空とユウがデートをしたあの日のうちに、天空は香港へと帰っていった。

家族である自分にすら伝えてもらえなかった「さよなら」の一言。全て一人で抱え込んで天空は帰って行ったのだ。

さよならすら言ってもらえなかった私の気持ちはあなたには分からない。でも、力になりたい。だから凰麟と鳳麒は学校を退学してでも天空の下へと向かったのだと。』

ここは単純化して「そんな事でPCに八つ当たりされても困る」という事だ。NPCの事情やドラマをPLやPCに強制されても困る。NPCにどんな事情がドラマがあろうとも、どのような行動をするか決定するのはPLでありPCである。竹地はそれを考慮していなかった。これもその一例である。

『一番大切な人だから。彼は彼女に「別れ」を告げた。それが命を賭けた戦いに、もう戻ることが叶わない世界に身を投じる事が分かっていたから。

だから伝えた。ユウに「さよなら」と……。

意は決した。もはや迷うことなんかない。たとえ武器がなくとも、彼女は彼を救うために戦場へと向かう。』

これがNPCである天空の自己陶醉と見られる危険性を竹地は察知できなかった。PCであるユウには『一番大切な人』であることを口実に戦力外通告をされたと受け取った。つまり、対等な関係ではなかったのである。この事態はユウにとってターニングポイントとなった。ユウにとって「決着をつける」「終わりの始まり」であり『彼女は彼を救うために戦場へと向かう』のではなく、「彼女は彼との関係を終わらせるために戦場へと向かう」というのがユウの心情だった。

。

『今回の中心は完全にユウになりつつあります。』

ようやく、という感じである。12話ぶりで話の中心にしてもらえたという事であり、それだけの期間、PLとPCが竹地によって蔑ろにされてきたということである

22回目

22話に入る。冒頭から竹地はPCを蔑ろにしていた。

『良麻、いたの?』

こういった扱いをPCにする以上、竹地の下地には竹地自身が気づいていないモラル・ハラスメントの下地があったということである。

『一方本島クーロン地区に転移させられていたユウたちもまた敵に奇襲を受けるも難なく退ける。そしてそこで一人の女性を助けた。名は黄麗飛。自称黄天空の許婚。ちなみに先の天翔とは姉弟です。』

『ここで意気消沈のユウ。天空にすでに許婚がいたと知って落ち込んでしまいます。

が、逆にGMとして見るならば、ここでユウの天空に対する思いの深さが露呈してしまったと思いました。ユウが本当に強い気持ちで天空を取り戻す為に来ているならば、例え天空の許婚という人物が現れたとしても、怯むことはなかったし、もっと麗飛と絡んでくる、噛み付いてくると思いました。要するにここである意味、今回のシナリオのカタストロフの下地ができてしまっていたんだと思いました。』

ここでも竹地の「NPC>PC」の図式が成立している。NPCの設定を優先してPCを蔑ろにする竹地のやり方はすでに述べた。許嫁というPCの努力では解決できない設定に対して、竹地は『ユウの天空に対する思いの深さが露呈してしまった』と言っているが、PCの士気を削ぐNPCを登場させておきながらその責任をPCやPLに求めるのは責任転嫁そのものであり、竹地のマスタリングが吟遊詩人GMのそれであることを証明していた。

『例え天空の許婚という人物が現れたとしても、怯むことはなかった』と竹地は言っているが、ユウのPLとしては許嫁の存在が隠されていた時点で「隠し事をされた」ということでの天空への不信臭いを感じてやる気は激減したし、「ユウは置いていかれたのにこの人はそうじゃないんだ」という壁を感じてしまった以上、GMの意図は失敗したということだ。さらに竹地は『要するにここである意味、今回のシナリオのカタストロフの下地ができてしまっていた』と悲劇の結末を私のせいにしている。だからと言って竹地はカタストロフの回避のためにあらゆる努力をしたかという、そうではなかった。ここでも竹地は自分には責任回避に躍起になっていた。

『そしてユウは元始天尊より新しい武具盤古旛「バンコハン」を手に入れるため、元始天尊に試練を与えられる。元始天尊の問答に対し、ユウは「目に見えるもの、それが全てで信じられる」と答える。

だがそれは第IV話、そして第V話へと続く荊の道への答えとなる。』

天空に許嫁の存在を隠蔽された以上、「目に見えるものは信じられるが、それ以外のものは信じられない」という発想になるのは自然の流れであり、『荊の道』にしたのは竹地の意図に従わなかった私への報復であった。

GMがその立場を悪用してPLに自らのシナリオを強制し、その意に従わないPLに対して報復をするという行為は弁解の余地のない卑劣行為であり、モラル・ハラスメントそのものである。

『元始天尊より賜った寶貝盤古旛。そのオリジナル技である「全弾発射」という荒業で雑魚悪魔を一網打尽というより、一瞬殲滅させるユウ。おまけにチャージ機能付きで至れり尽くせりですが、使うと物属性になってしまうのが、せめてものゲームバランス制御。

頼もしき相棒を得て、元気澆刺のユウを始め、PCたちは仲間を救うべく一斉に攻撃を開始。敵を苦戦しつつも退ける。

そしてまさに好機といわんばかりにそのまま敵の本拠地へと雪崩れ込む。この辺りの展開は、某紙使いのアニメーションと一緒に（°ε°）キツイ!!』

竹地は『せめてものゲームバランス制御』と言っているがすでに攻撃力のインフレになっている事に気がついていなかった。オリジナルの武器を使わないとダメージを与えられないという状況はその武器を使うように選択肢を取り上げられているのでありいわば「両腕を縛っておいて戦いを強いられている」状況にあった。竹地自身の自己満足のために武器を強制されており、すでにゲームバランスとしては崩壊していた。

『この辺りの展開は、某紙使いのアニメーションと一緒に』と言っているが、そこで展開を丸写しするのではなく、竹地自身のオリジナルを加えるという発想もなかった。つまり、『某紙使いのアニメーションと一緒に』の状況を作り出して悦に入っていたということだった。

『ここでパーティーを導いた黄麗飛と黄天翔は、実は故人であったことが判明。既に死した二人は黄家の縁者であった。その二人は黄家の危機を救ってもらうために、パーティーを導いたのであった。』

ここでも竹地の「NPCにもドラマがある」の強制である。「NPC>PC」の図式を作り上げるためにこうした事例を積み重ねていく竹地の手腕はここでも健在だった。それにしても「故人の許嫁なら尚更その存在を超えるのは難しい」と私やユウとしても考えるが竹地はそういった発想には至らなかった。

『パーティーを三つに分けて進む。天陸が逃げたルートにはユウ、泰一、麗華、明日香、凰麟が。

征道のルートには征軌、凜、魁、小夜子、雪代が。

壮一のルートには良麻、紗綾、鳳麒、美汐、透子が。

そして、大崩壊が始まる。

それは予め決まっていた悲劇。砕け散るコマはすでに決まっていたのだ。』

当然、パーティーを3つに分けたのはP L側の自由意思ではなく、竹地に強いられた結果である。そして『予め決まっていた悲劇。砕け散るコマはすでに決まっていた』と竹地が言う以上、そこにP Cが介入する方法はない。このようなやり方は竹地が吟遊詩人GMである証明の一つである。さらに問題のシーンがある。

『その部屋にやってきたユウたちは信じられないものを目撃する。

胸に穴を穿たれ、倒れる黄天空。間に合わなかったのである。突き落とされ、今にも息絶えようとしている天空。』

私はGMである竹地に確認をした。

「胸から血を流して倒れている。それで天空は動かないんだね？」

「はい、そうです」

竹地はこのように答えたので天空は死亡したと判断した。ところが、竹地の描写は『今にも息絶えようとしている天空。』ということになっている。「動かない」という私が確認した作業はカットされ、天空は虫の息であったというセッション内容の改ざんが行われたのである。

『すでにユウたちと天陸の間は玉虚宮崩壊のため、断層になっていた。もはや天陸に届く攻撃はユウしかできない。

また同じことを繰り返すのか。

かつて天空は美波という最愛の人を失った。それは死にゆく彼女を救う手立てをもっていなかったから。

だがユウは医療という手立てをもっていた。側にはやはり回復の術を持ち合わせている泰一がいた。

天陸は言う。まだ天空を救う手立ては残っているが、次の選択次第で彼は死ぬことになる。』

この文章を初めて見た時、私はとても驚いた。『天陸は言う。まだ天空を救う手立ては残っているが、次の選択次第で彼は死ぬことになる』このような発言はセッション中なかった。当然、『また同じことを繰り返すのか』という発言もない。私は、現場に着いた時点で天空が動かず、一言も話さなかったのが死亡したと判断したのである。その確認作業は竹地の改ざん作業によってなかったことにされたのである。さらに『ユウは医療という手立てをもっていた。側にはやはり回復の術を持ち合わせている泰一がいた』と言っているが竹地はそれについてはセッションで一切触れていなかった。

『ただし自分はこのまま去らせてもらう。

背中を向ける。撃つのであればご自由に、といわんばかりに。
ユウの選択。それは天空に代わって、天陸を撃つことだった。
放たれた銃弾。しかし、それは黄家の符によって反射され、天空の渡した御守りが身代わりとなる。』

すでに天空が死亡したと判断してユウは天陸に発砲した。それが故人の遺志を継ぐ事になる。竹地のマスタリングに最大限譲歩した結果、その努力すらも竹地は無力化したのである。この決断をユウのPLである私がした時も竹地は注意喚起もせず、GMとして「その結果はこうなるけどよいか？」というような確認作業もなかった。回避しようと思えばできたのに、竹地はそれをしなかったのである。

『それはほぼ同時だった。
御守りが砕け、それが合図になったかのように、彼の命も消えた。
そして息絶える天空。嘆息する天陸。
所詮、その程度の者だったか。失望の色を隠せない天陸はそのまま去っていく。
目の前で救えなかった命。救おうと思えば救えたかもしれない命。
凰麟の慟哭。そして、崩壊する黄家公司。』

竹地は『息絶える天空。嘆息する天陸』と描写する前にたった一言、「発砲すれば天空は死亡するけどいいんだね？」と言えば竹地の思惑通りにセッションが進んだ。しかし、そうはならなかった。私はすでに天空が助からないと思っていた。それに関しての竹地の指摘はまったくなかった。従って『目の前で救えなかった命。救おうと思えば救えたかもしれない命。』という竹地の主張は竹地自身がGMとしてのやるべき事をしなかった結果であり、一方的な思い込みである。

『天陸の亡骸の前に慟哭する凰麟。
救おうと思えば救えたはずなのに。また命さえあれば天陸を追うことだってできるのに。なのに、何故、あなたはッ…!! ユウに怒りをぶつける凰麟。あくまで悪びれないユウ。さすがに凰麟も痺れを切らし、早々に残ったパーティーを東京へと追い返してしまうのでした。』

『救おうと思えば救えたはずなのに。また命さえあれば天陸を追うことだってできるのに。』竹地はユウを貶めるのにGMしか知り得ない事実を使ってPCであるユウを不当に叱責した。これもモラル・ハラスメントの一環であると考えたと説明がつく。竹地はセッションを利用して自分がやりたい事をPLに強制し、それができないとなるとモラル・ハラスメントを行う事で報復していたのである。ここでもセッション中に『救おうと思えば救えたはずなのに』というような発言はなかった。

『GMの見地から申し上げるなら、今回のセッションはミッション失敗 といえます。』

ミッション失敗を回避できる機会があったのにそれを放棄して竹地はP Lにその責任を追わせていた。

『あれほど薫から頼まれた天空を生きて日本に連れて帰るという依頼を果たせなかったわけですから。またその際、彼らには天空を救う手段が全くなかったわけでもなく、またそれを考える時間があったわけでのこの決断なわけですから、これはGMというか私の見地から見ると明らかに失敗であり、予定されていない死が加わって非常に後味の悪いセッションでした。それは後半明らかにPL&PCが抱えているフラストレーションだったように思えます。』

P Cであるユウが現場に到着した時には天空の背中にはすでに大穴が開いていた。その時点でP Cにはどうしようもなかったのである。『彼らには天空を救う手段が全くなかったわけでもなく』と竹地は言っているがその手段をP Lに意図的に隠していたのはGMである竹地自身である。『またそれを考える時間があった』と竹地は主張するが、P L側が考えるように促されなかった以上は竹地の「ないものねだり」である。『予定されていない死が加わって非常に後味の悪いセッションでした。』と竹地は言っているが同時にそれを回避する行動をしなかったのも竹地自身である。しかも竹地の悪辣なところは『後半明らかにPL&PCが抱えているフラストレーションだったように思えます。』と言いながらGMとして竹地は何も対応しなかったという点である。

『ここに至るまではGMとしても予想外のNPCの死は痛いものと自身痛感させられました。なので以降そういったことを心に留め置きつつ、細心の注意を払ってシナリオを書いていこうと思ったのでした。』

『予想外のNPCの死は痛い』と竹地は言っているが、TRPGでは必ずしもGMの思い通りにシナリオは進まない。むしろ思い通りにならないからこそ、コンピューターRPGや小説や演劇とは違う面白さがある。しかし竹地はそれに気がつかず、P Lを締め付けてさらに吟遊詩人GMになっていく。

『やはり予想外のことに弱いらしい。意図は理解してもらっていたと思っただけに残念な結果でした。』

レビューもセッションが終わって4ヶ月後によく書けたのは、それだけ心の整理がつかなくてできればそのまま放置しておきたかったからです。でも先を見据えるに辺り、そろそろ落ち着いて書いていかななくてはならないと思うに至り、ようやく筆を執ったところです。』

『意図は理解してもらっていたと思っただけ』ここに竹地の怠慢と一方的な思い込みが凝縮されている。意図を理解させるために説明することもなかったし、一方的な思い込みを前提に勝手に残

念と私を糾弾していた。

『心の整理がつかなくてできればそのまま放置しておきたかった』と竹地は言う。ここですでに自らの都合の悪い事は触れないという下地が作られていた。しかし、自らの都合の悪い事は改ざんするという竹地のやり方はこの後も続くことになる。

『PCの選択。これはTRPGにおいて最も尊重すべきこと。であるならばそれをそれとなくGMの望んでいる方向に気付かれないように乗せていくのもGMの力量。まだまだだと己の力量のなさを痛感いたしました。これからの課題ですね。』

つまり、「PCの選択を最も尊重すべき」と竹地は言っているが、そのつもりがない事を次の一文が証明している。『それをそれとなくGMの望んでいる方向に気付かれないように乗せていくのもGMの力量。』これはステルス・マスタリング、アンダーカバー・マスタリングと言える。GMの意図している事に気がつかれないように誘導する行為はステルス・マーケティング（ステマ）によく似ている。そして竹地は自分には吟遊詩人GMの行為がGMとして力量が足りないと言い、それが課題だとした。闇がさらに深まった瞬間だった。

『黄家の崩壊。天空、そしてレインの死。ただこれはGMでも思わぬ方向で解決していくことになります。まさに土壇場に降りてきたシナリオの神。

次回、最終回テイストの黄家黄昏変（彼岸編）をお送りします。』

私がここで離脱していたら、傷は浅くて済んだのかもしれない。PCであるユウの片思いはGMである竹地に破壊されPCとしての決断にダメ出しをされる。楽しむためにセッションをやっているのになぜここまで蔑まれなければならないのか分からなかった。

『時期はちょうど秋のお彼岸の時期でした。オルタナティブとは二者択一という意味です。ある意味シリーズ最初の大きな選択肢だったように思えます。』

色々なものが竹地によって壊された。確かにこの回はターニング・ポイントだったのかもしれない。キャンペーンを抜けるチャンスがここにあった。しかし、最悪は次の回だった。

23回目

23話目に入る。

『始まる前に、反省と謝罪があります。』

今回の話はどうもGMというより、個人的主観の方がシナリオ面に大きく反映され過ぎていた面があったように伺え、PL&PCの意思を大きく侵害してしまったところがあったと思います。そこは要反省。』

当時は気がつかなかったが、竹地の反省と謝罪はネット上だけだった。直接の謝罪はない。実際は『個人的主観の方がシナリオ面に大きく反映され』ており、私自身が何のためにセッションに参加しているかわからないし、つまらない状況に陥った。この回はその始まりと言える。

『ただ厳密にいうならば、本当にPL&PCがみんな「勘違い」したままだったという点も確か。その辺りはきちんと解っていてほしかったと思いました。みんなが誤解したまま、そして例え理解していたとしても、当人に伝えないままこのまま話が進んでいいのか？ そういった思いがこのシナリオが書かせました。』

正確には『本当にPL&PCがみんな「勘違い」したままだった』ではなく、「竹地好みの考えではなかったので強制的に改めた」ということだった。ここでも竹地は『きちんと』と言っているが自身が『きちんと』マスタリングの反省をせず、口だけ、ネット上だけであった事は後から判明する。そして、セッションを通して、TRPGを通して私は竹地からモラル・ハラスメントを受ける事になる。

『ここから先は是非仲間であるPCが考えてくれたり、または泰一自身が切り開いていく道だと思う。なので今後はGMは泰一に復讐推奨！ガンガン黒泰一まっしぐらと悪魔の囁きを続けていこうと思います（えー

冗談抜きで泰一の心の在り方はGMが進めるのではなく、PL&PCが、それを支える仲間たちが探して示すものなのですから。』

竹地は『GMは泰一に復讐推奨！』とPCを煽っているが、実際に竹地が敷いたルール以外を進むのは禁じている。それは前回の私のPCであるユウがNPCである天空を救わなかったと糾弾し、ステルス・マスタリングをしてでも自らのシナリオに押し込めた事からも証明できる。

『PL&PCが、それを支える仲間たちが探して示すものなのですから。』と竹地は言うがその上から目線での考えの押しつけを竹地自身が気付かなかったところに悲劇がある。

『ま、それなら一緒に探してくれる仲間の人選をきちんとやることですね（えー』

『泰一の仲間たちはどいつもこいつも熱くなる連中ばかり。それゆえ誰かが間違っているとしても誰も冷静に見ていないから正す事もできない。』

ここでも竹地の口癖である『きちんと』を使って上から目線でPCを貶める。モラル・ハラスメントの好例である。さらに悪辣なのはPCをdisる（ディスリスペクト）している点である。『誰かが間違っているとしても誰も冷静に見ていないから正す事もできない。』とは竹地の主観であってPL側にしてみれば言いがかりレベルの発言である。ここでの『正す事』というのはつまり、「竹地にとって都合のよい方に誘導する」である。ここでも竹地は吟遊詩人GMの手腕を発揮していたのである。

『ユウはソラに子供一人を育てるのにいくらかかるのか採算させます。さてその間、ソラの独り言が始まります。』

ここから、竹地のモラル・ハラスメントが始まった。TRPGを介して、セッションを介して、NPCを介して、言葉によるいじめが行われた。ここからの記述ははっきり言って苦痛そのものである。今もトラウマとして私を悩ませている。

『要はユウが犯した間違いと誤解について。その辺りは箇条書きで残しておきます。』

竹地は自分の思い通りにならなかった報復として『間違いと誤解』と表現した。GMとしての竹地の責任はすべて棚上げして私を貶め始めたのである。

『君に話しても君は人の話を聞かないから。それで自分を変えるようなことができる素直な子じゃないから。 だから僕は独り言を言うよ。』

NPCの独り言という上から目線と反論を封じた上で、竹地の偏見である『君に話しても君は人の話を聞かないから。それで自分を変えるようなことができる素直な子じゃない』と貶められたのである。これは根拠のない偏見であり、竹地がGMとしていかに怠慢で、独善的、かつ吟遊詩人GMであったかを物語っている。

『黄凰麟が何故ユウに対して怒ったか。それは救えなかったことではなく、あくまで悪者ぶって、天空の死を省みず、哀しまなかったため。』

GMである竹地は私のPCである飛鳥ユウの感情を検証も確認もせずに『悪者ぶって、天空の死を省みず、哀しまなかった』としている。大前提としてTRPGはGMによってPCやPLの感情を強制されるものではない。その上で天空は「ユウに戦力外通告をして自分勝手に敵地に行って返り討ちに遭った」というのがユウの考えであり、それを「哀しめ」と言われてもそれは「

自己陶醉に共感せよ」と言われているのでそんな事は私はできなかった。さらに言えば救う以前に天空はすでに動かなかった以上、PL側ではどうしようもなかったのである。

竹地は自分で作り出した状況の責任だけをPCであるユウとPLである私に押し付けたのである。

『ユウ、君は誰かを守りたいんじゃない、自分の力を示したいだけ。だからもう戦わない方がいい。』

これはNPCを通じての竹地自身の本音である。だからこそ悪質である。落ち着いて考えれば席を蹴っても十分な発言であった。それをせずに無言で呆れ返っていたのは私の失敗だった。

『戦えば戦うほど君は矛盾を抱えていく。生き残れば生き残るほど君は業を背負っていく。言っとくけど、その歳でもう自分を変えられないとか言っているようじゃ、ろくな大人にはならないよ。』

だからと言って竹地が代案を提案した事はない。今回も私を追いこんでからの「モラル・ハラスメント」だった。この時に私は竹地が「ろくなGMにはならない」と察知していればその後続くモラル・ハラスメントも止められたのかもしれない。否、まともなGMならNPCを通してPCをいじめたり、ましてモラル・ハラスメントをするような事はしないだろう。竹地が結婚すれば妻に、子供ができたなら息子や娘にモラル・ハラスメントをするのではないか。そのような思いがこの文を書かせている。

『君は目に見えるものしか信じないといった。なら君に人との絆を信じることはできない。そして君の信頼を得るためには、目に見える誓約書でも書いておけばいいってことだよ。』

これは竹地の極論であり、言いがかりレベルの発言である。しかし、いじめ、モラル・ハラスメントという視点から見ると有効な言い回しであり、非難としても有効である。そして、有効であるが故に破綻している。『君の信頼を得るためには、目に見える誓約書でも書いておけばいいってこと』という竹地の発言は社会において書面を交わす意味を肯定している。覚書、誓約書、契約書、条約に至るまで、信頼の担保として書面を交わす。その行為は広く世界で行われている。竹地の発言は商行為や国家間の外交の否定である。分かりやすい言葉で反論すると「友人が危機に陥った時に手を差し伸べる事で絆は見える。そして口約束は平気で破られる」という事である。竹地の行動そのものであった。

『目の前のものしか、形のあるものしか信じないのに、天陸の言葉を鵜呑みにし、天空を救うことを諦め、目の前の瀕死の天空の容態を見ようとしなかった。君は嘘つきだね。』

竹地の都合の悪い事は改ざんされるという一例である。天空の容態を確認したにも係らず、それはなかった事にされ、嘘つきと言われる。これは精神的ないじめであるモラル・ハラスメントそのものである。

『慰めてほしければ、同意がほしいのなら、事務所の仲間にもらえばいい。彼らはきっと君にとって心地よい弁護をしてくれる。』

PCであるユウを貶めるだけでは飽き足らず、竹地は他のPCも貶め始めたのである。「仲間なら傷をなめてくれる」とでも言いたげである。

『君たちは皆お互いを傷つけないように適度の距離をとっているからね。それゆえ互いに傷つけ合おうとしない。しかも君は恐れているよね。仲間が去っていくことを。でも分かってる？それも所詮君の自己満足。』

竹地の一方的な主観で『皆お互いを傷つけないように適度の距離をとっている』と仮定されて『君は恐れているよね。仲間が去っていくことを。でも分かってる？それも所詮君の自己満足。』と竹地に私は蔑まれたのである。TRPG以前に実生活において適度な距離を取るのは礼儀であり躰の一部である。GMが『互いに傷つけ合おうとしない』と主張することは「GMの思い通りにならない」事への苛立ちである。それをPLやPCに強制すること自体がそもそもの間違いである。竹地は「個人な思いが全面出た」と言っていた。ならば、『互いに傷つけ合おうとしない』と主張するのは対人関係の破壊を意図して望んでいるということである。これが竹地の本心なら専門家によるカウンセリングや診察が必要である。

『罪は他人から課せられるものじゃなくて、自ら背負うモノだ。その意思がない限り、君の心は痛みを感じないままだ。』

このように竹地が考え、発言するのは自由である。と同時に、このような竹地の考えに私達PLが同意する必要はないし、ましてや強制される理由はまったくない。

『他人を理解することを放棄している人たちに聞いても無駄かもね。何しろみんな自分さえよければいい人たちだから。』

今日のために予定や体調を整え、交通費を捻出して集まってくれたPLのPCに対しての竹地のモラル・ハラスメントはPCの人格否定にまで至った。

『君たちは戦友だ。互いに背中合わせだ。だからお互いを見詰め合うことができないんだ。だから踏み込めない。』

これは竹地の一方的な主観であり、GMとしての限界を表している。「踏みこんで欲しい」とGMが思ってもその選択はPLにある。竹地はTRPGを自ら演出する舞台や小説と同じものだと思っていた。

『ユウは本当に彼の気持ちを理解していたの？ 君はいつから自分が間違いを犯していたか、分かる？』

そう、今朝香港に行った瞬間から君は間違っていた。そのなのに君はそれでも、天空の志を尊重したなんて言えるのかい？』

PCの行動を『間違いを犯していた』と言ってしまう竹地はダブルバインドになっていた。『今朝香港に行った瞬間から君は間違っていた。』勿論竹地は前回、間違いを指摘していなかった。その上での決断をPLである私の責任にしている点とNPCである薫を使ってまで香港行きを促した点でダブルバインドであり、ここでも竹地によるモラル・ハラスメントは続いていた。さらに言えば竹地が作ったシナリオの自身による否定である。間違っていたと思うのならば香港に行くというシナリオを作る事自体がそもそもの間違いである。

『彼の志。それは彼自身が黄天陸を止めることであって、ユウに止めてもらうことではない。天空はそもそも君が香港に来ることを望んでいなかった。それを人伝に頼んでまでしていたのに。君は中途半端に自分の都合のいいところだけを黄天空の志を継ぐとして、撃っただけに過ぎない。』

さらに竹地のモラル・ハラスメントは続く。『彼の志。それは彼自身が黄天陸を止めることであって、ユウに止めてもらうことではない。』と竹地は言っているが、ここでも「NPC>PC」の構図が見える。竹地の中ではセッションの主人公はPCではないことがここではっきりしている。PCを踏み台にしてNPCの意思とやらを優先させるのに躍起になる。モラル・ハラスメントそのものである。

『自己満足だよ。だって、天空は君をここに来させたくなかったんだもの。彼の望みは天陸を止めること。で、君は結局彼にそれを叶えさせる機会を失ったわけだ。君はただ目の前にいる「敵」を自分で仕留めたかっただけに過ぎない。そこに天空の意思はないよ。』

PCの行為を『自己満足だよ』と言ってダメ出しをする手腕はモラル・ハラスメントの加害者の定番である。『天空は君をここに来させたくなかった』という竹地の主張は「NPC>PC」の構図であり『君は結局彼にそれを叶えさせる機会を失ったわけだ。』という竹地の発言こそPCよりもNPCが主役であるという本音が見える。『君はただ目の前にいる「敵」を自分で仕留めたかっただけに過ぎない。』という竹地の主張はPLの私の考えや意見も確認せずに一方的に

主張された。竹地の自己正当化である。さらに『そこに天空の意思はないよ。』ここでもNPCの意思がPCの意思より優先されたのである。

『中途半端に彼の気持ちを、志を尊重するなんていうもんじゃないよ。それこそ冒涇だよ。彼への。君は本当の意味で何も分かっていなかったし、分かろうともしないし、自分の心を相手にさらさなかったし。彼に聞こうともしなかった。』

さらに竹地のダメ出しという名のモラル・ハラスメントが続く。天空の意思を継ぐのも冒涇で竹地の用意したシナリオ通りに天空を追って香港に行くのもダメという竹地の主張である。ならば家で寝て、何もしないのが正解かという、これまでの竹地の主張からそれもダメ出しをされるだろう。「どの選択肢を選んでもダメ出しをする」ということである。まさにモラル・ハラスメントの分かりやすい方法である。竹地のやりたかった事はユウに対して『君は本当の意味で何も分かっていなかった』と断罪し、『分かろうともしないし』と一方的に決め付け、『自分の心を相手にさらさなかった』事への恨みである。そして『彼に聞こうともしなかった。』とセッションでの行動を改ざんしたかったのである。竹地の「NPC>PC」という考えは『冒涇だよ。彼への。』という言葉で表されている。PCの考えや行動よりもNPCの考えや行動が崇高で神聖であると竹地が考えている。だからこそ、竹地は『冒涇』という言葉を使ってPLである私とその分身のPCを貶めた。

『君が素直じゃないのは分かってるけど、君はその機会を自分で潰し、人に恨まれることで己を律している。

気付いてる？ それって君が撃とうとした男と本質は同じなんだよ。』

ここでも竹地は自分の都合の良いようにPCユウを解釈している。『君はその機会を自分で潰し』というのは竹地がGMとして不作為の結果であり、その結果だけをPCユウとPLの私に押し付けている。『人に恨まれることで己を律している。』というのは解釈と言うよりは妄想であり、その理由を作ったのは竹地自身であることはすでに忘れられている。『君が撃とうとした男と本質は同じ』という発言に至っては「ここまでPCを貶めないでGMとしてマスタリングができないのか」と思った。

『永遠のような責め言葉。ユウに反論の余地すら与えません。』

竹地はこう言っているが言われた側の私は反論する以前に「呆れて言葉も出なかった」という状況であり、ここで荷物をまとめて帰っていたらと悔やまれる。この無言が肯定と竹地に受け取られたのは痛恨事だった。

『この辺りはGMというか、私個人のものの見方です。今日このセッションまでに積もりに積もった思いが堰を切った形で氾濫してしまいました。それを被ってしまったユウのPL様には大変ご迷惑でしたでしょう。本当にすいませんでした。ただこれらの指摘のうち、いくつかは御本人含め、その場にいたPLたちに響いたかもしれません。少々自論が先走り過ぎました。』

念のため言うておくがTRPGでGMはPLに対して自分の考えや積もりに積もった思いを押し付けてはならないのは当然である。それをしたいのであれば自室に籠り小説を書いていけば良いのである。竹地はここでは謝罪を口にしてはいるが、実際に私に頭を下げて謝罪してはいない。竹地の本心としては「結果的に本意は伝わったのだから方法はまずかったかもしれないが、目的は正しかった」ということであり、『少々自論が先走り過ぎました』とわざわざ『少々』と付け加えているがそんなレベルではない。竹地自身は正しかったという主張である。『ただこれらの指摘のうち、いくつかは御本人含め、その場にいたPLたちに響いたかもしれません』と竹地は主張するが、私は響くどころか嫌悪しか抱かず、呆れて無言だった。この時点で竹地の本質が露見したが、まだ改善の余地は残されていると私は考えていた。しかし、それは幻想だった。

『長い。本当に永い1日が終わった。早朝から夕刻までの戦い。そしてその後のPC・NPCたちの遣り取り。恐らく最も濃密な1日シナリオだった気がします。』

竹地だけがやりたい事を無制限に行った結果である。『最も濃密』と竹地は言っているが実際は竹地による吟遊詩人GMのマスタリングだった。竹地は自分の思いをPLに押し付けることしかできなかったのである。

『早朝から泰一をストーカーするユウ ちょwwwおまwww（・▽・）
自称ヤングレという身も蓋もないイタすぎる少女飛鳥ユウ。』

竹地はこのようにPCを貶めているが、なぜそれが必要だったか。これは明快で他者をこき下ろす事で自分を優位に見せるためである。PLはGMの引き立て役と竹地が考えていたのなら、この行為の説明はつく。

『泰一にユウは自分のことを考えるように言います。が、ユウにも他人に自分がどう見えているかを考えるようにした方がいいと思うのは私だけでしょ（えー）』

ならば、竹地も私からどう見えているか考えるようにと云えばよかつたと思う。ここで竹地が直接謝罪をするなどの真摯な態度になっていたら、これ以上は吟遊詩人GM化しなかつたかもしれない。

『直感チェックをして、事件現場の人だかりに須磨寺雪代の姿を見かける。当然のようにチェックに成功。ユウが後を追いかけるも、またもあっさりと気付かれてしまう。ユウは探

偵じゃないから尾行は得意じゃないんだよね。』

ここでも竹地はPCを貶めている。自分を優位に見せる事に腐心する。尾行を失敗させるために直感チェックは成功させているのが悪辣というものである。竹地は意図的に失敗をさせてNPCを優位にしたのである。

『彼女がいた理由。それは特に話すことではない、と拒絶されてしまう。今回はこういうノリが多いですね。』

今回も竹地はPCが問題解決に自発的に動こうとしても自らのシナリオが大事でそこからの逸脱を許さないというマスタリングであった。

『そして、ようやくユウはもらった寶貝盤古旛が使えなくなっている事に気付く（お）
井の頭公園の太上老君を訪ねる。すると曰くユウが元始天尊との契約の際に嘘をついていたから。正確には嘘をついたことになってしまったから。これは先に述べた通り。』

竹地は自分のシナリオに従わなかった報復にPCの武器を無力化した。GMはそこまでの強権を発動できる。一般にはそのような強権の使われ方はされない。なぜなら、吟遊詩人GMがよくやる手段だからである。

『目の前のことしか信じられない、といった彼女に形のないものは、愛や友情、絆や信頼。そういったモノは信じられないということになる。』

あなたが信じる物は何か。この辺はもっときちんと考えて回答をほしかったところ。故に逆手にとらせてもらいました。』

『そういったモノは信じられないということになる。』竹地は勝手に結論をつけた上にその結果をPLに強要していた。私は竹地の詭弁にGMの権限を乱用されて付き合わされたのである。『この辺はもっときちんと考えて回答をほしかったところ。』ここでも竹地は『きちんと』を用いているが竹地自身が「きちんと」PLに説明した形跡はない。竹地の本音は「もっとGMの頭の中にある答えに沿ってきちんと回答をほしかった」という事である。その努力も説明も「きちんと」しなかったにも係らず、一方的に要求していた。

『ユウは盤古旛に誓わされました。勇気を守り、希望を与える。誰かに希望を与える為にこの力を使う、と。』

武器に支配されていますね。この後、非常に状況が似た人が出てきますが（お）

竹地は『武器に支配されていますね』と他人事のように言っているがそうさせたのは竹地自身で

ある。『ユウは盤古旛に誓わされました。』という強制イベントによるものである。そこにPLの意思の介在はなかったのである。

『仲間に電話するも、気が付いたのは征軌や紗綾、凜といった人たち。そして何故か泰一とユウは押し掛け女房&お泊りイベント発生。これは、第一章最終話のデジャヴのように感じるのは私だけでしょうかね（・▽・）ニヤニヤ

俗に傷の舐めあいと言います（ブツヤケスギ

傷を負った者同士が肩を寄せ合っている感じでしょうかね。見ていて非常に危うい。お互いにおかしなプレッシャーだけはかけないように願いたいです。』

『そして何故か泰一とユウは押し掛け女房&お泊りイベント発生。』ここで竹地が疑問を持たず、事の本質も洞察しなかった点が浮き彫りになった。竹地は自分が用意したシナリオ以外には興味がなかったのである。『俗に傷の舐めあいと言います』と竹地は言うがそれこそが「目の前にあるものしかみていない」状態である。その現象がなぜ起こったかという点に発想が至らなかった時点でそこが竹地のGMとしての限界。さらに、竹地の本音は『お互いにおかしなプレッシャーだけはかけないように願いたい』と偏見と詭弁に満ちた上から目線の発言しかできなかったという点である。

『翌20日。呼ばれなかった小夜子が征軌を責めます。征軌が電話を寄越したのはPC連中のみ。透子や小夜子、その他のNPC連中には連絡をしませんでした。

共に戦っている仲間だからこそ、連絡はしてほしいと小夜子はいいます。』

ここでも竹地の本音が出ている。「自分の作ったNPCを蔑ろにするな」という事である。一方で竹地はGMという強大な権限を用いてPLである私や分身であるPCを蔑ろにしてきた。NPCにドラマがあろうがその選択はPLがするものであり、GMにはない。ましてや、GMがNPCのドラマを強制させることは吟遊詩人GMへの道である。竹地はこうして吟遊詩人GM化していく。

『一方、学校に残っていたユウは図書館へと向かう。全く以って180度似つかわしくない場所に来た理由は、かつて凰麟が座っていた場所に何となく気が向いたから。彼女は涙を流し、抗議した。貴女は何故、天空兄さんのために泣いてくれないのだ、と。』

まず竹地はいつものように『全く以って180度似つかわしくない場所』とPCを貶めてから『かつて凰麟が座っていた場所に何となく気が向いたから』と事実を改ざんした。実際は情報収集のために行っていた。そしてここでも自分のシナリオ通りにならなかった事を責めている。『貴女は何故、天空兄さんのために泣いてくれないのだ』という問いの答えは簡単である。「戦力外と判断して残したのは天空自身だ。そして単独で戦闘して振り返りに遭ったのも自己責任だ。私は彼

に同情すべき点がない以上、泣く必要はない」今の私ならそう答えた。当時は呆れて黙っていただけである。

『良麻が不在の為、魁を連れて行くことに。そして、これがまさに魁ワンマンショーの始まりだったのである。』

竹地はすでに『自キャラに愛情を注ぐのは結構です。しかし、それを他者に強制するような事は止めましょう。』と言っていた。しかし竹地自身はPCよりもNPCの活躍を優先させたのである。ここでも竹地の「NPC>PC」という構図は変わらない。『ワンマンショー』と言ってしまふ竹地は無意識下で吟遊詩人GMのマスタリングを行っていたのである。

『展望台フロアで待ち構えていた菅原壮一と激突。開口一番。

即行解決 何でも銃で！

動くヤツは全部的！

逃げるヤツは普通の的だ

逃げないヤツはよく訓練された的だ

m9（＾皿＾）プギャー!!

というどこかで御馴染みのフレーズが飛び出す始末。どなたか非常に見覚えがあって、イタい思いをされたかもしれません。』

竹地はここでもPLやその分身であるPCを蔑むことで自己の優位性を保っていた。『イタい』というよりは竹地の吟遊詩人GM臭を嗅ぎ取った私としては呆れてその状況を傍観していた。

『聖書の怪物ベヒーモス。その巨大な怪物を前に立ちはだかるは幡場魁。これまで第IV覚醒していなかったため、ついにその脅威の腕力が発揮される。

ワザ使って、ダメージ350超えてナニさ？

クリティカルでもないのに大ダメージを連発する魁の活躍もあり、悪運は削り取られ、ベヒーモスはやがてただの銃へと戻りました。』

これほど分かりやすい「NPC無双」「NPCのイイトコ取り」は見る事はできない。これではセッションの主役はNPCであり本来の主人公であるPCは脇役である。このようにNPCばかりが活躍するマスタリングは吟遊詩人GMにはよく見られる特徴であり、PLの士気を下げるにはかなり効果的である。

『ユウが紗綾を訪ねていった理由。それはユウの確信から。すでに紗綾のお腹には新しい命が芽生えているという確信からでした。

で、母親が一人で子供を育てるにはどれくらいかかるのか、という試算をして手渡すユウ。

(° ㄥ°)ポカソ とかちよwwwおまwww (・▽・) とか、まあ感想は個人的にはこんなところで(お』

竹地はここでもPLを貶めるために事実を改ざんしていた。試算を手渡していたのではなく、試算と3000万円を渡そうとしていたのである。実際には受け取り拒否に遭ったので試算を渡してもいない。そして顔文字を使ってまでの侮蔑。表面上の事象だけを見ては本質を見失う。竹地は身をもって実証していた。

『さて、ユウは泰一をデートに誘います。泰一も満更ではないような流されているだけのよ
うな。迂闊なことをやるとしっぺ返しをくらうのが黙示録世界です。』

PC同士の交流も自分の考えに反するようであれば粛清の対象となる。竹地はこうして吟遊詩人色、独裁色を強めていく。NPCを使ってPCを貶めるGMならこういった事はむしろ自然とすべきである。

『仙人相手に達者で声をかけるのはアレですが。』

正確には「お達者で」と声をかけているが私の行動は竹地の基準では『アレ』という表現で貶されている。自分の基準と反するモノにはモラル・ハラスメントをするという竹地の行動の一例である。

『天空は既に首から下が動かない状態になっていました。それでも彼は生きていた。

天空兄さんのことは、私が見る

それは凰麟の強い意志。肉親以上の強い愛情の成せること。事実死に体等しいこの身体の天空の面倒を見ることは、とてつもなく困難です。

ユウは天空と凰麟に謝罪します。そして天空を凰麟に託すのでした。

こうして天空を巡る恋の戦いは、終わったのでした。

個人的には(・3・)アルー? とかわされるどころがありますね。それ以上漏らすのは無粋ですから。』

竹地が『個人的には(・3・)アルー? とかわされるどころ』と言っている以上、私は説明をするのが義務だろう。

まず、『ユウは天空と凰麟に謝罪します』というのはPCユウの心情として「あそこで頭を下げないと事態が收拾しない」という大局的な判断で「ユウが我慢をすれば」と思っていたから謝罪をしたのである。すでに天空から戦力外という意味である「単独での香港行き」があり、同等に見られていないと感じたユウの恋心はすでに消えている事は前述の通りである。竹地は天空とユ

ウの恋を続けてほしかったので『個人的には(・3・)アルー? と思わされるところがありますがね』と言っている。しかし、TRPGではGMがPCの恋愛を強制できるものではないのである。竹地には根本的な問題として「TRPGではPLが必ずしもGMの思い通りに動かない。だからこそ楽しい」というのではなく、「PLがGMの思い通りにならないのはおかしい」というものであった。そこには竹地が吟遊詩人GMとしての下地が作られていたと思わざるを得ない。無粋という言葉で自分の無知を隠蔽する前に自らを省みる必要が竹地にはあった。しかし、それはされずに終わる事になる。

『最終回テイストでお送りした黄家編の延長戦でした。この話はとても大きくて、強引な修正が入りました。それをどこまでご理解いただけたかは、私の方には分かりませんね。お一人を除いて。ただ楽しんで下さったらそれで満足ではあります。』

強引な修正を入れてでも竹地は自分のやりたい事をやるということであった。「GMのシナリオに従わないとこんな目に遭う」という理解はできた。竹地の頭の中だけにある正解は分からないので私はその「お一人を除いて」の一人ではない。楽しめたかということ諦観の方が強くなった事は確かなセッションだった。

『最終回は何とか大団円にしないと、と思います。架空の物語だけに辛い試練や戦いの最後最後に辿り着いた場所に、光明を見出したいと思います。』

しかし、竹地が言うように光明が出ることはなく、私にとっては大団円にはならなかったのである。

『あくまでGM的な見方からすれば、ここはこうしてほしいなあ、もっと裏を読んでもらいたいなあと思うところは多々あります。そしてもっとPC同士、踏み込み合って支えてほしいです。』

PLのプレイスタイルやロールプレイにまで竹地は希望を出している。これも吟遊詩人GMにはありがちな行為である。『PC同士、踏み込み合って支えてほしい』と竹地が希望してもそうなるとは限らないからこそTRPGは面白いのだが、竹地はそこが不満であった。だからこそ今回のように私のPCが貶められたという事である。

『ソラの言葉を借りて多少なりとも私の胸のうちの明かしました。どうか「戦う為だけの仲間」に陥らないように。「戦う為だけのキャラクター」にならないように。そして、誰を救うべきで、誰を倒すべきかを間違わないように。そして、仲間は何もPCだけではない、ということも忘れないで下さい。彼らは確かにコマではありますが、一人一人敵も味方も私が命を吹き込ん

だ分身みたいなものであり、個々人に歴史があり、ドラマがあります。むしろこれから先は今までスポットが当たっていなかったNPCたちの過去と、今度の事件、さらにはPCたちの過去が複雑に絡み合い、最終回へと向けて突っ走っていくのです。』

『ソラの手紙を借りて多少なりとも私の胸のうちに明かしました』竹地はPLである私を蔑むためにNPCであるソラを利用した。『「戦う為だけの仲間」に陥らないように。「戦う為だけのキャラクター」にならないように。』という竹地のエゴイズムのためなら何をやってもよいという事である。さらに『誰を救うべきで、誰を倒すべきかを間違わないように。』竹地の頭の中だけにある正解をノーヒントで解けという事である。これも吟遊詩人GMとしての下地である。

『仲間は何もPCだけではない、ということも忘れないで下さい』これは単純に竹地の主人公はPC達ではないことを示している。『一人一人敵も味方も私が命を吹き込んだ分身みたいなものであり、個々人に歴史があり、ドラマがあります。』というNPCのドラマに関わる事を強制していた。すでに竹地はこの時点で吟遊詩人GMだったのである。

『以降修学旅行変以外は少人数でも進められるシナリオシステムにし、短時間&ロールプレイ重視&戦闘は爽快に、と合言葉にいろいろとやってみたくて浮かんできました。』

こういったPLを蔑ろにするシナリオ・システムにすることで竹地はさらに吟遊詩人GM化していくことになる。それに私は付き合う事になる。

24回目

24話目に入る。

『良麻も遅ればせながら、宇治山田駅に向かう。その時凛とユウが迎えに行くことになったのですが、ここで境内で知った顔を見かけます。』

『一方薫は表参道に新しい店をオープンした模様。代々木上原から店舗を移し、心機一転。ユウの悲惨な日々は続く模様です。』

今回PCであるユウに言及しているのはこの2か所のみである。一つはNPCの行動なのでユウに竹地が言及しているのはこのセッションでは一つということになる。このように、蔑ろにされる事が増えていく。

25回目

25話目に移る。

『ユウに関しては最早主戦力&コスプレ要員です（えーかくして夏以来再び修羅場に突入するユウと紗綾。』

同人イベントに強制参加させるシナリオを竹地は強制してきた。そこにPLに拒否権はない。ここでも竹地は吟遊詩人GMのマスタリングをしていた。

『麗良は屈斜路湖変の際に友人になったユウを訪ねて単身上京してきたのだった。』

検証にあたり、この記述を引用しておく。

『どうやら麗良にはユウに相談したい事があったらしい。その悩みをかつてユウが麗良に打ち明けたように、麗良もまたユウに相談に来たのです。とはいえ、麗良もまさかユウもたった3ヶ月でいろいろあって、スレてしまったとは夢にも思わなかったのです（えー』

ここでも竹地は『スレてしまったとは夢にも思わなかったのです（えー』という表現を使ってPCであるユウとPLである私を貶めている。根拠となっているのは竹地の一方的な主観である。毎回のセッションでこのように竹地に私は貶められていた。

『一人行方不明になった泰一は、拉致されていた。』

竹地は一行で済ませているが、拉致に対して抵抗ができる選択肢はなかった。竹地が敷いたレールに強制的に乗る以外に選択がないのである。これは吟遊詩人GMがよく行う手法である。

『この辺りは時間が経ち過ぎて、何があったのかよく憶えていないのですが（お もっとメリハリつけたシナリオにするべきだった。』

竹地は目的を果たした後はどうでもよくなったということである。時間の経過を言い訳にしているが、興味がないものには徹底して蔑ろにする竹地のポリシーがここでも見ることができる。

『ユウは、大学に行かせてくれるというのだから行けばいい、とといいます。そしてその後ゆっくり恩返しをすればいいのだと。どことなくPLの心象風景が見えてくる一言ですね。』

恩返しをするのが普通の感覚の人間だと思っていた。その考えが甘かった事を私は経験することになる。竹地が恩を返すという発想がなく、恩を無視して私を蔑ろにしてきたのはここまでの記

述で証明できる。しかし、まだまだ悪夢は続く。

『今回は反省材料が多く、予備準備が多い割にはやっつけ仕事になってしまい申し訳なかったです。

話は簡略にするのが一番。そして大事な焦点を暈さないように気をつけねばと思います。』

竹地は『やっつけ仕事』と言っている。そのために休日を丸一日潰して参加しているPLに対して真摯さに欠ける態度を取っていると竹地は気がついていない。それが最後まで続くことになる

26回目

26話に入る。

『続いてはユウ。放課後になって事務所に行くと、いつものように集まっている面々。そしてこれからユウは北海道から家出してきた麗良と都内に遊びに出かけます。そして二人は、明日は六本木ヒルズに行って、東京シティビューを見て、スイーツ（笑）を食べに行こうと約束します。スイーツ（笑）が分かんない人は、ググレカス（・▽・）ニヤニヤ』

ここでも竹地は『ググレカス（・▽・）ニヤニヤ』とPLを貶めている。このような徹底さがモラル・ハラスメントの下地になっていく。

『雨の六本木ヒルズ。地上52Fのカフェでスイーツ（笑）を頬張るユウと麗良。話題はいつしか年頃の女

らしく彼氏の話題に。そしてユウの彼氏候補に挙がる男PC三人（・▽・）ニヤニヤ ご愁傷様（えー特に泰一に至っては顔が（・▽・）イ!!を連呼されている模様。男は顔なのですね（・▽・）ニヤニヤ 頭一抜け出している泰一。

しかし泰一にはすでに故郷に結婚を約束している男性がいたり、雌猫奴隷がいたりと何かと罪深いので、ユウの恋の前途は多難です（マ）』

『ユウの彼氏候補に挙がる男PC三人（・▽・）ニヤニヤご愁傷様（えー』と竹地はPCを蔑んでいる。PCを貶めて自分を優位に見せるいつもの方法である。『男は顔なのですね（・▽・）ニヤニヤ』顔以外の要素があることはすでに前のセッションでも言及しているが、竹地はここでもPCを貶める事に腐心していた。さらに、『しかし泰一にはすでに故郷に結婚を約束している男性がいたり、雌猫奴隷がいたりと何かと罪深い』と自らPCに押し付けた設定を使って貶めている点が悪辣と言える。

『ユウは順調に敵を倒しつつ、森タワーの中を移動します。この時同道したのは、麗良の守護霊となっていた麗良の祖母竜那でした。麗良もまたユウを苦しめるために、異相空間に巻き込まれなかったのでしょうか、麗良には竜那という能力者でもあった祖母の霊が守護しており、空間によるダメージは入らなかったのです。』

私はここで違和感を覚えた。『麗良には竜那という能力者でもあった祖母の霊が守護しており』という点が麗良は戦力外と考えられていたのかということ麗良自身に失礼だ。それは天空に勝手に香港に行かれたユウと同じである。さらに『、空間によるダメージは入らなかった』というのはやけに都合のよい、まさにご都合主義であった。

『征軌は繭を探すために繭の制服のリボンをサイコメトリー。 見えてきたのは、繭の着替えの場面だった (・▽・) ニヤニヤ』

『豆腐の角に頭をぶつけて死んでしまいたくなる瞬間ですね (・▽・) ニヤニヤ』

GMはその気があればいくらかでもPLとPCを思うように貶める事ができる。この竹地の行為はまさに好例であった。GMが悪意をもって情報を渡さない。さらにPLの機転を潰してしまう。GMとして最もやってはならない事を竹地は同時にやっていた。『豆腐の角に頭をぶつけ』るのはPLやPCではなく、このような行為で他者を虐げていたGMである竹地自身である。

『一方疲れ果てた紗綾と母紗織。もうすぐ夜が来る。紗織はもう十分だからここで自分を置いて逃げるように紗綾にいいます。しかし、紗綾はここで生まれて初めての我侬とばかり母を連れて戦う道を選びます。

が、この数分後には最後の戦いに巻き込まれてしまい、早々に前言撤回する事に。何とも軽い生まれて初めての我侬デスネ (えー カオスに振っておいた方がいいと思いますよ (・▽・) ニヤニヤ』

竹地自身がGMとして状況を設定したにも係わらずその状況で生まれた結果に対してPLを卑下する。ここでも竹地のモラル・ハラスメントの行為を見ることができる。

『完全に良麻とそのハレ晴レユカイな仲魔たちは、ネタキャラ確定ですね (・▽・) ニヤニヤ 劇団川上は放っておいて (お ものの4ターンで敵を殲滅。まあこんなものでしょう。』

ここでも竹地はPLを貶めて自分を上位に見せている。『ハレ晴レユカイな仲魔たち』『劇団川上は放っておいて』という蔑む言葉を意図して選んでいる。これが無意識下で行われている以上、竹地本人がモラル・ハラスメントに気がつくことは最後までなかったのである。

『ユウと麗良はやり直しとばかりに再びスイーツ (笑) を食べに東京シティビューへ。兄が上京してきた事をそっちのけで夜景を見ながらスイーツ (笑) をつつく二人。そこで話題に出てくるのが泰一でした。ユウは彼氏にするならフィーリングが大事といたつつも、泰一の事は顔しか褒めてませんね (えー こんな調子ではユウの思いは果たして叶うのでしょうか…。』

『泰一の事は顔しか褒めてませんね』と竹地は主張するがこれこそがPCを貶めているという行為である。さらに『こんな調子ではユウの思いは果たして叶うのでしょうか…。』と揶揄する。竹地が「思いは叶うわけがない」と暗に言っている。今回も竹地のモラル・ハラスメントは続いていたのである。

『次回のシナリオは一般向けにあらず、性的・暴力的描写の塊みたいなシナリオです。苦手な方は、この機に克服されてはいかがでしょうか（えー冗談はさておき、人間の暗部に踏み込むシナリオなので、正常な精神で立ち向かうと大変です。しかしそれで流されてしまうと、同じ事になってしまうので、自身のアイデンティティを喪失しない程度に戦って下さい。肯定したら負けだと思います。』

次回のセッションも「両腕を縛っておいて戦いを強いる」という竹地の癖が全開のシナリオである。そこにPLの選択は添え物であってメインではない。そして重要なのは「TRPGは勝ち負けを競うものでない」という事にある。しかし竹地は戦いを強いた上に『肯定したら負け』と言っている。ここでもダブルバインドが発動されていたのである。

27回目

27話に入る。

『戦闘開始。ユウ、良麻と連続攻撃。彼らBRACKは特殊な装備をしており、殆ど全ての攻撃が半減され、さらには状態異常にかからない。しかし元が人間のスペックのため、さほど脅威ではないかと思われたのだが、良麻の攻撃を喰らい、斃れたと思いきや、彼は立ち上がる。』

この時点でPCが敵に対する効果的な手段が奪われたということである。敵NPCの力のひけらかしである。『NPCにもドラマがある』という竹地の意思がここでも働いている。

『そして、両手から氷柱を作り出して、投擲武器として投げつける。さらにはライフスティール、ソウルスティールと相手の命を吸い取る攻撃をしてくる。そして極めつけは、斃れない。何度倒しても立ち上がってくるのだ。』

それに対して、竹地から倒すヒントは最後まで出る事はなかった。ここでも「両腕を縛っておいて戦いを強いる」という竹地の癖が出ていたのである。

『まだ緒戦。力を温存しようと思ってかかったのが仇となる。戦いは時間切れとなり、PCたちは敗北する。』

戦闘では多くのモノを消費する。その戦いが勝利で終わったとしても。HPやMPを回復させるアイテムのほとんどは使い切りのアイテムであり、戦闘が終われば補給が必要である。PC達は今後の補給が受けられるという確信がなかった事や今後も補給なしでの戦闘であると今までの竹地のマスタリングから判断していた。『補給なしで戦え』というのは旧日本陸軍の悪しき慣習であるが、竹地は同じ事をPCに強いていたのである。

『さらにいえばコイツにはまだ大きな能力が隠されていたのですが、それはあくまで雪代すら知らなかった事…ではありますので今回は明かされず。

というか勝てないと悟った時の、勝負の投げ出し加減がなんともなあ…。ここはGMの裁量もさることながら、とは思いますが。』

竹地は自分の考えた設定が明らかにならなかった事に不満を述べているが、それはPLに押し付けるような代物ではない。TRPGでは使わなかった設定というのはセッション中にいくらでも出る。しかし竹地はそれに気がつく事はなかったのである。さらに『というか勝てないと悟った時の、勝負の投げ出し加減がなんともなあ…。』というのはPL全員がすでに結論が見えているというルールの上の列車のような竹地のマスタリングに嫌気がさしていたのであり、竹地自身

が「同じ事をされたら」という想像力の欠如でもある。これも吟遊詩人GMにはよく見られる光景である。そして竹地は『ここはGMの裁量もさることながら、とは思いますが。』と言ってPLもGMも悪いと両者の責任のように言っているが、吟遊詩人GM的な極めて自己中心なマスタリングを行った竹地に非があるのは明白である。PLにはそれに対抗する方法が残されていなかったのである。

『PCたちは射落征道に助けられたのでした。しかし、まだ緒戦と思ってかかったばかりに強烈な竹箆返しを喰らうことになった事を窘められる』

またもや「NPCが上から目線で説教」という状況である。この場合「窘められる」は「たしなめられる」ではなく「いじめられる」と読むと分かりやすい。他の方法も示さず、代案も出さずに一方的にNPCを介してPCを責める行為はモラル・ハラスメントそのものである。

『メルクヴェルディツヒ・リーベは、良麻のコンプにハッキングをかけ、良麻の仲魔たちをそっくりそのまま操ってしまう。ここはきちんとダイス勝負に持つていくべきだったと反省。でもハッキング対決はアイデアとしては面白いので、今後もチョコチョコ使っていこうかと思う次第。良麻の仲魔たちが一斉に敵に寝返り、良麻はキレる。そしてユウのコンプは……元々使わないだろうということで放置（えー

ケツアルコワトルとかの攻撃って効けばかなりイヤらしい攻撃なのにね。使わないから仕方ないけど。』

竹地は『きちんと』という言葉を多用する。しかしその割合に対して竹地自身が『きちんと』対応した事はほとんどない。ここもその一例である。さらに問題なのは『でもハッキング対決はアイデアとしては面白いので、今後もチョコチョコ使っていこうかと思う次第。』という部分である。PCから同じ方法でやり返されるのがない、つまり、敵は悪魔ばかりでそれを操るコンプ使いを出さなければやり返される心配はない、という意味では竹地にとって面白いという事だ。しかし「竹地が面白い＝PLも面白い」という図式は成り立たない。すでにPCはやり返す手段がない以上、竹地の一方的な「面白い」ということである。さらにPLは「いつ味方が裏切るか」というストレスに晒されるということである。竹地はPLを楽しませるより自分が楽しむのを優先していたのである。

竹地は当初『参加PLは皆平等』と言っていた。しかし、『そしてユウのコンプは……元々使わないだろうということで放置（えー』と自ら平等という約束を破ったのである。『使わないから仕方ないけど。』と竹地は言ってる。しかしながら、悪魔を呼び出す以外の使用法がコンプにはある。射撃命中を上げる事ができるソフトがある。そのためにPCユウはコンプを持っているのだが、26回もセッションを重ねて竹地はその事を気がついておらず、把握しようとした痕跡もなかったのである。

『そしてベアトリーチェがその腰より二挺の拳銃を引き抜く。

その銃弾はユウよりも早く。しかも、銃弾を撃ち落とすという神業をやってのける。しかも二回攻撃をしかけてきます。完全に戦意喪失というか勝負を投げるユウ。そこは剣や魔法の出番となるわけです。ユウひとりで戦ってるんじゃないんだから。』

『完全に戦意喪失というか勝負を投げるユウ。』と竹地は言う。実際にこの戦闘でPCユウはすることが封じられてしまった。つまりできることがなくなってしまったのである。これほど苦痛なTRPGはないと私は思う。そして『そこは剣や魔法の出番となるわけです。』となるが、これは「お前はただ見ている」ということであり、セッションへの参加を竹地から拒否されたのである。ここで退席していたらと悔やまれるシーンであった。

『これは知っている人は知っている、しだセッションにおける女神転生・外典第一部最終回へのオマージュです。2001年のクリスマスイブの戦い。この黙示録シリーズのキーとなる戦いを、なぞらせてもらいました。

この戦いはPCたちの勝利に終わりましたが、黙示録の世界はPCたちが敗れたという事実に基づいて続いている世界なのです』

この竹地の行為は前に触れた「原作レイプ」そのものであり、『オマージュ』などではなく、「PLの思い出を傷つける行為」である。さらに自らの世界観を押し付け『黙示録の世界はPCたちが敗れたという事実』というセッション結果の歪曲も行われていた。事実を歪曲する竹地の行為はこの時点から始まっていたのである。

『気持ち悪いほどの寝汗。しかし、これは……一体どういう事なのか。夢オチでした（えー）むしろPLの叫び（えー）

神戸での大虐殺も、雪代やレンが（ryされたことも、ユウと紗綾が珍しく息の合わせて共闘していたのも、良麻カンパニーの面々が一斉に良麻に叛旗を翻すのも、征道と背中合わせて戦っていたのも、全て征軌の夢。むしろ願望（マテ）

最終的に竹地は『夢オチ』としてその責任をPLの一人に押し付けた。この時点は私は壁を殴りたくなるような徒労感に襲われた。今日一日、無駄になったと思った瞬間だった。

『というわけで第27話終了。

これはひどいセッションでしたね（えー 開催からおよそ半年。全くレビューが進まなかったのは、周囲のPL&PCの生温かくも棘のように突き刺さる視線に良心の呵責が堪えかねてうわなにをす rアqすえ d f r t g y hじゆいkおp

全ては征軌の夢であった。ユウの夢でもなく、紗綾の夢でもなく、良麻の夢でもなく、泰一の夢でもなく、凜の夢でもなく、征軌の夢であった。

逆に征軌しかいないだろなーとこれはシナリオを思いついた時に決めていた事です。多分黙示

録を始めようと思っていた2004年頃、既にあったアイデアです。結構昔ですね。』

私以外にも「これはひどい」と思っていたPLがいたのである。だからといって状況は好転しなかった。竹地が『既にあったアイデアです。』と言っている以上、他に回避の方法はなかったということである。吟遊詩人GMの手腕を発揮した結果と言える。

『夢オチシナリオは今回が最初で最後です。流石に二度もやるつもりはありません。これも四年近く、もといPLとしての付き合いがもっと長いからこそ、一度だけやれるものと思います。』

4年近い付き合いも一瞬で瓦解する。私がそれを経験するのは後の事である。しかし竹地はその関係に甘えていたという事である。

今回もげんなりするセッションであった。

28回目

28話目に移る。

『今回、一応はシナリオを組み立てて来たのですが、例によってほとんど流されてしまいました。まあいつもの事ですね（お もう驚きもしない（え』

竹地は『例によってほとんど流されてしまいました。』と言っているが、シナリオは流されていない。竹地が流されたと感じていたのは自らが用意したギミックであり、シナリオ全体としては選択肢のない、いつも通りのルールに乗せられた、吟遊詩人GMのマスタリングだったである。

『ユウが覚えているかどうかは別にして（えー 薫のネットワークを駆使しても難しいというのが本当のところではないかと思えます。

むしろ人捜しをするのが君らの仕事（えー だって魔法科学探偵事務所でしょうが。』

『人捜しをするのが君らの仕事』と言っているが実際にやりたい事を言ったら「それはできません」と却下された以上、GMの竹地に言っても無駄になる。さらに、調べる以前に『薫のネットワークを駆使しても難しい』と調査の意思を削ぐのを竹地は怠らなかったのである。

『尤もエージェントに学歴は関係ありません。きちんと仕事をこなせるか、に拠るのですから。

でもホント、この人たち何でここにいるんだろうね（あ』

竹地は『この人たち何でここにいるんだろうね』と疑問を口にしてはいますが、竹地自身がセッションでそれを掘り下げようとする事はしてこなかったという事の証明でもある。勿論、PC側がそれをしようとしても竹地が「それはできません」と止めていたのも理由である。

『ここでキーになっている言葉が、「自分で前に進もうとしない」といメモ書きが。』

竹地は自分の思い通りに動かないPC達にストレスを感じていた事が見える記述である。竹地自身がPCに前に進んで欲しいと望んでいてもそれを取捨選択するのはPLに委ねられているというTRPGの原則を竹地は思い至らなかったという事である。

『外ではまた嫉妬の炎を燃やしているユウがwww ヤンデレ路線まっしぐらという感じですね（えー』

竹地はこのセッションでも私のPCを貶めるのを忘れない。ここでもモラル・ハラスメントが行

われていたのである。

『いきなり放課後フェイズへ（えー だって今回これがメインですからね（えー
そして征軌に明かされる紗綾妊娠の事実。しかもユウから！（えー
これはひどいwwwwww

しかし、明らかに黙っていたか、後で自分でいうつもりだったかは分かりませんが、先走って
紗綾妊娠を報告してしまうユウ。これは……(ノ▽`)アチャー

というか、前回のシナリオの夢である紗綾とユウの協力して、共感して戦うシーンは間違いなく
征軌の心底切なる願望だったと思いますね（えー

この認識の食い違いっぷりが、ユウと紗綾の相容れなさの原因の一つですね。』

ここでも竹地は『しかもユウから！（えー これはひどいwwwwww 』とPCユウを貶める。GM
として煽るだけで何もしなかったのである。『紗綾とユウの協力して、共感して戦うシーン』は
実際のセッションで行われた事であり、それを夢という「なかった事」にされた。セッションへ
の動機がさらに下がる事になる。今回も竹地はそれに気がつくという事がなかったのである。

PCユウは先走ったという事になっており、それが竹地にとって都合がよかったのである。竹地
は『この認識の食い違いっぷりが、ユウと紗綾の相容れなさの原因の一つですね。』と言っている
が『相いれなさの原因』を作ったのは今までの諸問題を放置した竹地の責任であり、GMとし
ての力量の限界でもあった。

『そう思っていると、そうなっちゃうかもしれないのが黙示録くおりに（・▽・）』

竹地はこう記述するが、実際はPCには不利でもGMが有利な事は採用される。逆にPCが有利
になりGMが不利になる事は採用されないという不公平な「くおりに」であった。

『征軌が向かった先は、黒沢病院でした。あら珍しい。

病院に行った理由は、頭がおかしいので診て下さいとか、引き金を引きたくて仕方ないんです
とか、そういう理由ではないようです（マ行』

ここでも竹地はモラル・ハラスメントの発言を繰り返してPCを貶めている。最大の問題はこの
発言がPL達に受け入れられていると思っていた事である。私はこうして自分のPCが貶められ
る度に竹地に対する信頼が失われていったのである。

『泰一は、東京における京都とのパイプ役である御室蒼雲に電話をする。しかし彼女にも繋がら
ない。まるで自分ひとりだけが置いていかれたような暗澹とした気持ちになるのであった。
そんな失意の泰一を送っていくユウ。

ちよwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwおまwwwwwwwwwwwwwwwwww普通逆wwwwwwwwwwwwwwwwww

貴方に迷いがあつたら、貴方は死ぬ。

そして、貴方が迷うなら、私も迷う。そして、死ぬことになる。

すごい励まし方だな…。』

竹地は『普通逆』と言っているが落ち込んでいたのはユウではない。そしてこの状況もPCが自主的に作り出したものではなく、GMが否応なしに作り上げた状況である。それを竹地は忘れていた。

『そこ、ワクワクしない（・▽・）ニヤニヤ

ただしPCとしてはともかく、PL同士はお互いに精神的負担を無駄に無意味にかけないこと。これはマナーです。自重するように。』

私はワクワクなどしなかったのでこれは竹地の一方的な思い込みである。そして竹地はここでも自らの行動は柵に上げて『PL同士はお互いに精神的負担を無駄に無意味にかけないこと。』と言っている。他人にストレスを与えないのは礼節レベルの問題であるが、竹地自身が私に対してすでに『精神的負担を無駄に無意味にかけ』ていたのは23話ですすでに証明済みである。

『今回は午後集合&戦闘なし回ということで、来る人いないんじゃないかなーと危惧していたんですが、みんなRPやりたい人多いみたいで、過半数以上の参加は達成できました。ありがとうございました。

みんな本当に話したいこといっぱいあったみたいですね。なんか余計拗れて大変な事になった人たちがいるみたいですが…（°ε°）キツイ!!』

これで参加しなければ情報が入って来ないことはわかっていた。逆に言えば出席しなければ孤立が考えられたのである。その点を竹地が気付いていなかった。今回も参加する度に少しずつ、竹地の信頼度は削られ、不信感は増えていく。

29回目

29話に入る。

『泰一が恒月に連れてこられた先は、京都御所のようにです。ただここは、所謂現実世界の京都ではありません。今までも何度も出てきた「異相」の世界の京都なのです。』

京都という地に帰ってきて感じる身体の変化。全ての能力値が+5されております…。当然守護宗家の面々は+10となっております（・▽・）ニヤニヤ』

ここでも竹地は自分の思い入れのあるNPCを優遇してPCを数値で差別している。当然、他のPCはそれがない。こうして目に見える形での「NPC>PC」という竹地の考えがPLに牙を剥いたのである。

『今回は泰一のPLさんには、GM側に立っていろいろ動いてもらいました。』

竹地は従順なPLには自らの設定を押し付けて思い通り動かすという事を始めた。これも明白な吟遊詩人GM行為である。

『泰一はここで明日の朝、学校に修学旅行欠席連絡を入れること、そして移動手段用に三戸の札を渡される。』

そして明日の午前、六人目の仲間「御厨冥耶」の墓参りに行こうと誘われます。

修学旅行プランをいろいろと考えてくれたB班の方、ごめんなさい&ご愁傷様でした…。』

竹地は「どうしても必要だから」と言って修学旅行プランを分単位で提出するようにPLに求めた。プランの提出がなければセッションを開催しないと宣言していた。

今にして思えばこれを理由にキャンペーンからの離脱ができた。PLはGMの自慰行為に付き合う必要はないし、そのようなセッションを強制される理由はない。結局、分単位のプランを提出したが、それが生かされることはなかったのである。竹地への信頼がさらに削られた出来事だった。

『で、東京駅に集まる面々。良麻がいけないのは別にして、泰一まで居ません。』

担任の君島先生曰く、家庭の事情でこれなくなった、という連絡があったとのこと。

ソワソワし始めるユウに凜。ご愁傷様（・▽・）』

竹地は自分の都合で状況を作り出しておいてPCを嘲笑う。竹地には『ソワソワ』としか映らなかったようだが、「戦力が足りない＝身の危険」という考えは竹地にはなかったのである。実際に私が考えていた戦闘プランはここで音を立てて崩れていく。それは竹地の吟遊詩人GMのマスターリングによるところが大であった。

『ぶっ飛ばされたPC&NPCたち。奇しくも彼らは、自分たちの旅行先に飛ばされていたのでした。

しかし、ただ一班、A班の遠藤凜だけが、真っ暗の山の中に放り出されていたのでした。

これは、修学旅行のプランをGMに任せるとかいうことになるからですね（お
むしろこちらとしては、シナリオ的に好都合でしたけどね（えー いや本当こちらの意図を汲んでくれたんじゃないかというくらいに。こちらとしてはやりたい路線に乗せる事ができたので、ついカッとなってやった。今は満足している（お』

竹地は私にはプラン作成を強制しておきながら、他のPLにはそれをしなかったのである。竹地の言う「参加PL皆平等」という台詞がいかにも欺瞞に満ちていたか分かりやすい出来事である。そして、『シナリオ的に好都合でしたけどね』『ちらとしてはやりたい路線に乗せる事ができた』と吟遊詩人GMぶりを発揮している。当然、その責任を『GMに任せるとかいうことになるからですね』とPLに押し付ける事も忘れていない。ここでも竹地のモラル・ハラスメントが行われていたのである。

『今回はNPCたちも一緒に修学旅行に出かけているので、PLさんたちに演じていただきました。』

竹地は『自キャラに愛情を注ぐのは結構です。しかし、それを他者に強制するような事は止めましょう。』と言っていた。しかし、実際は自分のNPCをPLに強制的に演じさせたのである。他人に厳しく、自らに甘い竹地の特色がよく出ているセッションだった。

『続いてはB班、外口美汐に続き、御幸泰一も欠員になってしまい、最も班員構成が少ない班というか二人。泰一がいなくて機嫌が悪いユウに付き合わされる小夜子もたまったものではありません（お』

『小夜子もたまったものではありません』とはNPCを介しての竹地の心情である。ここでも竹地はPLを一方向的に状況に追い込んでおいてからモラル・ハラスメントをしていたのである。

『やってきたのは、僧兵の姿をしたテングでした（えー 多勢に無勢ということで、逃走を選択する二人。実は逃げ足なら小夜子はユウより速いです。』

ここでも竹地は『実は逃げ足なら小夜子はユウより速いです』とNPCを優位に見せている。少しでも自分のNPCが下だと許せない。竹地のモラル・ハラスメントの下地はここにあった。

『ゴダイゴは、忠臣楠木正成を従えて、二人に襲い掛かる。二対二というキツイ勝負でありま

した。』

竹地はゲームバランスを考える立場のGMでありながら自らのシナリオを優先した結果が『二対二』という事だった。PLもPCも竹地のシナリオの前では蔑ろにされるという例であった。

30回目

30話に入る。

『さてエヴァ的にいうと、構想が大きく膨らんでしまったため（え 急遽ではありますが京都編で3部作になってしまいました。』

実際には竹地の事態收拾能力がほとんど皆無だったので『構想が大きく膨らんでしまった』という事である。これは竹地が「私はまとめる事ができません」と宣言している事と同じである。

『11月3日深夜。有無を言わず紗綾は京都御所へと連れ去られます。体のいい幽閉ですが。』

竹地はいつものようにPCから自由を奪い、自分の敷いたレールに乗る事を強制していた。ここでも竹地の吟遊詩人GMとしての手腕が見える。

『そう、毒を盛られたと警戒している紗綾。その実はあからさま煎じ薬の方ではなく、食事の方に盛られていたのだ！

PLの××さんが余計な事を言うから それ採用現実になってしまったのでした（え一言霊って怖いね（マ）』

竹地は自らの責任を回避した上にPLにその責任を押し付けたのである。GMに不利な事は採用せずに、PLに不利な事は積極的に採用する竹地の悪癖がここでも見る事ができた。『言霊』ではない。これは「モラル・ハラスメント」である。

『今回は紗綾の出番は本当にありませんでしたが、すいません。』

竹地はここでもPCを自らのNPCのように拘束して扱うようになる。口だけの謝罪であって竹地はPCよりも自分のシナリオが大事であるという事である。これも吟遊詩人GMによくある事である。

『もしお前が困ったことがあったら、京都で一番大きな鳥居の麓に行け
確かにGMとして「この」ように言いましたよ（・▽・）ニヤニヤ』

竹地は『GMとして』と言っているが正確には「NPCを介して」いるのでGM個人の発言ではない。ここでもPLに責任を負わせる竹地のモラル・ハラスメントが行われていたのである。

『怨霊京はすでに守護宗家によって閉じられており、人間は出入りができない。しかし人外の

ものであるヒトタカや靈魂ならば可能。

というトンデモな理屈ですが、まあいいじゃない（えー

四人はそれぞれ似通った歴史上の人物に魂を融合させる。四人の演技はそれぞれ茶川さんをお願いしました。多謝トクス（σ° ▨° ）σ』

『トンデモな理屈ですが、まあいいじゃない』と竹地は言っているが批判も拒否もなく強制されるのはPL側である。さらにここでも竹地はPLにNPCの演技を強制する事で自分の手駒として扱っている。それを拒否する選択肢はPL側に残されていなかった。ここでも竹地は吟遊詩人GMとして自分の思い通りに話だけではなく、PLもコントロールを始めたのである。

『ただし条件があり、助けに向かった人物が泰一たちと悟られて名前を呼ばれてはならない。当然ですね、守護宗家が見張っている世界なのですから。

これはPLの前で説明しましたが、その後のロールプレイが不自然になった観は否めませんね。多分誰かさん辺りは、ソッコーで名前を呼んだ可能性がありますしね。

誰とは言いませんがね（えー』

『これはPLの前で説明しましたが、その後のロールプレイが不自然になった観は否めませんね。』このような説明を竹地がしたという記憶は私にはない。しかし、それぞれのNPCをPL一人が担当した事でおぼろげながら状況を掴む事ができた。その後の問題は竹地がその状況をPLに強いたので発生したのは明白である。『多分誰かさん辺りは、ソッコーで名前を呼んだ可能性がありますしね。誰とは言いませんがね（えー』このように直接名指しせず、追求されたとしても言い逃れができるように巧妙にPLを貶めている。竹地のモラル・ハラスメントはここでも見受けられた。

『ユウと小夜子が転送された先で途方に暮れていると、人影が。狩衣を着た如何にも平安装束のその男は、少々挙動不審でした（・▽・）ニヤニヤ

ここは都の西の端の祇王寺であると、男は説明します。でも明らかに様子がおかしい。

この流れは、事前に「魂の名前を呼ばれてはいけない」という制約を泰一以外のPLが知らなかったら、側呼ばれて、泰一消滅→戦力不足→敵にとっ捕まるフラグだったと思うのですが、いかがでしょうか。

あまりにメタ的ではありますが、もしPLが知らなかったら、間違いなくこうなっていたと思われれます』

前に『多分誰かさん辺りは、ソッコーで名前を呼んだ可能性がありますしね。』と名前を伏せていた竹地がここで牙を剥く。PCユウが魂の名前を呼ぶという結論ありきで竹地は『泰一消滅→戦力不足→敵にとっ捕まるフラグだったと思うのです』と言っている。竹地がPCユウのキャラクターの上辺だけを見ていた証拠である。それも竹地自身の都合の良い方にだけ見ていたので

ある。竹地はどうしても私を下にしなければならなかった。それは私を虐げる事で自分を高く見せる為である。それはモラル・ハラスメントの特徴でもある。

『逢引を邪魔された平清盛は激怒。これまた大天狗に変身し、三人に襲い掛かってきました。三人は大苦戦。PLも仰ってましたが、明らかに戦力の均衡が取れていない。それでも責任を感じてユウたちの味方に駆けつけた泰一でしたが、評価はイマイチのようでした。』

事実火力が足りてないので、蝶華や要衡がいれば問題なかったのでしょうか。他の班には火力があまり、他に足りてないところが出てくる。まあよくある事ですね。

ようやく敵を倒した。本当にギリギリだった。』

『泰一でしたが、評価はイマイチのようでした。』と竹地は言っているが実際は明らかにGM側が優勢であった。前提として竹地がこの状況を作り出しており、PL側にその拒否権がない以上、吟遊詩人GMそのもののマスタリングである。さらに『蝶華や要衡がいれば問題なかったのでしょうか。』と自分のNPCを全面に出しておいてからPL側の不備を指摘する。『他の班には火力があまり、他に足りてないところが出てくる。まあよくある事ですね。』と一般化して竹地自身には責任のない言い方をしている。これはモラル・ハラスメントでよく行われる手法である。

『やはり、バランスがねー。でもこればかりはどうしようもありません。あくまでPC&PLの意志が大事なのですから…。』

『でもこればかりはどうしようもありません。』と竹地は言うが、その改善の為に竹地が努力をしたかというとその形跡はまったくない。そして『あくまでPC&PLの意志が大事なのですから…。』と竹地が設定した状況であるにも係らず、PLに責任を転嫁する。加害者ではなく、被害者に責任があるような発言をするのも、モラル・ハラスメントの好例である。

『京都編は予想以上に話が膨らんで、かつ自分としても題材にしたい箇所が多くてですね…当初の構想より大きく膨らんでしまいました（え

いわば今回が京都編の序に当たります。序破急なので三部作。とりあえずネタは決まっています。』

竹地はまとめるという発想にはならなかった。さらに、『とりあえずネタは決まっています』とすでに既定しており、それらすべてをPLに強いる事でしかキャンペーンを維持できなくなっていた。

31 回目

31 話に入る。

『蝶華は本当は泰一に着いてきて欲しかったのに、そんな事知らぬ存ぜぬのフラグクラッシャー泰一は、単身桜町院家へと戻ります。』

ここでも竹地はPCを『フラグクラッシャー』と貶めている。竹地の意に沿わないものへの報復である。

『再会を喜び合うPCたち。六者六様。分断されていたパーティーの再編。征軌、良麻、ユウ、凜が合流を果たす。実はすでに泰一もいるのですが、誰も気にしない。』

『気にしない』のではなく、会話をする時間的余裕がなかったのである。その後の展開からも分かる。

『渦巻く黒々とした邪念怨念。それがひとつになり、PCたちに襲い掛かる。泰一の安倍晴明に対するは、陰陽師蘆屋道満。要衡の坂上田村麻呂に対するは、蝦夷の英雄アテルイ。恒月の雑賀孫市に対するは、第六天魔王織田信長。蝶華の沖田総司に対するは、維新志士坂本龍馬。』

ここで注目すべき事がある。PCは一人であり他はすべてNPCという事である。つまりTRPGで主人公であるはずのPCが端に追いやられ、NPCが主役になっていたのである。これも吟遊詩人GMにはよくある事である。同様にNPCが主役という場面がある。

『決戦を前に気持ちが昂ぶっていたのか、蝶華は婉曲した自らの思いを伝える。しかし、それは泰一には届かないであろうと判っていたからこそ、自らもきちんとした形で本心を伝えることはなかった。』

泰一くんはいろんな意味で罪作りの男ですね（・▽・）ニヤニヤ

すでに何人も嫁候補がおりますがね（・▽・）ニヤニヤ

戦いが全部終わったら、必ず私たちの元に帰ってきてほしい――。

一体何人に同じ台詞を吐かせれば、よいのでしょうかね、泰一くん（・▽・）ニヤニヤ

そんな抱擁シーンを屋上の給水塔の上でやはり（・▽・）ニヤニヤしながら見ていた卿嵩。』

竹地はGMという立場からこのようにNPCの物語を押し付ける事に腐心していたのである。それをおかしいと思ったPCユウにはNPCソラの説教という報復があった。このように竹地

の「NPC>PC」というPLにとってストレスが溜まる状況は蓄積されていったのである。

『佐伯深幸の魂魄と紗綾の魂魄が融合し、仮初めの肉体を得て、PCたちの前に顕現する。』

これはこの怨霊京という世界が、肉体を持たない魑魅魍魎や幽霊怨霊の類が跋扈するゆえに起きた作用ともいうべきものなのですが…。

実際のところは、即興で全PCを同時に戦闘するように差し向けたわけです……。

個人的にはRP>戦闘、に重きを置いていたつもりなのですが、PLの意思は案外そうでもなく、溜まり溜まったフラストレーションを戦闘で晴らしているところも見受けられたような気がしないようなしたような。

それが意外といえば意外でした。ロールプレイする時間はほかのキャラより多かっただけに。

何を以ってTRPGを楽しむかは個々人違うのですが、問題はロールプレイができるかじゃなくて、自分だけ戦闘ができない状態なのが問題だったと思われる。

逆にみんながロールプレイしてるのに、自分だけ戦闘の連続を潜り抜けているというのも、フラストレーションが溜まることになるだろう…。

戦闘さえやったりゃいいんだよって、人、いませんよね。念のため。』

『仮初めの肉体を得て、PCたちの前に顕現する。』これはPCの乗っ取り行為でありGMとして悪質である。PLからPCを取り上げてGMの思い通りに動かす。吟遊詩人GMによく見られる行為である。『個人的にはRP>戦闘、に重きを置いていたつもりなのですが、』と竹地は言っているが、竹地が自分のシナリオを語っている事の方が多かった。NPCがすべてにおいて優先されていた結果である。『溜まり溜まったフラストレーションを戦闘で晴らしているところも見受けられたような気がしないようなしたような。』という竹地は自分がいかにPCをPLから取り上げてやりたい放題してきたかという事を顧みなかった結果である。『それが意外といえば意外でした。ロールプレイする時間はほかのキャラより多かっただけに。』と言っているが、竹地自身がロールプレイ（という名のPCになりきる演技の強要）つまり、キャラ演技を強制していたにも係らず、『意外』と吐露するのは竹地がいかに「PLは自分の敷いたレールのシナリオの上で満足している」という思い上がった勘違いをしていたかという証明である。

『問題はロールプレイができるかじゃなくて、自分だけ戦闘ができない状態なのが問題だったと思われる。』竹地自身が問題に思っていたとしても、竹地自身のシナリオが優先される。さらに、『逆にみんながロールプレイしてるのに、自分だけ戦闘の連続を潜り抜けているというのも、フラストレーションが溜まることになるだろう…。』と竹地は言いながら、そのシナリオを修正することなく、セッションは進んだ。これは竹地が「竹地自身の楽しみ>PLの苦しみ」という図式であり、吟遊詩人GMによく当てはまる事例である。

『戦闘さえやったりゃいいんだよって、人、いませんよね。念のため。』ここで私が抗議の声を挙げていたらと悔やまれる。竹地のこの発言は洞窟を探索するというシステムであるD&Dやウィザードリィの否定であり、竹地がこれらのシステムに接してこなかった弊害が最悪の形で発露したという事である。このように返しておくべきだった。

「GMのシナリオに乗って演技さえやってりゃいいんだよって、人、いませんよね。念のため。」

このように疑問提起していたら、その後の悲劇は回避されたかもしれなかった。

『しかし、六人のPC仲間が再会し、怨霊たちに立ち向かい、撃滅する。まだこの時は佐伯深幸の姿をした少女の中の人、紗綾と気づいた人はいない模様ですが』

ここでも竹地はノーヒントで気づく事を期待し、それに気がついていないと嘆いているが、その行為こそがモラル・ハラスメントであるとは最後まで気がつく事がなかったのである。

『修学旅行三回目——実時間にして半年経ってようやく仲間が合流することになりました。ここら辺りは紗綾と泰一というキャラクターとその背景、さらにはその専用の舞台での物語という事情も相まって、このような長さになりました。』

PCユウの時とは大きな違いである。竹地は口では「参加PL皆平等」と言いつつもこのようなPC間で格差をつけていた。竹地本人は最後まで平等に接していると思っていた。その点は後で指摘する。

『あとは実質、メンバーが分断された状態のシナリオというのをやってみたかったという目論見がありました。その分フラストレーションが溜まってしまったのはお詫びのしようもありません。

RPに重点を置いたPC、戦闘に重点を置いたPC、スポットの当て方は違えど、各々に均等に意味合いを持たせたつもりではありましたが、けして巧くいかなかったセッションであったと思います。

何より全員揃っての戦闘をこなした時の、各人の生き生きとした様子は、それまでの鬱憤を晴らすかのようなものでした。これも、ひとつの教訓、糧として次に生かしたいと思います。』

竹地は『その分フラストレーションが溜まってしまったのはお詫びのしようもありません。』と言っているがだからと言って途中から修正するといった行動を取る事もなかったのである。GMがやりたいことを優先した結果、そのとぼっちはPL側が支払うという吟遊詩人GMによくあるパターンになっていた。『これも、ひとつの教訓、糧として次に生かしたいと思います。』と竹地は続けているが、その教訓が生かされず吟遊詩人GMのマスタリングを続ける事になった。

『次回で二人がメインを張るシナリオは終了します。ただ誤解しないでほしいのは、根幹に

はTRPGは全PCが主役であり、持ち回りで各々にスポットが当たる話があるということを私は考えています。ただそれがあまりに長い時間をかけているため、記憶も薄れてぼやけてしまっているのではないかと（GM・PL共に）思います。

思い返せば第三部は前半はユウ、中盤は凜を中心にしています。もうそれは2007年から2008年にかけてのことです。

2008年下期から後半として、紗綾、泰一、2009年以降終盤に征軌、良麻を据えています。

なのでオルタナティブ編全19話として考えれば大体みんなにスポットライトは当たっているのです。』

竹地は『持ち回りで各々にスポットが当たる話があるということを私は考えています。』実際にPCユウにスポットが当たったのはすでに検証されたように多くても2回であり竹地の言う『スポット』は当たったのは一瞬でしかなかったということである。分かり易く言うと「確かに、全体にスポットライトは当たった。しかしその時間は同じではなかった」という事である。

『オルタティブ編の最終回近くで、PCたちは大きな二者択一を迫られることになります。それは仲間たちと袂を分かつかもしれないくらい、LawかChaosどちらに傾くか、あるいはあくまで中立を貫き続けるのか、積極的に選ぶのか流されるままに進むのか、それを選んでもらおうと考えています。』

実際は選択させずに竹地の意思が反映されるだけではないのか？私がそう思ってもその疑問を口に出せばNPCがセッションでPCに報復する。そのような状況下で冷静な判断ができないだろう。私はそう感じていた。

32回目

32話に入る。

『どこか別のキャンペーンのキャラ的に言うなれば、落とし前をつけなければならない
実は某ツンデレ抜刀術遣いのように、修学旅行を、べ、べつに楽しみになんかしてないんだからねっ!!とのたまいつつも、内心wktkしていた氷室征軌のように（えー 楽しみにしていた筈の修学旅行計画は見るも無残に砕け散り、いつも通りの騒動への巻き込まれ体質を発揮する面々なのでした。』

竹地はこのようにPCを貶めるが、竹地自らがその状況を作り出した責任を取らなかった。「セッションを進めない」と竹地から恫喝されて制作した修学旅行プランは竹地のシナリオの前に踏みじられ、PCを引き抜かれて大幅な戦力ダウンにも係らず戦闘すれば大苦戦。その責任は「仕方ない」で終わる。竹地は不誠実な吟遊詩人GMになっていた。

『PCたちは南側を選択した。木火土金水、五行のどれが東西南北に当たるかと検討されていた人がいるようですが、それは考慮に入れる必要がないものでした。』

当然、ここも竹地からのヒントはない。竹地が『それは考慮に入れる必要がないものでした。』と言ってもPL側は罠の可能性も考えて行動する以上、すべての可能性を潰していくのが方法なのだが、竹地はそれすらも否定していた。

『剣が放たれた方角、見上げると宙に浮かんでいたのは、月影零。今回抜鬼を唆した一味の一人です。

墮ちている武器を回収すると呪われるので注意（・∀・）ニヤニヤ』

今回も竹地はこのような注意をセッション中にしない。ノーヒントである。さらに、NPCを上位においてPCを下位にするやり方である。

『千二百年の歴史ある場所が今、露と消える。

原因は不明（決めてないですが

工工エエエ(´д`)エエエ工工

(°ε°)キニヤイ!!

そんなところまで聞いてくるPLはいなかったですしね（・∀・）ニヤニヤ』

ここでも竹地は『そんなところまで聞いてくるPLはいなかったですしね（・∀・）ニヤニヤ』とP

L側の不手際を貶めている。しかし、実際に質問したところで「そういうものですから」としか返答されない以上、問いかけを放棄するPL側であった。これは抵抗の意思を奪うというモラル・ハラスメントではよく見られる事である。

『他に良麻と凜、紗綾と泰一、凜とユウといろいろと絡みがありましたが、メモが足りないので割愛。

しかし、一緒に背中合わせで死線を潜り抜けてきてもなお、お互い腹に一物あるんだなw』

『メモが足りないので割愛。』竹地のこの言葉は「NPC以外はいつでもよい」というメッセージであり、竹地の中で優先されるものが竹地のNPCという事であった。本来、TRPGの主人公はPCでありNPCではない事はすでに申し上げている通りである。

『今回もいろいろと大変な話でした。特に京都守護宗家はほとんど放置状態になりましたが、PL&PCにその後の後始末まで期待するのは何か違う気がするので、これはこれでよいのでは。』

その結果は当然GMが収拾をつけるべき事案でありPLにその負担を強いるのはいかにも吟遊詩人GMの特徴である。ここでは竹地の都合の良いように後始末をしたいという思惑からこのような発言なった。

33回目

33話に入る。

『ユウは今回はソラにお土産を買ってきて、という流れくらいしかメモに残っておりません。セッション後の飲み会であった通りユウは、今後のキーパーソンの一人である小夜子と同じ班であったから、相談相手になりえたかもしれませんが、普段の彼女との関係の希薄さを考えるとそれも難しいような気がします。』

『という流れくらいしかメモに残っておりません。』と竹地が言っているように「NPC>PC」という構図はここでも生きており、『普段の彼女との関係の希薄さを考えるとそれも難しいような気がします。』とNPCとの関係を深めるのも拒否されてしまっただけでは手段がない。ここでも竹地はNPCが優位であってPCは下位であるかのように扱っていた。

『ユウの今回の修学旅行変についての泰一への問い詰め。何で一人で行ってしまったの！という問い詰め。』

端的に言えば、シナリオ上の都合（えー
だってその方が話として面白いし（えー』

PCが戦闘で苦戦をして負担を強いても、竹地にとって、それは『シナリオ上の都合』であり、『だってその方が話として面白いし』と竹地自身の都合を優先させていたのである。これも吟遊詩人GMの典型例である。竹地はこのように、PCに負担を強いる事が当然となっていく。

『射落征道も、菅原壮一や黄天陸と同様に堕ちる可能性があるわけで。しかも、伏線はばら撒きまくっているの、PLは気づいていてくれると信じたいですな（・▽・）ニヤニヤ』

竹地は『伏線はばら撒きまくっている』と言っているが吟遊詩人GMにありがちな自己満足的でPLが気づいていない事に気がついていなかった。

『確かに今の小夜子は戦力になるとは言い難い。それはPCの誰もが思っているけどPCの台詞として表に出さなかったことではあります（えー』

これは竹地の一方的な思いを言っているだけである。実際、PCユウにはこのNPCがいなければたった一人で敵と戦わなければならなかった。2回前のセッションを竹地はすでに忘れていた。

『さて今回は終了後の飲み会でいくらか話しておりましたが、個々人のイベントによって濃淡軽重があり、けて巧くいったセッションではありませんでした。プレイヤーが六人となると、各

人全員に満足度をもたらすものを作るのはなかなか大変です。』

竹地はこのように言っているが、自分の思い通りに動くPLとそうではないPLで明らかに格差が生まれていた。PCユウに触れた個所は上記の2つだけであり、他のPCに比べると圧倒的に少ない。さらにNPCの描写の方が多い為、PCユウがほぼ背景のような扱いになっていた。

34回目

34話に入る。

『余りにも暇な薫は、ユウに退屈だから舌でも噛み切って死になさい、と無茶苦茶な事をのたまっています。』

竹地はここでもNPCを介してPCユウにモラル・ハラスメントを行っている。

『アッシー君ことみんなの足こと征軌が今回は不在（えー

実際の話、征軌がいないと遠隔地移動ができないってどうなのでしょう…。

他転送ができそうな悪魔を持ってそんなコンプ使いである良麻も話の都合で不在（えーもうひとりCOMP使いがこの場にいるのですが（ry』

竹地は『アッシー君ことみんなの足こと』と言ってPCを貶めてからさらに『良麻も話の都合で不在』と吟遊詩人GMの典型的な方法でPCから自由を取り上げて上で『もうひとりCOMP使いがこの場にいるのですが』とPCユウを貶めている。

『ここでテコ入れ要員の超能力使いのソラが急遽合流し、仲間たちを飛ばしてくれることに。

急に神の声が下りてくるのはよくあることですね（えー』

ここでも竹地はNPCを上位に見せる場面を設定する。竹地にとって都合のよいようにしないと気が済まなかったという事である。

『日本史とか吐いて捨ててしまえとでも言いがちなユウであっても、銃の歴史だけは学者並の知識を持っていますからね（えー』

『日本史とか吐いて捨ててしまえ』とPCユウが言った事がなくても竹地のイメージが優先され、捏造される。竹地のマスタリングは末期状態であった。

35回目

35話に入る。

『良麻というPCの設定が出され、笹木宗次郎という宿命の敵が生まれたその瞬間にPCの川上良麻＝名を騙るもの 笹木宗次郎＝名を奪われたものという構図の出来上がり。』

竹地はPCの設定を自分の都合のよいように改変した。竹地の考えた構図を一方的に押し付けていたのである。

『雷神トールと、八足の駿馬スレイプニルが召喚され、宗次郎は神槍グングニルを操る魔神オーディンの力を下ろし、PCたちに挑みかかる。

バトルの詳細は割愛（えー）』

竹地は割愛しているが、以下のような会話があった。私がいつものように敵に対して攻撃をしようとする、

紗綾PL『（私の）戦術を無視して自己満足な攻撃をしないで下さい』

私『（いつも通り攻撃してるのに？）いや、どのタイミングで撃っても変わらんよ。あんまり』

紗綾PL『まあしよせん、ゲームですからね（吐き捨てる様に）』

私がこのキャンペーンを辞めようと思った瞬間である。この後の紗綾PLは『ゲームですから』と繰り返し、私が紗綾PLに従わなかったのをずっと根に持っていた。竹地はこの状況を見ていた。しかし何もしなかった。GMとして注意も制止もできるのに竹地は何もしなかったのである。

『巨大な大樹に、なす術も無く呆気にとられるPCたちを前に、刈り取られる寸前の意識を揺り動かし、傷口から血を流しながら歯を食いしばり、宗次郎が覚醒する。

俺をあの宝蔵石のところまで連れて行ってくれ。』

ここでも竹地の「NPC>PC」という構図を見る事ができる。セッションの主役であるはずのPCは『なす術も無く呆気にとられ』てしまい、PCより目立つ事を禁じられているはずのNPCが物語の主役になる。これも吟遊詩人GMにはよくある出来事である。

『今回は良麻が不在であったものの、泰一がCOMP使いとしてその責務を果たしてくれまし

たね。

もうひとり、もっと前からCOMPを持っている人がいた気がするけれど、（°ε°）キチイ!!』

『紗綾と一緒にいることに気を遣った良麻は、征軌や泰一の家を順番で寝泊りすることに。するとまたBLのネタになりそう…くぁwせdrftgyふじこlp』

ここでも竹地は『もっと前からCOMPを持っている人がいた気がするけれど』とPCユウをを貶めている。同時に『BLのネタ』にして他のPCも貶めていた。もし仮に悪意がなければ無意識化のモラル・ハラスメントであり、意図的であったとした時よりも悪質である。

『黙示録はもはや話が大河ドラマ並みに重厚になってきて、敵も味方も数がとても増えましたからね。これ以上動くNPCがいても邪魔でしょう。』

竹地は自分が吟遊詩人GMであると気がつく事もなく、NPCを増やし続けていた。これも吟遊詩人GMにはよく見られる特徴である。

36話の前に

36話に入る前に竹地が隠蔽している事実を明らかにする。これは当時の私の日記を元に再現する。その為、以下口調が変わる事をお断りしておく。

9時に集合だったのに、GMである竹地が乗り継ぎ失敗で遅刻。さらにもう一人のPLも遅刻。体調不良との事だった。まあ、仕方がないと思いセッションの準備をする。定刻通りにセッションが始まる事など皆無だったので慣れてしまっていたのかもしれない。10時にセッションが開始して、11時まで自分以外のPCのオープニングに費やされる。その間、私はする事がなかった。1時間後、ようやく私のPCのオープニングになった。そこでGMである竹地に言われた。

「……というミッションなので現地に飛べ」

え？

それだけ？

一時間待ったオープニングがそれで終わった。

ああ、そうか。自分で何とかしろって事か。そりゃ、今回のエピソードに関係の薄いPCだからね。GM的に手も抜きたくなるだろうさ。

この時点でセッションに対するモチベーションがかなり崩れてしまったが、諦める事なくセッションを進めた。セッションも中盤になってカギになっている少女を追おうとするとNPCに言われた。

「少女を追えば少女は助かるが事件は解決しない」

「事件を追えば少女は助からないが事件は解決する」

私は疑問に思ったのでそのままPCとして発言した。

「(PCが)4人いるんだから二人ずつで調べればいいんじゃないですか？」

GMの竹地から意外な言葉が返ってきた。

NPC「お前は『各個撃破』という言葉を知らんのか」

情報収集をしたら各個撃破するということか。なんと自由度の少ないGMかと感じた。

GMの言われた通りに情報収集を行い、さて、いよいよラスボスだ、という所で私は気がついた。現在の時刻、16時55分。会場の使用期限は17時。

竹地：「では、戦闘は次回後編で！」

今日は何をしに私は来たのだろうか。GMに許可された事だけをしてセッションを終えた。それだけのために1日を使ったのか。徒労というのはこういうものかをつくづく思い知らされた。その後、居酒屋に入って今日の感想を言おうとした。紗綾PLから声がした。

「昨日ですね、竹地さんと中村さん以外の今日の参加者でセッションしたんですよ。10時に始まって、終わったのが夜の10時。楽しかったー！」

これほど分かりやすい「あなたを仲間外れにしました」宣言はない。

セッション打ち上げは他のセッションの自慢場所ではないのに……。一気に嫌な気分になり、ビールを空けるとその足で帰った。

数日後、竹地から次回キャンペーンの出欠確認が届いた。良い機会なのでキャンペーンの離脱を宣言した。すぐに『きちんと説明を願えませんでしょうか?』と竹地から返信が来た。

以前に「自己満足な攻撃をするな」と言われた事。もうひとつは情報収集も何もかも決められて自由度がなかった事です。

そう返信するとさらにメールが来た。

『自由度がなかったという事が分かりません。じかに会ってご説明願います。それと、あと2回で第3部が終わるのでそこまではお付き合い願いたいです』

このメールに怒りを覚えた。それまで押さえていたものを出すように返信した。

『吟遊詩人GM、で検索して下さい。直接話すのは構いませんが、あと2回セッションに参加するのは無理です』

再度メールを送って今度は竹地と直接話す事になった。私は新宿のバーで竹地と会うことになった。紗綾PLの発言と前回のセッションで感じた事を伝えて、改めてキャンペーン離脱を宣言した。

竹地：「中村さんのいないキャンペーンは考えられないですよ……」

私は言い返した。

「だからと言ってこのままキャンペーンは続けられない」

竹地：「それなら、キャンペーンは終わらせますよ」

なるほど、GMの責任転嫁であり、辞めさせないようにする常套手段か。私のせいにしてGMには責任がないと、こういうことか。

「それならGMが何とかするべきじゃないか?」

当然の疑問を私は口にする。

竹地：「そうですね。お気持ちは分かりました。ただ、それを言っても今、中村さんが我慢しているのが他の人に移るだけではないですか?」

この時点で竹地は問題解決をするつもりがなかった。そうならないようにするのがGMの務めではないのか?そうは思っても口にはせずに別の言葉を言った。

「いや、テーブルトークは我慢してやるもんじゃないだろう。それに我慢なら皆で薄めるとか方法あるはずだ」

竹地からは「何とかする」「今はゆっくり休んで下さい」との言葉をもらい、その日は終わった。その後、2ヶ月以上、この問題に対して竹地が動いたという形跡はなかった。

遅すぎる。

私は確認のメールを送った。

竹地：『私に任せて下さい。時間がかかる事をご承知ですよね。よろしくお願ひします』

今までは何もしていなかったということか…私はまたメールを送った。

「時間がかかる事と無為に時間を過ごすのは違うかと。何もしないということでしたら私が直接動きます」

かなりキツめに書いたつもりだったが、竹地からの返事は『私は最初から時間がかかる問題だと認識してました。キャンペーンを1年2年中断するつもりでいました』

終わった。

これで分かった。竹地は時間が解決するものとして自らは積極的にこの問題に関与しないことが明白になった。今まで竹地にあった信頼はここで崩れた。竹地には問題解決の意思が見られない。ならば、私が自ら動くしかない。サークルからの離脱を決めてサークル会員の前でこの事を話した。竹地はこう言った。

『声を大にして他人に意見を言うのは難しい。今まであったことを蒸し返してもしょうがないと思う。セッションのことはセッション内で解決するのが筋だ。』

セッション内で解決ができていないから私はサークル全員に話をしている。竹地の本音が見えた。竹地は私が相談した事を『蒸し返してもしょうがない』と思っていた。GM以前に、人間としての礼節が欠落していたのである。1か月後に結論を先延ばしにすることでその日の会合は終わった。数日後に竹地から長文メールが届いた。

『まず、話し合いの日、中村さんが話していたことが、事実と違う点を指摘します。』

冒頭に謝罪ではなく、自分の主張から始めたか。この時点で心証は悪くなった。

『私と話し合いをしたのが×月×日、相談を持ちかけられ、何も対処してないと思われたなら、まだ4ヶ月経っていません。』

数ヶ月以上経過したと言ったが日数にこだわっていたとは驚いた。そして4ヶ月経ても竹地は問題解決の為に動こうとはしなかった。

『私も、家のこと、実家のことがあり、また彼女の実家との会食や引っ越しなど、私としても毎日忙しい日々がありました。』

竹地にとって、私の相談は『実家のこと』『彼女の実家との会食や引っ越し』以下の事であった。「アンタになんか構っているヒマはなかった」という訳だ。さらに心証が悪くなる。

『本題ですが、まずお詫びしたいのは認識の差異があったこと。中村さんは早く片付けられる問題と考えていた、私はじっくり中村さんの精神復調を待ってから話し合いを進めるべきと考えていたことです。』

私は竹地に確認した。「解決する意思があるのか」と。そこで1年以上キャンペーンを中断すると言われた意味は「1年以上何もしない」という意味に解釈したのはどうやら正解だったらしい。

『全体の話し合いで、「セッション内で発生した問題は、そのセッション内で解決すべき」と私が申し上げたのは覚えているかと思います。個別の話し合いのとき、私は中村さんに休んで下さいと言いました。その時、中村さんは、松田さんと同じ話し合いの卓には着けないと言ったからです。』

『セッション内で発生した問題は、そのセッション内で解決すべき』これは竹地が問題解決を放棄した最も分かりやすい証明である。さらに言えばGMに問題解決の意思がなければ無意味であるし、セッションを楽しいものにしたと思ってその場では我慢をする人もいるだろう。実際に私は我慢した。セッションが楽しいものであるようにと私が我慢した結果、その我慢は無意味という言われようだった。仮に紗綾PLと同じ卓に着けないと言ったなら、全体での話し合いは何故できたのだろうか？GMはそのための努力や労力を惜しむのはおかしくないのだろうか？私は怒りがこみ上げてくるのを感じていた。

『私のポリシーは全体の話し合いで申したように問題が発生したら当人同士がその場で解決するということです。しかし中村さんは紗綾PLさんと話し合いができない、できないであるならば、中村さんが話し合いができる——紗綾PLさんと同じ卓に着けるようになるまで、話し合いを持ってもらうまで落ち着いてもらう必要を感じました。』

「何とかしてほしい。同じ卓にはもう着けない」と私が言った事に対して竹地は『紗綾PLさんと同じ卓に着けるようになるまで、話し合いを持ってもらう』と言った。これは『GMとしてなにもしない』宣言であった。

『問題が発生したら当人同士がその場で解決するという事です。』と竹地は言うが、セッションを中断して不快な思いを卓全体に広めてまでそうしなければならないのか？一方の主張が高圧的で理不尽でもう一方が委縮して正論が言えなくても『当人同士がその場で解決する』という名目の元に竹地は介入しないということか。竹地に問題意識を持たせるならば、私はその場で荷物をまとめて帰ったほうが良かったということだった。

『私は私の言葉を介して紗綾PLさんに伝えても、中村さんの本心が完全に伝わらないと思います。であるならば、出来るのは中村さん紗綾PLさんが同じ卓で当人同士で話し合い出来るようにお膳立てする事しか出来ません。それしかしてはいけない、と思っています。』

事実、竹地は『お膳立て』という話し合いの機会をセッティングする事はなかった。「何とかし

てほしい」と言った私の希望は竹地によって打ち砕かれたのである。『本心が完全に伝わらない』と弁解してすべき事から竹地は全力で逃げていた。

『繰り返しますが、中村さんは2月時点で松田さんと話し合いができないと言いました。だから中村さんが自らの意志で松田さんと話し合いができるようになるまで待っていたのです。』

いや、それはおかしい。「何とかしてほしい」と竹地に対応を要請した。竹地は対処すると約束した。待っているなら、待っているとの説明があるはずだ。それもなかった。卓P Lの関係回復より自己のポリシーとやらを優先させた結果ではないのか？

ポリシーね……。私はほろ苦い気持ちにさせられた。その自分のポリシーとやらを優先させた結果、卓のトラブルよりも自己保身を優先させたのではないか。

『二人での話し合いの時、中村さんは林さんをサークル解散する気持ちの要因であると言いました。キャンペーンはその後に出てきた問題であり、中村さんは一言もキャンペーンがサークル解散の原因とはあの時点では話してませんでした。私はそのように記憶しています。原因にキャンペーンが追加されたのは私には寝耳に水です。キャンペーンは後付けであり、それが主原因であるという認識が私にはありません。主原因に感じたなら全体の話し合い以前に私に説明すべきだったのではないですか？』

林さん問題とは『私は精神病だ』と言って周囲に負担を強いるP Lの事だが今回は割愛する。理由に竹地自身のキャンペーンで問題が起きているにも係らず、竹地はサークル解散の原因にはならないと思っていた。『私に説明すべきだったのではないですか？』と竹地は言っているが、その説明する以前に信頼が失われており、説明をしてGMが対処をするという信用も失われていた。

『二人での話し合いのとき、まず宮田さんがサークルを解散させない為に奔走していると説明してくれましたね。繰り返しますが、まだこの段階ではキャンペーンは原因であると中村さんは私に話してくれませんでした。ですから私の認識から中村さんを苦しめている要因のひとつにキャンペーンがあるとは思っていなかったわけです。』

竹地の言葉に私は驚くしかなかった。竹地主催のキャンペーンで私が苦痛を負っていたにも係らず、竹地は『私の認識から中村さんを苦しめている要因のひとつにキャンペーンがあるとは思っていなかった』と言ってのけたのである。竹地への相談は完全に無意味だったのである。

『ですのでまずは、ひとつひとつ時間軸的に過去の問題から解決していくのが得策と考えました。林さん問題はサークル解散に直結しており、キャンペーンに参加していない人にも影響がある話です。まず大きい問題を解散した後、関わった人が限定されるキャンペーン問題に手をつけたかったのです。』

『問題を解散した後』は、前後の文脈から『問題を解決した後』と解釈した。竹地の思考の前提が間違っているのに、その後の対応も間違いになるのは当然である。元々竹地は問題解決をするつもりがなかったが、それを公表すれば自らの不誠実が周囲に知れてしまう。従って、竹地は『過去の問題から解決していく』という理由づけをして私の相談を放置した事を正当化したのである。竹地は処理をしたくなかった、問題に向き合う事を回避した。

『宮田さんが出した全員召集メールには毎回応じました。まず林さん問題を解決し、（この時は）林さん問題解決こそがサークル解散を回避できる方法だと思っていました。サークル解散が回避された後、参加者も限定されているキャンペーンの問題に取りかかるべきと思っていました。』

逆説的に言えばサークル解散が行われた場合、問題解決を行わなくてよい、ということか。竹地は問題を解決する意思はなかったのである。

『繰り返しますが、私のポリシーは問題は当事者同士で解決するということ。であるならばキャンペーンに関与してない人は巻き込むべきではないと考えていたのです。ゆえにまず宮田主導の林さん問題の解決——サークル解散という全員に関わる問題解決が先であると判断しました。』

いじめは当事者同士では解決しない。そこに第3者が介入して初めて解決する。竹地は妻が窮地に立たされても『私のポリシーは問題は当事者同士で解決する』と言って自分のポリシーを優先するのか。また、自分の子供がいじめに遭っていても『私のポリシーは問題は当事者同士で解決する』と言って何もしない可能性が非常に高いという事だ。『キャンペーンに関与してない人は巻き込むべきではない』と竹地が考えていたとしても、考えてただけで行動は何もなかった。GMが問題解決をしなかったのでサークル運営者に対応を求めた結果だ。ただ、このサークル運営者が私だったということだ。

『ただ、宮田さんも忙しい人間ですし、過去二回宮田召集の話し合いは成立しませんでした。全体問題が解決しないまま時間が過ぎ、いつの間にかキャンペーンが主原因であると糾弾され、私としても戸惑っている次第です。』

『いつの間にか』ではない。対応しないのか、と確認した結果、対応しないと感じたからだ。説明しても無意味と感じたからだ。

『気付いた時にはいつも遅すぎるのさ。ただ、その罪は罰せられるべきだ。違うか？』

『パトレイバー2』にそんな言葉があったのを思い出した。

『惜しむらくはこの問題解決ステップの構想を×月の段階では完全に把握、固めきれなかったことと宮田召集の話し合いがスムーズに行かなかったこと。宮田召集が上手く進み、早い段階で林さん問題が解決出来たなら、違う流れになっていたと思います。ただこの問題解決ステップをきちんと早い段階で中村さんに説明できなかつたのは私の不手際です。大変申し訳なかつたです。』

仮にすぐに全体招集が成功してもそこに一方の当事者の林はいない。そして『1年以上キャンペーンを中断する』と言われたのは実質的な問題放置な以上、早い段階で全体での話し合いがあつても結果は同じ事だ。ここでも竹地は自身の責任を回避して、他人に責任を転嫁していた。そして、竹地が『大変申し訳なかつた』と言つたのは『中村さんに説明できなかつたのは私の不手際』のみである。

『ただ、今中村さんは自分の意志で松田さんの話し合いの場に着けますか？
私はそれを心配しているのです。キャンペーンの話し合いであるならば、きちんと一人のPLとして話し合いの卓に着いて下さい。
そこにサークルの代表、代表・中村を持ち出さないで下さい。
キャンペーンに関係ない人たちを、巻き込まないで下さい。
サークルを解散させる、会場を借りる権利をチラつかせて話のダシにするのは止めて下さい。それは脅迫行為です。』

『自分の意志で紗綾PLさんの話し合いの場に着けますか？』竹地は自らは何もしない事を棚に上げてこのように発言していた。そして竹地は『きちんと』を多用するが、竹地自身が『きちんと』問題に対処した形跡はまったくなかつた。サークル運営者の私とその運営を放棄するだけの事態になったのはGMの竹地が問題解決への努力を放棄したと私が感じだからだ。サークル会員全員に向かつて、『以上の理由で運営への意欲がなくなつた』と言つたのを聞いていなかったのか。『脅迫行為』と竹地は言つた。問題のとらえ方の相違がここまでの言い草になるのだろうか。『奴隷のようにお前は運営だけしていればいいのだ』こう言われたに等しかつた。

『それとその行為は最早無意味です。みんなは、もう××区の会場が使えなくてもいいと考えているのです。サークルの会場が使えなくなつても構わない。サークルが今の形で存続しようとしまいと関係ないのです。ただあなたが心配だからこそ、あれだけの人数が話し合いに応じたのです。それを分かつて下さい。』

この上から目線の『心配だから話し合いに応じた』という態度になつたのはつまり、『心配してやってるんだ』という上から目線である。そして、『サークルが今の形で存続しようとしまいと関係ない』とのことだつたので全体での話し合いに参加したメンバーに確認を取つた。ほとんどが否定した。竹地は私に嘘までついて何をしたいのだろうか。嘘までついて何かを守りたいのか。自分自身か、それとも名誉か。自己の正当性か。

『話が逸れました。一人のPLの立場、プレイスタイルを貫く一人の人間として、紗綾PLさんと、キャンペーンの仲間と話し合いをして下さい。』

問題の発端である「あそこまで言われて紗綾PLと話し合いができない」と私は竹地に言ったが、その答えは『話し合いをして下さい』だった。竹地はGMとして問題解決をしなかったのである。GMは関与しないという事である。GMである竹地の信頼はゼロではなく、マイマスまで下がった。これが目的だったら成功だなと思った。

『サークルは中村さん一人で作ったものではないです。

ひとりひとりが作っていったもので、私たちは同志でありみんながみんな何らかの形でサークルを組織作り、維持する事に貢献しているのです。

中村さんの一存で、壊せるものではないのです。

十年前会場探すため、渡部さんと会場探しをしてましたよね？みんなで予定集計を回し、みんながサークルの仲間であり、みんなにサークルの仲間である意識を持たせてくれましたよね？』

『サークルは中村さん一人で作ったものではないです。』という竹地の言葉は、私のサークル創設と功労の否定。竹地は私に宣戦布告をしていた。『中村さんの一存で、壊せるものではないのです』と竹地は言う。ならば、何故、私が辞めると言った時に対応策が出なかったのか。一時的に運営を引き継ぐという方法も取れたのに、そうしなかったのは何故か。それは「誰も責任を負いたくなかった」ということだ。私がお膳立てしたものをただ、食するのみ。それは同志や仲間ではない。仲間とは救援を求めた時に全力で助けるものではないのか。その意識が全員になかったということである。

『中村さんはサークルという子供を作った親の一人です。

しかし子供は仲間たちが増えてこの十年大きく成長していきました。

子供は成長したら巣立ち、親離れし、親は子を慈しみ、成長を見守っていくものではないですか？

親に子供の生き死にを決定する権利はありますか？親が自らの子を手に掛けるのが正しいコトですか？』

直前まで『同志や仲間』が『サークルという子供』に変化していた。ここだけでも論理の破綻が証明できる。竹地は『成長を見守っていくもの』と主張するがそもそもの主張が間違いなのはすでに証明済みだが、あえて付け加えるならば、竹地は『成長を見守って口出しするな』というのが本音だった。その証拠に竹地は私からの提案を無視して、私を貶めないとセッション進行ができなかったのである。『これからの正義の話をしよう』で有名なマイケル・サンデル教授ならこ

う問うだろう。

『大勢の利益の為に少数が犠牲になるのは正しい事なのか。大勢が一人に一方的に負担をかけるのは正しい事なのか』

そして竹地は『親に子供の生き死にを決定する権利はありますか？』と問っている。この問いにはシンプルに答えたい。「それこそが親の責任である」と。竹地は妻の出産時、母子ともに危険な状況下で『親が自らの子を手に掛けるのが正しいコトですか？』と問われたら、妻の命を差し出すという事である。ここでも竹地はモラル・ハラスメントの加害者として典型的な行動を示していた。

『私がGMしかやりたくない、ゴネた時、何とかPLの面白さを伝えようと話してくれましたよね？何度もGMの在り方を説明してくれましたよね？私にTRPGの楽しさ、面白さを教えてくれましたよね？キャンペーンやその前のセッションが続きが楽しみだ。最後まで行く末を見守りたいと兄のように温かく言ってくれましたよね？』

『私がGMしかやりたくない、ゴネた時』ここで、小説やアニメならこの段階で竹地を吟遊詩人GMと看破してその後の損害を回避できた。まだこの段階では竹地を吟遊詩人GMと見抜けなかった事と変化があるものと希望を持っていた。しかし、それは最悪の形で裏切られる事になる。結果的に私が「甘やかした」という事になるのだろうか。時間を割いて説得し、キャンペーンの存続に動いた事が結果的に竹地の自立を奪ってしまった。何という皮肉だろうか。

『中村さんは在学中から私の尊敬する先輩の一人、人生の歩み手です。であるからこそ中村さんの苦悩に気がつかなかった自分が愚かしく思います。ただ私は精神科の医師でも専門家でもなければ、貴男の家族でもありません。ずっと付き添ってあげられる訳じゃない。貴男な事を全て理解してあげられる訳じゃない。中途半端な気持ちで関わって、貴男の為に動いても貴男を傷つけるだけならば、私は貴男の前から去るべきだと思います。』

『ずっと付き添ってあげられる訳じゃない。』そんな対応を私は求めている。「セッションで発生したトラブルにGMとしてに真正面から向き合って解決する」竹地にはキャパシティ以上の要求だったという事である。竹地は問題をすり替え、友人関係を絶つことをチラつかせて恫喝していた。これもモラル・ハラスメントではよく見られる光景である。

『代表の名において、今回迷惑をかけ、收拾できなかった私に無期限に会員としての権利停止を申し付け下さい。サークルの場での活動は一切許可しないと。同時に代表の許可がなければ復帰出来ない旨も申し付け下さい。』

竹地は自分から責任を取ってサークル活動を自粛する事はなかったのである。『申し付け下さい。』という竹地の言葉には『貴方が言うからそれに従うのだ』という態度が見え隠れしていた。ここでも竹地は私に責任を押し付けていた。

『ただ全体の話し合いで、まだセッションがしたいと言ってくれたのは、嬉しかったです。言葉を尽くしたつもりではありますが、もし感じたところがあるならば、どうか紗綾PLさんと一人のPLとして対等な立場で話し合いをして下さい。ふがないキャンペーンGMとして最後のお願いです。よろしくお願いします。』

竹地の『まだセッションがしたいと言ってくれたのは、嬉しかったです』という言葉の前に「問題が解決されるなら」という前提条件を竹地は無視していた。私は竹地に「GMとして対処してほしい」と言った。しかし竹地は『どうか紗綾PLさんと一人のPLとして対等な立場で話し合いをして下さい。』という答えだった。話がまったくかみ合っていなかった。私の携帯にこのような長文メールを送った事で竹地は問題を処理したと思っていた。その後、竹地からの謝罪はなかった。1か月後、私はサークルを一旦解散する事にした。

竹地からこんなメールが来た。

『結論出す前にいくつか確認させてください。

文面にあるその負担を負える、とはどういう意味ですか？

具体的に教えて下さい。自分で考えろは無しで。

それとこの文面では中村さんの正確な意図を汲むのは難しいです。

この文面では、中村さんを受容できないなら、サークルからは出ていけという解釈も出来てしまいます。

これではサークルは完全に中村さんの私物であり、仲間は同志ではなく取り巻きになってしまうと解釈できます。気持ちを伝えるなら相手に察しろと求めるのではなく、誠心誠意言葉を尽くして正しく伝えてください。中村さんの意図を教えてください。何とか今いる全員がそのまま在籍する選択肢はないのですか？』

「我慢の限界」と言った私の言葉は届かなかった。竹地は話し合いをせずに責任だけ私に被せて自分の責任は回避した。『中村さんを受容できないなら、サークルからは出ていけという解釈も出来てしまいます。』と竹地は言うが、なぜ、対立や妨害をする人物ともサークルを続けなければならないのか。『これではサークルは完全に中村さんの私物であり、仲間は同志ではなく取り巻きになってしまうと解釈できます。』と竹地は言う。論理展開が飛躍しすぎている。奴隷でなければ私物化か。それに、取り巻きが周囲にいるなら私はこんな苦勞をしない。

そして極めつけは『気持ちを伝えるなら相手に察しろと求めるのではなく、誠心誠意言葉を尽くして正しく伝えてください。中村さんの意図を教えてください。何とか今いる全員がそのまま在籍

する選択肢はないのですか？』

上から目線と話し合いの無効化。これは竹地の最後通牒（ハル・ノート）だった。

最早、竹地にあった信用は完全になくなった。。最低限の事を伝えてメールを返信した。翌日、竹地からメールが来た。

『これまでと何ら変わりがないのではないですか？中村さん自身、切り出して他の人にやってほしい事務はないのですか？この前片山さんが言ってたようにひとりで抱え込んでしまわず、きちんと相談したらどうですか？負担が重いなら、さっさと分担するなり譲渡するなりすべきです。それができないなら、みんなも中村さんに信頼されてないと思うはずですよ。中村さんも自身の負担を軽くしたいなら、みんなを信じ、仕事を渡す、譲るをして下さい。』

論点をすり替えて竹地は私を非難した。私の主張を封じ自らの正当性ばかり巧みに述べ立てて対話自体を成立させない。竹地は最後まで私にモラル・ハラスメントを行っていた。信用も信頼もとっくの昔になくなっている。第一、やってほしい事務なんてない。ここでも推論から決め付けが出ている。

『代表の仕事は中村さんしか分かりません。その中村さんが仕事の切り出しもせず、それでもまた負担に感じるというようなら、それは中村さん自身の責任です。もう誰も協力しないと思います。こればかりは代表として仕事してきた中村さんがしなければならないコトです。』

モラル・ハラスメント加害者はよく論点を逸らして被害者を非難する。竹地は同じ事を私にしていた。それ以前に私を糾弾できる資格があると竹地が思ってこの文章を書いているのが驚きだった。

『林さんは、中村さんを個性あるTRPGのプレイヤー、マスターとして高評価していると聞いてます。このひと月、きちんと林さんに話し合いなり、釈明させるなりそういう機会は与えてあげたのですか？

私や紗綾PLさんには与えておいて彼女にだけないのは不公平ですよ。代表を自認されるなら、正会員だろうとなかろうと、所属する人の言い分は聞いてあげて下さい。そして、サークルの外のセッションであるならば、林さんとのセッションも考えてあげて下さい。その時はおかしいと思ったら、宮田が伝えたみたいに、その場で彼女に忠告してあげたらいいと思います。放置するよりよほど彼女の為になると思います。』

ここでも竹地は自らの正当性ばかり主張していた。『そういう機会は与えてあげたのですか？』と竹地は主張するが「機会を与えてもそれを放棄された」という事である。裏も取らずに竹地は自己正当化に腐心していた。

釈明の機会を蹴ったのは林自身だし、すでに私が、同卓ができないと思っている人物に時間と労力を費やせというのか。推論で結論を付けてそれを上から目線で要求する。竹地はいつからこん

な事をするようになったのか。『その場で彼女に忠告』は最低で3回以上はしている。しかしながら改善が見られなかったと言った私の言葉は竹地に無視されたのである。

『これからは中村さんもみんなからの信頼を回復するように努めて下さい。理由はどうあれ今回直接関係のない人たちにも、サークル自体がなくなると言って心配かけたんですから。』

竹地の上から目線での対話の態度は終始一貫していた。『自らには責任がない』という態度はモラル・ハラスメントの加害者によく見られる。

『私個人は中村さんから再編成のお誘いを受けて大変光栄に思いました。いろいろと礼を欠くことも書きましたし、してきたと思います。ただその上で声をかけて下さったのは嬉しいのです。ただ、TRPG——自分のキャンペーンはサークルでなくとも出来るなど今回思いました。中村さんとは今後もTRPGをご一緒したい、キャンペーンには参加してもらいたいです。サークルの会場借りて行う必然性を感じなくなりました。キャンペーンに関しては何かから何まで私がGMとして会場手配から、プレイヤーの予定把握までしなければなりません。それでもいいと思っています。むしろ今までがサークルにおんぶに抱っこで楽しすぎてたと思います。私は再編成サークルのメンバーとしては外れますが、キャンペーンのセッションではこれまで通り、さらに精進したうえで中村さんに声をかけて参加していただきたいですし、友人として先輩としてその他の遊びにも誘わせていただきたいです。半年後になります。私の結婚式の二次会にもサークルメンバー共々是が非でもお越し頂きたく思います。妻も中村さんには来てもらいたいです。では、これからもよろしくお願いします。』

当時の私の日記にはこう書かれていた。

『私のTRPG人生の中でこのような不誠実なメールを見た事がない』

竹地に最期の対話の機会を提示したが、竹地はそれを断って自らの責任を放棄した。責任の追及を恐れた竹地は『ただ、TRPG——自分のキャンペーンはサークルでなくとも出来るなど今回思いました。』と言ってサークルから逃げ出した。GMとして以前に人として不誠実だったのである。

『キャンペーンのセッションではこれまで通り、さらに精進したうえで中村さんに声をかけて参加していただきたいですし、友人として先輩としてその他の遊びにも誘わせていただきたいです。』

竹地は『セッションではこれまで通り』と言っている。モラル・ハラスメントをこれからも続け

るという事だった。さらに『さらに精進したうえ』という事は竹地のモラル・ハラスメントはさらに巧妙で悪質となるという事である。問題解決の意思も見せないGMとセッションをして、友人としての今後も関係が続けたい、か。そして、自分の結婚を祝え、という事だった。実際には竹地本人から招待状は来なかった。

その2ヶ月後、竹地から黙示録キャンペーンの再開のメールが届いた。私は以下のメールを竹地に送った。

『大変恐縮ではございますが、サークルを再編した原因の一つにGMへの信用と信頼の失墜があります。

それに対して私の知る限り直接の弁解と謝罪がありません。

このように信頼関係が損なわれているなかで、金銭と時間を使ってセッションを共有するには多くのものが不足しているように思われます。

GMとしてのお考えを拝聴したく存じます。

尚、キャンペーン全体に関わる為、ご回答はPL全体に公開させていただきます。

よろしく願います。』

竹地からの返信があった。

『今年のX月7日11時53分、X月3日13時45分に送らせていただいたメールを再読下さい。それを展開してもらって構いません。』（作者注：月は伏せる）

これは竹地が「同じ事を2度も言わせるな」というメッセージであると私は判断した。さらに言えば竹地は考えを変えるつもりがない事も判明した。他のPLには竹地のメールをそのまま公開した。しかし、誰ひとりとしてリアクションがなかったのである。この理由は後に判明する。私は竹地の妻からの招待で竹地の結婚式の2次会に参加するメールを返信した。すると竹地から『これまでの謝罪と弁明についてお話』したいというメールがあった。何を今更と思ったが、平日のみのスケジュールを教えると竹地は『土日も勘定の内に入れて下さい。』と返信してきた。「謝罪と弁明の都合を竹地に合わせろ」というメッセージと判断し、私は『土日は予約があるので無理です』と返信した。結局のところ、平日に会談する事になった。しかし、私はこの会談で、失望から絶望に変わる事になる。以下は会談メモからの抜粋である。

『竹地の主張

A月：

紗綾PLさんとの対話が出来ないぐらいに病んでいるなら休んで下さい。

B月：

体調が治ったか尋ねなかった。

お膳立てができてなかった。（対話のための準備をしなかった）

C月：

冷静ではなかった。頭に血が上ったので冷却期間が必要だった。
対話はベストコンディションで望んでほしかった。

D月：

キャンペーンを実施するかどうか。
サークル解散をした理由を知りたい。

E月：

結婚式の2次会の返信があったので関係が切れていない。
それで今回の話をする気になった。

- ・謝罪のポイント
- ・A月の状態を放置したこと
- ・C月にもすごい言葉を言ってしまった。
- ・D月のメールに確認がなかった

今後について

- ・PCの自由度があるシナリオを作る
- ・感想戦でそれを確認する
- ・それぞれに気を配る大切さ
- ・楽しめるモノを作りたい
- ・自分自身がPLで楽しめるか
- ・一人が活躍するだけのシナリオではなくなった
- ・お互いを褒める
- ・全員でキャンペーンをやりたい
- ・リスタートしたい

「私が回答を求められたもの」

- ・中村さんも参加して6人でキャンペーンをやりたい。

上記の点を材料に参加をするか否か回答。

- ・土台作りのためにどうするか？
- ・リスタートのために必要なものの提示

竹地：「セッションを中断してもトラブルの当事者同士がその場で解決して下さい」

中村：「え？感想戦でもセッション後でもなく、その場で？」

竹地：「はい」

中村：「決裂して帰ったらどうするの？」

竹地：「その前に話し合いをして下さい。そういう土壌は作りますから」

中村：「……（絶句：それができなかつたから今の惨状なんだが……）」

（今日は謝罪と妥協点を探る会談じゃなかつたのか…？）』

私を失望から絶望へと変える会談であった。C月にサークル解散を発表したら、竹地は『冷静ではなかつた。頭に血が上つたので冷却期間が必要だつた。』という事だつた。言い換えれば「PLが勝手な事をして自分の物語を台無しにしたので怒っていた」という事である。吟遊詩人GMは他者からの介入を何よりも嫌う。竹地が怒っていた事で竹地が吟遊詩人GMであると結論づける事ができたのである。『サークル解散をした理由を知りたい。』と竹地は言つたが、その原因は期限内に竹地が何もしなかつたのも要因である。『結婚式の2次会の返信があつたので関係が切れていない。』と竹地は言つたが、竹地の妻から招待のメールがあつたので参加した。竹地を祝う気持ちではなく、妻の祝福の為に参加した。謝罪のポイントも私が指摘するまでなし。それでもなお、竹地は私に謝るのを嫌がつた。竹地は自分の非を認めたくなかつたのである。『・お互いを褒める・全員でキャンペーンをやりたい・リスタートしたい』という竹地の言葉に信用はなかつたのである。そしてキャンペーンを再開したいと言われてもそんなモノに費やす情熱も気持ちもなかつたのである。『リスタートのために必要なものの提示』がほしいと竹地が言つていたが、その前に竹地がGMとして何もしなかつた事の謝罪はなかつたのである。

『トラブルの当事者同士がその場で解決して下さい』という竹地の発言は「GMとして何もしない」という事であり、分かり易く言えば「ボクは知らない」という態度である。竹地は譲歩もなく、歩み寄りもなく、私の「GMが対処してほしい」と言つた回答は『トラブルの当事者同士がその場で解決して下さい』という実質的な放置であつた。ここに至つて私は竹地にあつた最後の希望が絶たれたのである。

竹地の結婚式の2次会会場で私はサークル会員のほとんどが披露宴に参加したのを知つた。私だけが呼ばれなかつたのである。これによりサークル内で私の味方がいなかつた事が明白になつた。竹地のメールを公開してもリアクションがなかつた理由がここにあつた。

36回目

36話に入る。

『もう参加者各位はご存知でしょうが、所属していたサークルはなくなってしまい、黙示録のPL&PCも再編を余儀なくされました。』

竹地は自分からサークルから去ったが、それを隠した上にサークルがなくなった事になっている。これは竹地がサークルが存在していると都合が悪いという事である。『再編をよぎなくされました。』と竹地は言っているがその原因を作ったのは竹地である。それを隠す必要が竹地にはあった。

『ユウのPLは、GMの意見を訊きたいと言っていました。しかしこちらから投げた意見に対し、意見を返さずに、他のPLに自分の意見をばら撒いているようです。』

竹地の中では私との会談はなかった事になっていた。そして『他のPLに自分の意見をばら撒いている』として私のイメージダウンを行っていた。竹地はキャンペーン維持という保身の為には他人も貶めるという事であった。

『本当にご迷惑をおかけしました。』

竹地が自分の責任を明白にしてその非を参加PLに正す事はなく、私を悪役に仕立て上げる事で自分の正当性を主張していた。これはモラル・ハラスメント加害者によく見られる。

『本来、相手に自分の気持ちを伝えるならば、それを当人に直接伝えることが最も早道であり、間に人が入らない分、正しく気持ちを伝えることができます。』

しかし、今のユウのPLは、それができる状態ではありません。』

『当人に直接伝えることが最も早道』と竹地は言っているが、竹地本人に伝えても全く対応しなかった。気持ちを伝えても無意味だったのである。会談の録音データが残っているにも係らず、竹地は『今のユウのPLは、それができる状態ではありません。』と捏造していた。

『もしかしたら、直接話すということすら怖がり、あるいは思慮のうちに無いのかもしれませんが。』

このように竹地は「自分は最善を尽くした」ふうを装っている。私に竹地を怖がる理由はなく、「話し合いを持つ」と言ったが、竹地はそれすらなかった事にしていたのである。

『無い返事を、待っていても仕方ありません。

また、これ以上ユウのPLに返信を迫り、精神の負担を増やすことは得策ではないと判断しました。』

竹地は『無い返事』と捏造したのは竹地自身が何もしなかったという事が公表される事を恐れていたからである。竹地は配慮しているようで隠蔽工作を行っていたのである。

『よって、ユウのPLが自分の意思で返信をできるようになるまで（参加にしろ不参加にしろ辞めるにしろ）、こちらからは何もしません。

ですが、繰り返しますがおそらくこうなるともう実質、復帰の可能性はありえないと思っています。』

竹地は今までも何もしなかったが、ここで公式に『こちらからは何もしません』と宣言した。つまり、自分の意に沿わないPLは排除するという事である。他のPLの洗脳は完璧だったのに私だけそれが通用しなかったのが余程悔しかったという事である。

『その考えはすでに私の中に固まりつつありますが、取り敢えずはこの出雲神殺変については、「ユウなしで話を進めていた」ことに直す必要がでてきました。これも致し方ないことかと思えます。』

私は参加したセッションからこうして抹消されたのである。

竹地は自分の都合の良いように事実を捻じ曲げないとキャンペーンが維持できないという状況になっていたのである。事実を捻じ曲げるのは吟遊詩人GMの特徴であると同時にモラル・ハラスメント加害者の特徴でもある。

『当人たちの状態を考慮するよりも、今参加してくれている人たちのために。

私はGMとして残りのメンバーのために注力していきます。』

竹地は自分のマスタリングを省みる事なく、吟遊詩人GMとして、モラル・ハラスメント加害者として反省も謝罪もしないという事である。そして洗脳済みのPLしか相手にしないという宣言だった。そしてすぐさま竹地は報復手段に出る。

『さてここから先はユウの話でしたが、ユウは戦線を離脱しました。

かいつまんで言うと、ユウがノスリのテレビでやっていた出雲のお祭り（出雲大社の旧暦10月10日の神迎祭）に、小夜子が映っていたというものでした。』

竹地は自分が原因でPLがキャンペーンを辞めましたとは言わなかった。あたかも私が自分の意思でキャンペーンを離脱したかのように言っているが実際は竹地の吟遊詩人GMのマスタリングと執拗に行われたモラル・ハラスメントが原因である。そしてここでも「NPC>PC」という竹地の構図は変わっていなかったのである。

『約束をすっぽかされて立腹の三浦霞。

征軌を散々いびり倒すことで鬱憤を晴らす（えー』

結局、竹地の「NPC>PC」という構図のモラル・ハラスメントは継続されていたのである。

『いつもはここで終わりなのですが、冒頭で書いたとおり、PL&PCが土壇場で二人離脱という事態になってしまいました。

こうなった事態は私にも責任があり、相手にも責任はあります。』

竹地は「どっちもどっち」「双方に責任がある」と思っているようだが、つまり「吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントが毎回行われるセッション」に耐えろという事である。それができなければ私にも非があるという事である。これはモラル・ハラスメント加害者が被害者の方を「お前こそが加害者だ」と言い立てる事とよく似ている。

『ただどちらが正しい、どちらが間違っているわけでもなく、ずっと平行線のまま、最早相手との溝を埋める努力をするのも虚しく感じました。

最初から偏見を持って見ている、あらゆる行為言葉に対して悪意をもって解釈する人には、最早何を言っても聞き入れられる筈ありません。

だから私も諦めました。』

竹地の認識は『ただどちらが正しい、どちらが間違っているわけでもなく』という事だった。つまり竹地は私に吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントを毎回行ってよいと考えていたのである。いじめの容認であった。

『最初から偏見を持って見ている、あらゆる行為言葉に対して悪意をもって解釈する人』と竹地は言うが今までのセッションで竹地の吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントによるいじめにより信頼が完全に失われたのである。竹地は諦める前にまず自分の行為を反省して声に出して謝罪するのが先であった。

『例えこの人たちが戻ってきても、ギクシャクしたまま続けるのは、もう私の精神衛生上、無理であると判断したからです。』

竹地は吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントを指摘されたら『私の精神衛生上、

無理である』と言ってなにもしない事でPLを離脱へと誘導したのである。

『重ねて言いますが、私はこれからは残ってくれた人たちのためにGMをやっていきたいと思います。

それこそいろいろと酷いことを言われましたが、そんなことは気にせず、前を向いてしっかりとこれからも続けていきたいと思います。』

竹地は自分に都合のよい、自分の吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントを受け入れてくれるPLだけが欲しかったという事である。そして「吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメント」の指摘は竹地にとって『酷いことを言われました』という事で竹地が被害者を装っている。さらに『そんなことは気にせず』という事で今後も竹地の「吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメント」は続くという事である。

こうして、私は竹地に絶望した。 (終)

あとがき

あとがき

ようやくここまでたどり着いたという感じである。

私が竹地からいじめを受けていたと感じたのはサークル以外の場所で遊ぶようになり、結果的にモラル・ハラスメント被害者と同じく「加害者から距離を置く」しかかかったという事である。そして竹地が今も吟遊詩人GMのマスタリングとモラル・ハラスメントをしていると聞いたのでこれを書く気になったのである。

書いている最中に気分が悪くなったが、それでも書いたのは、

「竹地は私にしたように妻や子供にもモラル・ハラスメントをするのではないか。」

という危惧からだった。私がここで公表する事によってある人によっては気づきになり、予防になり、何らかの参考や武器になれば幸いである。

モラル・ハラスメントはこれまでに述べたように精神的ないじめ、拷問である。その発端は「あれ、これおかしい」と感じた事が始まりである。それが積み重なった時、限界を迎えたのである。

いずれ、完全版が出せればと思う。ここまで読んでいただいた皆様に感謝を。

ありがとうございました。2012.12.26